

私と世界とアツちゃん先生

藤岡 惇退職記念文集編集委員会 編

文理閣



基礎経済科学研究所の福島県南相馬市への調査にて（2013年3月18日）
（森井久美子さん撮影）



藤岡ゼミの2・3・4回生合同コンパのスナップ（2007年、草津にて）

はしがき

藤岡惇（ふじおかあつし）先生は、立命館大学で三四年の長きにわたって教鞭をとってこられました。今年三月で定年を迎えられました。もちろん先生の研究生生活はこれからも続くと思われませんが、定年退職されたことは一つの節目であります。

「人間発達ゼミ」（基礎経済科学研究所自由大学院で活動しているゼミ）ではこれを機に、編集委員会を発足させ、先生のこれまでの広範なご活躍の一端を、記念文集という形に編むことにいたしました。

私たちの呼びかけに応じてエッセイを寄せていただいた方は、一〇七名にのほります。これほど多くの方々からメッセージや写真などを頂くことができたのは望外のことであり、先生につながる方々が国内のみならず世界中に広がっていることに改めて驚いております。いずれも先生の人がなりが豊かに生き生きと描かれ、先生はこの本を「宝物」と言われています。

ご寄稿いただいた皆様に心よりお礼申し上げますとともに、編集の都合で、タイトルを修正したり、文章の一部を割愛ないし変更させていただきましたことをお詫び申し上げます。

最後に、出版にご尽力いただいた文理閣の黒川美富子代表、山下信編集長にお礼申し上げます。

二〇一三年四月

「藤岡 惇退職記念文集」編集委員 一同

第一部 21世紀のコペル君との育ちあいの人生

——私はどう生きてきたか

藤岡 惇

I	私の人生のいくつかの画期	15
II	基礎研で社会人と学びあった「人間発達ゼミ」の三八年間	29
III	立命館大学での三四年間の教育をふりかえる	31
IV	研究面を振り返ると	48
資料	「平和の経済学」のレポート・クイズ課題（二〇一二年度後期、抄）	56

第二部 私と世界とアツちゃん先生

アツちゃん先生は生涯学習の名案内人	66
-------------------	----

青山 富真

いつも時間と空間を超えた巨大な視点	芦田 文夫	68
歌と活動を通して	阿部ひろ江	69
アツちゃん先生と宇宙戦争	有地 淑羽	71
藤岡先生、お礼申します	安斎 育郎	73
平和教育をともに担って	池尾 靖志	76
藤岡先生の思い出	池田 清	78
「月曜会」の世話人として想う、立命館のこと、教養教育のこと	池田 研介	79
亡父・池田一郎と藤岡先生	池田 伸	84
「石川君らしくない論文でしたねえ」	石川 康宏	85
小学一年生の惇さん	石澤 雅雄	87
手渡される「体験」―東京大空襲とヒロシマ・ナガサキ	IZUMI	88
「くずれぬ平和」の種をまく人	伊藤 恵子	91
学生時代から変わらぬ人となり	井上 昇	93
関西にFUJIOKAあり	今堀 洋子	96
広島からブラッドフォードへ	岩崎 容子	97
中学の元社会科教師からの期待	岩下美佐子	99
藤岡さんとのミシシッピーでの思い出	上杉 忍	101

「宇宙の平和」を求めて、英国と米国の地から祝福を	デエイブ・ウエップ	103
ブルース・ギャグナン		103
藤岡さんの魅力	宇佐見義尚	106
アッチャン先生と平和なエコ・エコノミーの創造	牛田 有香	107
藤岡先生のように、あなたはなれますか	遠藤 雅彦	109
二〇〇九年の平和の旅でお会いして	大槻とも恵	115
アッチャン先生ありがとう	大橋 昂平	116
一八年間に二〇〇名余の学生を引率して	ピーター・カズニツク	118
ソフトなパワーで世界を平和に	片岡 明	120
「コスタリカ・コーヒー」と「平和友の会」二〇年	片山 一美	121
ミミズから国際平和を!	桂 良太郎	122
「平和友の会」から見た先生	川畑 康郎	123
ベルギーの地からの追憶	岸本 聡子	125
	オリビエ・フーデマン	125
アッチャン先生とゼミと私	木村千壽子	127
藤岡先生と過ごした二日間	久保 壽彦	129
平和と希望の村―濟州島・カンジョン村	黒木 鞠子	131

少年の心を持つ大学教授さん	黒澤 英昭	134
若き日の藤岡さんとの出会い	伍賀 一道	136
ゼミと平和交流セミナーの経験	小嶋 緑	138
世界に羽ばたいた折鶴	小谷美智子	140
藤岡先生の退職を祝って	ロバート・コウルチェック	142
	金 明妃	142
世界の若者に好かれるProfessor	近藤 紘子	144
爆睡と田んぼ―藤岡さんの思い出	酒井 重喜	146
「藤岡」学の提唱に向けて	阪本 将英	147
遠く福島よりアツちゃん先生の御退官をお祝いします	相樂 航	148
藤岡さんとの出会い	櫻井 善行	150
大地との絆を保持するクラーク（篤農家）を撲滅したスターリン	佐々木 洋	152
藤岡流・肩に優しい平和運動	佐藤真喜子	155
藤岡先生との出会い	佐中 忠司	158
私の先生	澤井 隆彰	159
卒業後二〇年、ベトナム・中国の無錫から日本を考える	澤本 和也	161
藤岡さんの三〇年前の出来事	塩見 全一	164

第三回世界平和博物館会議と藤岡先生のこと	島野由利子	166
福島の地から広島・長崎を訪ねて	白石裕紀子	168
見ず知らずの私を支援してくださった、懐の深い先生	神直子	170
体育会系尾崎ゼミ生	菅野光公	172
京都と立命館そして藤岡ゼミ	杉岡知裕	174
東アジア民衆交流と連帯の架け橋	高橋年男	175
『アメリカ経済と軍拡——産業荒廃の構図』の出版に関わって	高橋邦太郎	177
軍事化との闘いと、スヌーピーと	高原孝生	179
近江草津論から見た「アツちゃん先生」の三つの顔	竹谷利子	180
基礎研人間発達ゼミの三八年	田中幸世	182
信念の歴史家、藤岡さん	田中宏	183
Atsushi: a friend of Goddesses and Gods 神々の友達・アツシ	谷川佳子	185
ゼミナールで「平和なエコ・エコノミー」を学んで	辻本成実	189
藤岡先生との思い出	TERRY	191
ますます社会が必要とする研究者、藤岡さん	豊島耕一	192
藤岡先生へ、感謝のことは	鳥井真木	194
平和学に生きる	中嶋大輔	196

健康第一でご活躍ください	中谷 武雄	198
リレー形式の講義を分担して	中野 克彦	200
ネーミングの天才	仲野 優子	200
一回生・基礎演習の思い出	中山 麻美	202
藤岡先生と双頭の天龍	西岡 由香	204
千度の逆風と	西口 清勝	205
植物のように育ててくれたアッチャン先生	乗松 聡子	208
虹の子クラブの活動から見えてきたアッチャン先生	萩原 暢子	211
大地に根ざした生活への転換を	長谷川義和	213
藤岡先生とネットと私	服部 寿子	215
藤岡せんせえー	花垣 ルミ	217
米国南部の慣れない土地での生活を楽しむ	樋口 映美	218
楽しかったオン・デマンド講座	平野 慶次	219
情熱家の粘りに脱帽	廣末 良子	221
藤岡先生と私	深澤 竜人	224
定年退職後に学んで	福田俊一郎	226
これからも世界の人々とともに活動を	藤井 悦子	228

「平和」への熱い想いを抱く人	藤本 博	230
アメリカ人エコノミストからの期待	アン・マークセン	232
基礎研の思い出など	増田 晃一	234
超越的方法と内在的方法	松井 暁	236
期待にお応えできなくて(笑)	松尾 匡	238
シカクい頭をマルくする	松田 文雄	240
藤岡経典の確立を	松本 朗	242
アッチャン先生への断想	三浦 正行	244
「未来」を知る人―「真理」の探究者	南野 泰義	246
藤岡先生の思い出	村上 達哉	248
虹の子クラブ初代保護者会長の栄誉をたたえる	森 徹	249
生きた仏様のような先生	森下 美穂	251
いつかサステイナブルな小さな村づくりを	森田 清和	252
これからの社会をどうすべきか	八尾 信光	255
アッチャン先生の一言…国際会議で爆笑	山根 和代	257
ワールドフレンドシップセンターでの出会い	山根美智子	259
“happy lunch”の声の主―国際平和セミナーでの出会い	山本美穂子	261

朗らかに楽しみながら事を成し遂げる信念の人	横田	数弘	264
人間発達の道を探し求めて	吉田	省二	266
近江草津論と焼き芋騒動	吉田	真	268
アッチャン先生への感謝状	吉山	保	270

藤岡 惇教授 略歴・研究業績一覧			271
------------------	--	--	-----

第一部

21世紀のコペル君との育ちあいの人生

——私はどう生きてきたか

藤岡

惇

二〇一三年一月二一日に「平和の経済学」の最終講義の場をお借りし、「君たちはどう生きるか——21世紀のコペル君に」と題して、定年退職の記念講義をさせていただきました。定期試験直前にもかかわらず、多数の受講生、同僚、卒業生や友人の皆さんがお見えになり、光栄でした。本稿は、その時の内容をベースにしていますが、本書に寄稿していただいた友人の皆さんのエッセイに創発されるかたちで、必要な修正と補充を加えたものです（ただし紙幅の関係があり、後半の研究面のところは大幅に省略しました）。

最終講義を聴講された皆さんをなせ「コペル君」と呼ばせていただいたのか。理由は単純でして、今から七五年前の一九三七年に刊行された吉野源三郎さんの名著『君たちはどう生きるか』にあやからうというわけです。吉野さんは、自分の甥っ子を「コペル」君と名付け、コペル君との対話という形式をとって「君たちはどう生きるか」を問いかけようとされた。当時の日本の若者にたいして、「長いものにまかれろ」式の「楽で得な生き方」だけを選んでみると、逆に「身の破滅」を招くと警告された。流行の支配的な考え方を鵜呑みにせず、「真実一路の人生」を歩んでほしい。確かに事実としては、ヒトと地球が中軸となり、太陽や星が周回しているように見える。しかし地球とヒトが太陽の外周を回っているのが真実の姿ではないか。真実（地動説）を優先させて、事実（天動説）を打ち破ったコペルニクスの生き方に学んでほしいと、若者に説こうとされたのです。

吉野さんの本が出版されたのは一九三七年のこと。同年の二月一日に、日本軍は南京を陥落させます。八月に上海に上陸した後、簡単に勝るとたかをくくっていた日本軍は、四か月に及ぶ

中国軍民の頑強な抵抗にてこずり、死傷する友軍兵士の続出に激高していました。意外の苦戦で糧食の不足する日本軍にとって、大量の捕虜を抱えるわけにはいかず、「捕虜はとらない、現地で処分する」という方針を出す。しかも中国軍の敗残兵、ゲリラ・便衣兵と彼らをかくまう「反日」の民衆の区別がつかない。そのなかでベトナムのミライ（ソンミ）やイラクのファルージャでおこった虐殺事件と同様の虐殺が南京城内と郊外の双方で大規模に発生したわけです。日本国内では「陥落祝賀の提灯行列」が津々浦々を練り歩いている、まさにそのときに「南京大虐殺」が同時進行していたわけです。

二〇一二年は、南京大虐殺の七五周年の年であっただけに、一二月一三日には、南京の犠牲者を追悼する慰霊祭や大小さまざまな集会在、中国内はもとより世界各地で行われました。寄稿いただいた乗松聡子さんからの通信によると、カナダでも東西二つの大都市で大規模な慰霊行事が行われたそうです。トロントでは市議会が全会一致で追悼決議を可決し、ロブ・フォード市長が「南京大虐殺を記憶する宣言」を行いました。西海岸のバンクーバーでは、一二月九日に日系・中華系・コリア系・欧州系など多様な文化的背景をもつ市民が集まり、大虐殺の被害者を追悼するヴェイジルや対話集会、キャンドルウォークが行われました。

しかしこの事件を引き起こした当の日本で、同様の動きが見られたでしょうか。サンセバスチャン国際映画祭で二〇〇九年最高賞に輝いた陸川監督の映画「南京！、南京！」は、中国国内を始め、世界各地でヒットしましたが、右翼民族派からの攻撃を恐れて、国内の商業館ではまったく上映さ

れなかった。ですから七五周年当日でも、日本では大規模な追悼集会もなかったし、南京で何が起こったのかをめぐる学術集会もなかった。一月二三日が南京虐殺の七五周年の日であることを知っていた日本人は、どの程度おられたのでしょうか。犠牲者を慰霊し、無念に心を通わせた日本人が、どれほどおられたのでしょうか。

それだけではありません。尖閣諸島（魚釣島）をめぐる中国海軍の行動、長距離ミサイルや核弾頭を開発する実験を強行した北朝鮮の行動をみて、「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼」して軍事力を放棄するとした憲法九条の想定は、成り立たない。米軍と肩をならべて、中国や北朝鮮と対抗していくには、日米軍事同盟を強化するほかないし、この際「憲法を改定して、集団的自衛権が認められるようにするべし」という意見が、日本国民の間で広がっています。「平和を欲すれば平和づくりに備えよ」ではなく、「平和を欲すれば戦争に備えよ」という一九世紀的考え方が、再びまかり通る時代となった。「戦争ができる国づくり」をしておいた方が、結果的に、周辺の国々に「なめられず」、自国の権益も守れるし、平和を維持できるというわけです。根底には、どこかで戦争でも起こり、生産能力（過剰となった工場設備や失業者の大群）を大規模に破壊してくれない限り、現下の深刻なデフレ不況を打開することはできないといった類の思考が再び台頭しているのではないか。そんな空気さえ感じます。

I 私の人生のいくつかの画期

父のこと

これまで口外を控えていたのですが、この際ですから、私の個人的な生育史について触れておきましょう。私の父親は藤岡 要といい、奈良県天理市藤井町の出身です。大和盆地の東辺にそびえる龍王山（標高五八六メートル）の中腹にある、戸数二〇軒の藤井という集落に、父は一九一四年に生まれました。五人兄弟の末っ子で、狭い谷間を耕してコメを作り、炭焼きを生業とする貧しい農家でした。二階にはカイコ棚があったので、養蚕をしていた時代もあったようです。

昭和の初年のことですが、父は高等小学校を終えると、京都で本を商っていた長兄を頼って、京都の西陣に流れて来て、長兄の始めた京都書院という本屋の手伝いをしました。兄から独立して東京で古本屋を開業した時期もあり、そのときに「本屋をやるには、いくらかの学識があったほうがよい」と神田の専修大学の夜学で学んだことがあるというのが自慢でした。もちろん小学校卒ですから、正式に入学したわけではありませんが。

戦争が始まると、二等兵として徴兵され、酷寒の満州でえらい目にあつたと嘆いていました。朝方おしっこをすると、そのまま凍るほど寒かったとか、一面に大豆と高粱畑が続いていたとか…。毎日、塹壕掘りをしていたので、「ヒト殺しはしていない」と言っていました。ひょうきんで、人

を笑わすのが好きなどところとか、私の気質には父親譲りのところが多いようです。

なぜ満州の地の気候は、そんなに酷薄だったのか。最近、安富 歩・深尾葉子編『満州』の成立——森林の消尽と近代空間の形成』(二〇〇九年)という本を読み、そのわけがわかった気がします。近代に入り、この地の森林が切り倒され、大豆のプランテーション経営に転換されたのです。私が若いころに調査した米国南部に起こった事態と満州でおこった変化とは似ているなど感心しました。私は近代主義(分業・分離を前提にして工業化・都市化・産業化を促進しようとする)必然の視点から博士論文を書きましたが、バンダービルド大学の文学者の間にはアグラリアン(エコロジストの先駆)の流れもあつたわけですから、こんな自然史の視点から研究を深めていけば、面白かつたはずと反省しています。

二人の母のこと

私には実母と継母がいました。実母のほうの旧姓は植田幸子といひます。母方は、藤岡家の農民——商人的文化とは異なり、大阪市に住む保険会社のサラリーマンで、いっばしのインテリでした。ただし大阪大空襲で焼け出されるなかで、貧乏になり、奈良県高取町の遠縁の家に疎開させてもらっていました。口減らしの意味もあつてか、一九四六年に父と「身分」違いの結婚をし、京都市上京区の借家に嫁入りしてきたのです。当時は「男一人にトラック一杯の娘さん」といわれた時代。戦争・空襲がなければ、このような異色のカップルが生まれることはなかつたでしょう。

私の生家は今も残っています。自宅から五〇〇メートルほどのところですが、当時は体も小さかったため、狭い家とは思わなかったのですが、小さくて質素な家です。それでも生家の近くに住んでいると、魂のルーツを思い出せ、イノチの循環が実感できるので、心が安らぐものです。

終戦直後の栄養状態が悪い時でしたが、一九四七年五月に私を生んだときは、母はまだ健康であつたようです。おかげで私は健康に育つのですが、一九四九年一月に弟が生まれた頃から、母の体がぼろぼろになり、結核を発病します。母には二人の弟がおり、この時期、弟さんも、私たちの狭い家に居候し、二人とも京都大学工学部を卒業し、技師になりました。

食料事情もあり、母の病状は次第に悪化します。病気が移らないようにと、別室に隔離されたまま、一九五三年に母は死んでしまいます。私が六歳、弟が四歳のときです。子どもの将来を案じながら、死んでいったのだらうと思います。葬式の終わった後に、わが家の階段に座り、「死」の意味が理解できず、「お母さんはどこに行つたの」と不安げに聞いていた——これが、私の記憶に残る最古の心象風景です。もし戦争がなかったならば、栄養価の高いものを食べることもできたでしょうし、こんなに若死にすることもなかったと思うと、母もまた、無謀な侵略戦争の犠牲者であつた気がします。

古い道具類や骨董品を売り食いする名家が、敗戦後の京都には目立ちました。これに着目して、父は商売を古本屋から古道具屋に変えます。京都の目抜き通りの三条の富小路かいわいに店を借りて、生計を立てていました。男一人で、商売をしながら二人の幼児を育てるのに難渋した父は、翌

年の一九五四年に、郷里に近い宇陀郡榛原町の城井ハルエという女性と再婚し、ハルエさんが私たちの継母となります。幼児期に股関節脱臼したことから、成人後も股関節に障害をもった人で、人はいいのですが、神経質な人でした。

とくに私は捨て育ちに近かったもので、「世間から後ろ指さされない良い子ども」にしつけようと、よく体罰をされました。それでも私を「しつける」のは至難だったようです。小学校一―三年に私は、たえず「おねしょ」をし、学校でも「失禁」したり、吃音がはじまったり、という「自意識過剰」の症状を呈するようになったのは、この時期の心理的葛藤の産物だったと思います。

今にして思うと、「体罰」は全くの逆効果だったと感じます。結婚後、私は家庭内で一度も暴力を行使していません。それでも（いやそのために）三人の子どもは人格的に成長し、自立していったことは私の誇りです。

「個の自立」と大学院への逃げ込み

引つ込み思案のところのある弟と比べて、わたしの方が外向的で商売人向きだと判断した父は、家業を継ぐように圧力をかけてきました。この時期、父は古道具屋をやめて、じゅうたんやカーテンの商売に転業していましたが、経済の高度成長と生活の洋風化の追い風をうえて、繁盛していたのです。学問をすれば頭（ず）が高くなり、商売人には向かなくなると、父は考えていました。高校進学時には進学校には行かずに実業高校に行き、大学には行かずに丁稚奉公した方が良いという

のが、父の方針でした。

しかし私としては、商売人で終わるのは、あまりに大志がなさすぎると不満でした。家業はいつでも継げるので、その前にもっと人生の可能性をためてみたいと考えたのです。「経済学部」に入り、経済学を修めると、商売人にも役立つかもしれない点を売り込んで、まずは京都大学経済学部に入りました。その後は家業の継承圧力から逃げ込もうと、大学院進学をめざしました。なんとか大学から大学院へと逃げ込めたのは、当時の社会風潮を背景に、母が理解者となってくれ、親父を説得してくれたこと、そして何よりも弟の方が家業を継ぐ決心をしてくれたことが大きく、二人には感謝しています。

わが心身で世界を計測しようとした二度の世界旅行

大学時代、家業のしごとを手伝う中で、お金をためて、二度海外に出かけました。最初は、大学一回生の夏の一九六六年八月でして、一九歳の時。渡航先は国交のない「共産中国」でした。「赤色の専制国家」とか、「ハエもいないし、飢えた人もなくなった理想国家」とか、対極的な評価のある「謎の国」でした。

なぜ中国に旅しようと考えたのか。京大入学直後に、体を鍛えるために陸上競技部に入るとともに、頭を鍛えるために「中国研究会」というサークルに入っていました。その関係で全国中国研究会連合が「第2次学生訪中友好参観団」を募っていることを知り、「百聞は一見に如かず」と申し

込んだのです。社会主義国というのは、伝えられるように本当に人類の未来社会なのか、どうか。実地で確かめなにかぎり、社会科学を探索する事実的基盤が整わないと考えたからです。色眼鏡で見ずに「危険な共産中国」への渡航を認めてくれた両親の度量には感謝しています。

一九六六年八月といえば、毛沢東たちが、拠点の上海から紅衛兵運動を始めた時。二週間ほどの旅でしたが、「毛沢東思想は無敵」「偉大な毛主席は不落の太陽」とかを歌いながら、杭州の西湖沿いを行進する「文革支持」のデモ隊に会うなど、「文化大革命」運動の始まりを目撃しました。当時の中国の直面していた課題は、いかにして分離と分業を進め、大都市を形成し、産業化を進めるかであり、共産主義の主体基礎を創るとする文化革命は、その意味では時代錯誤の運動だったので、資本主義を超える社会建設を建設しようとするならば、①精神労働と肉体労働の差別、②都市と農村の差別、③農業と商工業の差別という三大差別の克服が基本軸になるという当時の毛沢東の主張には、正しい面があり、今も私の根底に根付いています。資本主義が爛熟期に入っていた欧米の左翼知識人が、文革に期待を抱いたのには根拠があったと思います。

海外旅行の二番目は、四回生時の一九六九年九月から一二月にかけてです。友人の熊谷君と二人で、五〇日間かけて、インド・アフガン・ソ連・欧州を放浪する旅をしました。すでに大学院進学を決めていた二一歳の私は、小田実さんの名著『なんでも見てやろう』に感化されており、ソ連とインド社会の実態、それにアウシュビッツで何がおこったかを追体験しないかぎり、社会科学研究の前提条件が満たせないと考え、リュックサックを背負い、ユースホステルに泊まりながら、わが

身体で世界の諸問題を計測しようとしたのです。ここで体得したことは、どこでも生きていけるという自信です。その後の私の言動のエネルギー源となったと思います。

八年ほど前に基礎研の人間発達ゼミで、戦前の上田自由大学の事績を訪ねる一環として、信州上田の無言館と信濃デッサン館を訪れたことがありました。そのとき、館主の窪島誠一郎さんが、危険な人と良い人を見ぬく眼力や詩的直観力を磨く「世界放浪科」と「鑑賞科」からなる「自由大学」を創りたいという夢を語っておられました。私の体験も同じことを教えています。

二五歳時の結婚——家族的自立と経済的自立の同時達成

大学院の博士課程の三年に進級した一九七四年三月二六日に大鳥居芳子と結婚しました。妻と最初に会ったのは、私が学部二回生ですから二〇歳の時。芳子のほうは別の大学の一回生で一八歳の時でした。学生サークルの付き合いで、その後六年間の付き合いをへて、ゴールインにこぎつけたわけです。私は二五歳（二か月後に二六歳）、芳子は二四歳になっていました。すでに芳子は京都市内の小学校教諭になって三年目が終わった時。私は結婚後も二年余りは、大学の常勤教員のポストに就けなかったものですから、その間は妻の扶養家族に入りました。妻が定職をもっていたので、親の援助がなくても経済的に自立でき、安心して研究ができる精神的な基盤を築くことができました。は有難かったです。

私が二六歳の時に長女の朋子が生まれ、三〇歳になってすぐに長男の潤が生まれました。末っ子

の暁が生まれたのが、三二歳の時でした。若くて元気な時に家族を形成できたことも、充実した家庭生活を営むうえで好都合だったと思います。末っ子が就職し、三人の子どもが全員、親からの自立を達成できたのは二〇〇五年のことですから、今から八年前のこと。その二年後に、妻は三六年間続けた小学校教師の仕事をリタイアし、職業人の時代にはやりたくてもできなかった「仕事」を、今は生き生きと実践しています。このような生活に私も合流できるかと思うと、わくわくしています。

「社会（運動）」と「人間発達」の視点の発見——「エコ・社会経済学」へ

私の学生時代というのは、大学紛争（闘争）の高揚した時代でした。学生運動のなかでは、大学解体か大学改革かという目標の違いもあって、いわゆる全共闘系の潮流と日本共産党の影響下の潮流とが競い合い、対立しあっていました。ただし双方の潮流ともに、ロシア革命と中国革命の影響が強く、マルクスとレーニン、毛沢東の言葉が飛び交っており、対立はすぐに暴力的衝突を招く傾向がありました。それにたいして、私が研究していた米国南部の公民権運動では、マルクスだけでなく、ガンジーやキング牧師の影響が強いのが特徴でした。運動のスタイルも、「強者の非暴力」「非暴力直接行動」が果敢に展開され、効果を発揮していました。それはなぜか。民主主義が成熟したところ、文化的道徳的ヘゲモニーをめぐる闘いが展開するところ、そして「核の時代の平和」を考えると、ガンジー主義やノーム・チョムスキーらのアナーキストから学ぶことが多いと私は考え

るようになった。マルクスとガンジーを高次統合させるとどうなるかを、考えるようになっていったわけです。

アメリカ南部の変貌のしくみの解明を試みた私の著作『アメリカ南部の変貌』で博士号をいただいたのですが、第二次大戦後にこの地に生じた巨大な変化や「強者の非暴力」運動を展開できた土台を考えた時に、「資本主義の全般的危機」論と一体となった「国家独占資本主義」論では、とうてい解明できない。このような一面的な「理論」を克服したいという思いに突き動かされて書いたわけです。この本では社会運動や人間の成長に着目し、民主主義の質、貨幣収入に奴隷的に依存しなくても済む独立不羈の自営農民層のありかた、生涯的な学習権の必要性を強調して結びにしています。それでも今にして思うと、世界的な構造変動の問題やエコロジーや文化への着目が不十分であつたと反省しています。

歴史研究の意味を「現代と過去との対話だ」と特徴づけたのは英国の歴史家のE・H・カーでしたが、歴史研究を現代と切り離しては、さらに言うとは、恋愛のばあいでも言えることですが、相手が好きにならないと（嫌いでも重要だと思わないと）、もっと深く知りたい、研究したいというパッションが沸きません。私としては、現代をふかく洞察するために歴史研究をしたかった。その意味で、経済史という科目ではなく、アメリカ経済論という現状分析の科目で採用していただいたのはラッキーでした。スムーズに現状分析の方面に関心を移すことができましたからです。

学部と大学院の時代、イギリス経済史を研究する尾崎芳治先生のゼミに属していましたので、加

藤房雄さんや西牟田祐二さんなど、社会経済史を専攻する同学や友人が私には多いのですが、研究室仲間、歴史研究から現状分析に転換していった人は、当時はそれほど多くはなかった。例外的事例が私なのですが、転換の決断は間違っていないかと思えます。

模索と新展開への転機としての一九九〇年代

ソ連邦が崩壊・解体した一九八九年の九月から米国南部のチャペルヒルにあるノースカロライナ大学に初めて留学しました。チャペルヒルは、一九八〇年代初めから南部の黒人問題の研究仲間として親しくしていた上杉 忍さん一家が長期滞在していたところですが、それまでに何回か訪問したことがあり、土地勘がありました。上杉さんと共同の友人であった労働史家のリオン・フィンク夫妻、今は専修大学で健筆をふるっておられる樋口映美さんには大変お世話になりました。

父が危篤となった一九八九年一月二六日に、急きよ帰国しましたが、その前夜、大雪のために足止めされたボルティモアのホテルで、ルーマニアの独裁者のチャウシェスク夫妻が銃殺されたというニュースが飛び込んできて、衝撃をうけたことを思い出します。

葬式をすませた後、米国に戻り、一九九〇年の二月の聖バレンタインデイの午後、ニューヨーク南郊のラトガーズ大学を訪れ、アン・マークセン教授の研究室を初訪問しました。当時五歳くらいの一人息子のデーヴィッド君を交えて、近くのレストランで夕食を共にしました。

後に大統領となるビル・クリントンとアンとは、ワシントンのジョージタウン大学の同窓であり、

ベトナム反戦運動の同志となり、ビルの初恋の相手となった人です。ビルがしだいに左派から中道左派にスタンスを移すなかで、二人の関係にも距離ができ、最終的に別れることになった事情は、ビルの自伝に詳しく書かれています。それはともかく、アンは、偉ぶることのない素朴な人で、気がよく合いました。アンもまた日本訪問時には私を頼りにするようになり、デーヴィッド君を伴って立命の末川会館に一週間ほど滞在したこともあります。一九九三年の頃ですが、私の末息子の暁と同じ年齢であり、息子の通う共同学童保育所「虹の子クラブ」にデーヴィッド君を数日預かったのも良い思い出です。

米国留学とグローバルゼーションへの疑問

その後一九九五年九月から一年間の研究休暇を得られ、前半の六か月は、ラトガーズ大学のアンのもとで客員研究員となり、交流を深めました。たまたまラトガーズの教科書売り場で、ローズマリ・ルーサーの『ガイアと神——地球を癒すためのエコフェミニストの神学』(Rosemary Ruether, Gaia and God: An Ecofeminist Theology of Earth Healing, 1992)に出会い、感動した記憶は鮮烈です。

九六年の三月から九月までは、ワシントンのアメリカン大学に居を移し、直野章子さんやピーター・カズニックさんと旧交を温め、一九九六年八月の第二回目の交流セミナーにピーターがアメリカン大学の学生を引率して、訪日する事業を米国から支援しました。

六月のある日、IFG（グローバリゼーションを考える国際フォーラム）という団体が、近くのジョージ・ワシントン大学を会場に「経済グローバリゼーションの社会的・政治的・エコロジ的・文化的コストを問う」という大規模なティーチインを開くというポスターを見ました。興味がわいてきて、三日間の集会に参加して、強烈な知的刺激を受けました。「エコロジと文化の国際協会」を主宰するヘレーナ・ノーバック・ホッジ、¹「Yes」という雑誌を出しているデーヴィッド・コーテン、フィリピンとタイを拠点にセンスのいい活動を展開していたウォルデン・ペロー（フォーカス・オン・ザ・グローバルサウス）やヴァンダナ・シヴァさんと出会ったのも、この時だったと思います。帰国後の一九九七年一二月に、気候変動防止の枠組み条約を具体化する締結国会議の第三回会議（COP3）が京都で開かれ、京都議定書を生み出すのですが、その折に、寄稿いただいた岸本聡子さんが事務局長をしていただいたアシード（A Seed Japan）の若者と交流したのも良い思い出です。当時私は、憲法施行五〇周年を記念する立命館のイベント企画委員会の事務局長をしていたのですが、平和憲法を「地球との平和」に拡張するイベントを組織して、「気候列車」に乗って欧州からやってきた若者や日本各地のエコリーゲの学生たちの交流会や宿泊所をあっせんする世話をしました。欧州からやってきた若者たちが、近くの円町のエツソのガソリンスタンドで抗議の座り込みをしたときにはびっくりして、岸本さんとともに収拾に努めたことも思い出します。

一九九六年のAPERCの大阪会議に際して、市民社会レベルでもう一つの集会を組織された神田浩史さん（AMネット―当時は「APEC Monitor NGOネット」）とお会いし、神田さんにその

後一五年以上も、立命館大学の「社会開発論」や「平和学入門」を担当していただくことになったのも、この時期でした。神田さんや徐勝さんを介して、「赤ひげ」医者ともいえるべき「傑物」の色平哲郎さんと知り合ったのもこの時期でした。

一九九九年一二月の「新しいミレニアムを迎える若者たち」でのアルン・ガンデイ、サティシユ・クマール、ヨハン・ガルツングとの出会いは、感動的でした。とくにサティシユ・クマールさんが、キリスト生誕後の一千年は「神のミレニアム」であり、その後は次第に「神」の位置に人間の脳が就くようになり、「人間のミレニアム」となったこと、したがって第三の千年紀の課題というのは、「神」と「人間」とを正—反とすれば、「否定の否定」——「合」として「自然のミレニアム」という形で「神」を高次復活させるのが課題だという提起に衝撃を受けました。この衝撃は、「アニメズム（自然崇拜）を唯物論的基盤のうえで高次復活」させようという私の考え方を育む触媒となりました。

二〇〇一年の心肺停止と第二の人生

二〇〇一年六月一〇日の朝八時頃に突然、私の体は心室細動をおこし、駆け付けた救急車の救命士さんによる電気ショックで、九死に一生を得るといふ事件が発生しました。ちょうど五四歳のときでした。攣縮（れんしゆく）性狭心症の突発が起ったのです。ほぼ九割の確率で突然死するところを、生き返ったのです。この折に、頭脳は、随意筋は動かせることはできて、体の内面の不

随意筋は動かすことができないという真実に気付きました。「心臓よ、動け」と脳がどれほど指令を発しても、心臓の筋肉は脳のいうことを聞かずに、停まるときは停まるということに気が付いたわけです。

脳も体も、心室細動の予兆をつかめなかった。予兆をつかむことができない体になっていたのですね。「賢い体、丈夫な脳」をつくる必要を痛感しました。

それまでは私（自我）がイノチを所有している、なぜなら脳の指示どおりに、体の筋肉は動くし、脳の意思で、イノチを捨てる（自殺する）こともできるのだから、と考えていたのですが、まさにイノチ観（自然観）のコペルニクスの転換をしたわけです。先にイノチが発生し（母親が祖母の子宮のなかに胎児としているときに、胎児（母親）の卵巣には未来の私となるイノチの素（卵子）が、すでに存在しているそうです）、分娩され、四―五歳ほどに心身が成長した後に、自我が形成され、その後に脳によってある程度イノチを左右できることに気付くわけです。死ぬときも、意識が先に消え、その後に臨終の時を迎えますね。ほけ老人となれば、意識がなくなった後何年もイノチは生き続けます。

二〇〇一年以後に、自我よりもイノチを先に置き、エコ自然を土台とする「エコ社会経済学」づくりに拍車がかかります。サティシユ・クマールさんを介して辻信一さん、キャサリン・サリバンを介してジョアンナ・メーシー、「懐かしい未来ネットワーク」をたちあげた鎌田洋司さんを介してヘレーナ・ノーバツグ・ホツジ、きくち・ゆみさんを介して非暴力コミュニケーションや九・

一一の眞実究明ネットの方々と知りあうようになり、ゲストとして授業にお呼びするようになったのもこの時期でした。

Ⅱ 基礎研で社会人と学びあった「人間発達ゼミ」の三八年間

在野の研究協同組合Ⅱ基礎経済科学研究所・自由大学院を舞台にして、一九七五年一〇月以来の三八年間、私は、「エコロジカルな人間発達を考える」ゼミ（略称「人間発達ゼミ」）のチューターを勤めてきました。一九九六年までの前半の二二年間は隔週で、その後の一七年間は、月一回——三日曜日の午後二時から九時ころまで（酒場での夕食会をふくんで）、六―八名くらいの参加者で、いろんな本を読んできたわけです。これまでのゼミの開催回数は六〇〇回を超えているでしょう。今は、カール・ポラニーの名著の『大転換』を読んでいます。

基礎研の淵源をたどると、一九六八年九月の「経済学基礎理論研究所」の設立に行きつきます。大学民主化闘争のなかで、勤労者のための経済学研究を勤労者とともに推進する組織が必要であり、このような労働者研究者（今日流にいうと「市民科学者」）を無数に育てることが、大学民主化、学問の民主化のカギだという気持ちで、基礎研の設立の原動力でした。「民衆とともに、民衆のための経済学の創造運動を」というスローガンに鼓舞され、勤労民衆に「働きつつ学ぶ権利」を保障

する「自由大学院」を設立しようという運動に火が付いたのは一九七五年頃でした。この年の六月、基礎研理事長の重森 暁さん（大阪経済大学の前学長）、夜間通信大学院設立準備委員長の森岡孝二さん（株主オンブズマン代表）の連名で「夜間通信大学院設立の訴え」がなされました。お二人とも当時は三〇歳になったばかりの「研究者の卵」。同年の一〇月に一〇〇名余りの参加者を集めて、「無認可大学院」の開校式が行われたわけです。

当時の私は、京大大学院経済学研究所の博士課程三回生に在籍していた院生であり、新婚早々の二七歳でした。①勤労者を市民科学者に育てる課題、②大学院生を「市民派のエコノミスト」に育てる課題、の二つを同時に達成しようとする運動を、「基礎研」という組織が始めようとしているというニュースに接した私は、その理念に共鳴して、この運動に参加する決心をしました。「民衆と共に民衆のための科学の創造」という、大学民主化闘争の宿題が実現できるかもしれないと心が動いたからです。当時は、坂井昭夫、成瀬龍夫、二宮厚美さんなど錚々たる若手スタッフが、ゼミ担当を務めていました。

それから三八年がたちましたが、理論と現実とをつなぐ読書会活動を続けたことが、私の脳を現実の歴史と文化とにつなぎとめる役割を果たしてくれました。ソ連陣営の解体をはじめとした歴史の突風に吹き飛ばされずにすんだ、いわば現実生活とエコロジーと文化に根を張る作業の中軸が基礎研であったと感謝しています。人間発達ゼミに集うゼミ生の皆さん（うち半分は私よりも高齢なのですが）が、本書を編集する中軸となってくれたことも特筆しておきたいと思います。

III 立命館大学での三四年間の教育をふりかえる

一九七九年から担当した欧米経済論（アメリカ経済論）

三三年間に及んだこの科目の実践は、次の四段階に分けることができます。

第一段階は一九七九年から一九九四年までの一六年間。この時期、担当する欧米経済論は四単位科目でしたので、四月から翌年の一月まで、通年で三〇回の講義をおこなっていました。私がおつばら講義をし、学生側はノートをとり、教えた内容を記憶に留め、最後に一月末の定期試験で、記憶しているかを検査するという「伝統的スタイル」の授業をおこなっていたのです。ブラジルの成人教育家のパウロ・フレイレの表現を借りると、私は「銀行家」で、学生は空っぽの「金庫」。金庫のなかに預け入れた「情報」が、しっかりと保管されているかを、試験のつどチェックするとう役割を果たしていたわけで、恥ずかしいことでした。

ただし注入する「情報」についてはできるだけ鮮度のよい素材を集め、見栄えよくするための努力は惜しみませんでした。たとえば一九八二年度ころに、「アメリカ経済——その史的構造・資料集」を作成し、一八〇の図表や古典の抜書きを収録し、大学の印刷担当職員に頼んで、二〇ページの教材として、無料配布できたのは、ありがたいことでした。一九八三年—八四年度ころには、改訂版をつくり、一六三の図表を配布。一九八七年度の三訂版になると、二三一の図表・資料を収録しま

した。内容が膨大になったので、二分冊にし、過去の出題例や参考文献を載せたこともありました。アメリカ南部のチャペルヒル（ノースカロライナ大学）での半年間の留学を終えて帰国した一九九一年度以降になりますと、「10のトピックス」を提示し、この問いにどう答えたらよいのかを軸に講義するようになります。このあたりから、知識を体系的に教え込み、覚えさせるのではなく、問題を提起し、この問題をどう解けば、人々は幸せになるのかを受講生とともに考え、試行錯誤するというやりかたに移行し始めました。経済教育学会での議論も、私の変身を教育学的に根拠づけ、支えてくれました。

第二段階は一九九五年—一九九九年までの五年間です。九五年度から、半期完結で一五回講義をするという「セメスター」制に変わり、欧米経済論は、アメリカ経済論と欧州経済論とに分割され、ともに二単位となりました。私は、アメリカ経済論のほうを担当するようになり、授業時間数が半減したために、気の毒に思った当時の学部執行部（とくに西口清勝先生）が、「平和の経済学」という科目を私のために新設してくれました。この新科目をもてたことで私がどんなに喜んだかは後に触れることとし、ここではアメリカ経済論の教え方の変化に触れます。九五年の秋にラトガーズ大学に滞在していた折に、「ホスト教授」のアン・マークセンの授業を聴講する機会がありました。院生の教育助手に指示して、いろんな論文や本の抜粋を大量に印刷し、これを受講生に読ませたうえで、レポートを作成させるというのが、アンの授業の特徴でした。ワシントンに移り、ピーター・カズニック教授の授業にも出ましたが、彼の授業方法も同様のものでした。

米国から帰国した一九九六年頃から、彼らの影響もあって、統計図表だけでなく、文献資料の抜粋集も配布し、資料を読ませたうえでレポートを書かせるという方法を展開し始めました。ただしこの時期は過渡期でして、レポートと定期試験とを併用して、成績を評価していました。とはいえ授業のレクチャーの重点はレポート作成の支援におき、モティベーションを高めるために、ビデオ映像を多数見るようになったのもこの時期です。

第三段階は、二〇〇〇年度―〇四年度の五年間です。この時期になると、定期試験は廃止し、教室外で五―七種類のレポートを作成してもらい、レポート集の出来栄で成績評価するようになりました。ただしレポートは書き溜めておき、最後に簡易製本して、「作品」として提出してもらっていたので、受講生同士で読みあったり、学び合ったりはできませんでした。この時期に、マハトマ・ガンジーの孫にあたるアルン・ガンディさん(M. K. ガンジー非暴力研究所主宰)をお招きし、講演してもらったこともありますし、中嶋大輔さんが「授業新聞」を何回も作成・配布してくれました。

最後の第四段階は、二〇〇五年から一一年度まで。論題を公表してから二週間ほどでレポートを書き上げてもらい、所定の期限内にWebCT(大学が科目ごとに開いてくれるホームページ)への掲載を求めた時期です。第四段階になると、WebCTを開くと、他の受講生のレポートを読むことができます。他人の作品からの盗作や、コピー&ペーストが簡単にできるといふ弊害もありますが、他面、「ソ連型社会とは何であったのか」、「デフレはなぜ生じたのか、戦争以外の方法で克服する

にはどうしたらよいのか」、「自分で考える力を養うために何をしたらよいのか」といった答えが定まっていない問題、人生をかけないと解けないようなテーマが出題されたばあいは、受講生同士に討論させ、熟議させたほうが、良いレポートが出来上がります。「前回の受講生のレポートを読み、もつとも感動したレポートを数篇選び、理由を書いてください」といった問いは、毎年出題します。

二〇一一年度はこの科目担当の最後の年。受講登録者は過去最高の六八二名に達しました。様々なレポート課題を九回出題しました。一回のレポートにつき、三―五個の問いに答えてもらいますから、合計すると三五問ほどの問題に取り組んでもらったことになります。受講者のなかで、レポート集の提出にこぎつけたのが五七八名、合格点に達した者は四四八名となりました。経済学部生は一学年に九〇〇名ほどいますから、最後の年には七割の学生が受講し、六割がレポート集を提出したことになります。

アメリカ経済論は、一二年度からは後任の中本 悟先生が担当されています。立派な後継者が得られ、安堵しています。

一九八〇年度から始め、二三期生まで迎えた藤岡ゼミナール

立命への赴任の翌年の一九八〇年から二〇一二年まで経済学部生を対象として専門演習（藤岡ゼミナール）を開いてきました。この間に半年の研究休暇（留学）を四回、一年の研究休暇を一回とすることができました。ゼミナールは二年間持ち上がりを原則とするので、研究休暇の前後二年ほど

は新規のゼミ生募集を停止します。そのため三四年の間に、藤岡ゼミナールとしては、二三期生まで迎えたこととなります。

客観的な世界情勢の変化と私の関心の変化の両方を反映して、この間にゼミ募集のテーマは、大きく様変わりしました。一九八〇年代前半は「現代アメリカの経済と社会」、八〇年代の後半から九〇年代前半にかけては「日米経済摩擦の原因と解決策」といったテーマで募集することが多かったように思います。九五―九六年の一年間のアメリカ留学の際に、経済グローバル化への反対運動が盛り上がる米国社会の動向を体験したこともあり、九〇年代後半になると、「経済グローバル化を考える」「平和なエコ・エコノミーの創造」「グリーンエコノミーを考える」といったテーマを掲げることが多くなりました。

因みに二〇一三年度「ゼミ（二回生）募集の呼びかけ文」は、つぎのようなものです。

演習テーマ…平和なエコ・エコノミーの創造

いま私たちは、容易ならぬ世の中に生きています。第一に、「二〇〇年に一度」といわれる金融恐慌が発生し、巨大なキャピタルロス（株価と地価の暴落）が生まれました。莫大な公費の投入にもかかわらず、南欧諸国の国家信用不安を招き、キャピタルロスの再拡大、デフレと大量失業の危

機を引き起こしています。

第二に、原発とは「ゆっくりと爆発する原爆」のことですが、この暴龍を飼いならし、「魔法のランプ」内に閉じ込め、電源として利用することは可能だとされてきました。しかしランプは壊れうるし、簡単な壊し方があることを、フクシマの惨事は知らしめたわけです。地震や津波が襲わなくても、軍事攻撃が発生し、核燃料プール（とくに四号炉）の底に穴が開くと、冷却水が抜け、核燃料は再び溶融・飛散するでしょう。

第三に、竹島・尖閣列島の帰属とかわかって、韓国・中国・台湾との緊張が高まっています。植民地支配とアジア太平洋戦争について真実の共有と和解ができていないことが、問題の根源に横たわっています。

第四に、以上の危機と絡まりながら、エコロジーの危機が深まっています。人間を失業させずに化石エネルギーだけを失業させるタイプのエコ産業革命をおこし、循環型の「低炭素経済」へと高次復帰できるのか。自然順応型文明への高次復帰が可能なのかが問われているわけです。

このゼミでは、①哲学を重視し、自然・社会をヒト（脳）の外部ではなく、土台に位置付けるとともに、②上記の四つの危機が、どのようなしくみで深刻化してきたのかを跡付け、③経済的な手法を用いて「平和なエコ・エコノミー」を設計・創造していくにはどうしたらよいか、といった諸問題を探りたいと思います。

ゼミの運営方法

「正解のない、未解決問題にとりくむのですから、私は自分の見解をおしつけられないように努めます。試行錯誤を恐れずにプロジェクトをおこなうことのできる社会力・企画力・調査力を養うゼミにしたからです。若者にとって一番大切な権利は「失敗する権利」ですから、私はコーチ役に徹しようと思います。」

二回生時には、テキストを軸にした活動を行います。三回生になると、ゼミ運営は企画班に任せ、ゼミをサークルのように運営します。「学ぶとは、変わること」ですから、各班とも、問題解決のための「行動計画案」をつくり、その成果を学内ゼミナル大会で発表します。事前に班単位の予備学習(サブゼミ)を行ってもらうのですが、これが充実してくると、毎回のゼミでは当然即妙の即興劇が進行することになるでしょう。成績評価については、皆さんにまず自己評価してもらい、その結果を重要な素材として行います。

過去のゼミテーマ

これまでゼミ生とともにサイパン島、小豆島から産廃の島の豊島(てしま)、沖縄の竹富島、九州の由布院、長浜の黒壁、沖縄本島の調査に行きました。ことしの夏は、二三名の参加で、福島・宮城の調査に行きました。南相馬市では桜井勝延市長と懇談し、原発に近い小高地区を訪問、仮設住宅を訪ねました。福島大学の未来創造センターの協力をえて、飯館村の被災者で作る「かーちゃ

んのカプロジェクト」と交流し、福島の学生たちと友達になりました。ゼミ生同士の仲の良さがゼミの伝統。学園祭の出店や有志合宿などが、自主的に行われています。

受講生に望むこと

調査旅行を含むゼミ行事には必ず参加してほしい。度胸と愛嬌のある人、ボランティアをしたい人、土壌にミミズを発見して喜べる人。ガンジー、ジョン・レノン、宮沢賢治や金子みすずの生き方や哲学が好きな人が応募してくれると嬉しいです。

一九八七年から教養教育の平和系科目を担当

一九八七年度に「軍縮と平和」という科目のリレー講義の担当を引き受けて以来、この種の平和系の教養科目（今は「平和学入門」と改称）を二四回担当してきました。この科目は、一九九五年からは二単位の「平和学入門」と「戦争の歴史と現在」とに分割され、BKCでは前者は二コマ、後者は一コマ開講しています。「戦争の歴史と現在」の担当は、二〇〇〇年代半ばから同僚の金丸裕一先生にお任せし、私は「平和学入門」のコーディネイタに専念するようになりました。

以下では、二〇二二年度の「平和学入門」の実践を紹介しましょう。全一五回の講義のうち私が、サンドイッチ式に最初の二回と最後の二回と、合計四回担当し、その間を神田浩史さん（世界水フォーラム市民ネットの事務局長、今は岐阜県垂井市で地域づくりを担う）、藤田明史さん（ガル

ツング博士のトランセント運動の日本の中心)、そして寄稿していただいた中野克彦さんに担当してもらいます。四人によるリレー形式で授業を運営するものですから、ばらばらにならぬように、最終回の授業では四人の講師団が集まり、「未来の平和づくり」の展望を語るというシンポジウムを開いています。またこの授業には、よくゲスト講師(とくに戦争体験者や平和運動・教育の実践者)を招きます。最近三年間は、活力にあふれた神直子さん(ブリッジフォアピース代表理事)を招き、好評でした。

この科目も一九九五年前後から、定期試験を廃して、レポートを書いてもらう方式に移行しました。私の担当部分では、レポートを三回書いてもらいます。二〇一二年度の藤岡第三レポートのばあい、以下のような出題をしました。参考までに紹介しますと――

藤岡第三レポート

できるだけ早期に立命館大学国際平和ミュージアム(衣笠キャンパスの東側、馬代通りに面す)を訪問し、展示や資料などを参考にして、以下の(1)―(3)の全問に答えてください。

(1) 以下の四問から三つを選んで調べてください。

① 一九三七年七月に日中両軍の本格的な戦争(北支事変、日華事変)が始まりました。上海に大軍を派遣した日本軍は、上海での中国軍民の四か月におよぶ頑強な市街戦に手こずりながらも、首都の南京を攻略すべく西進し、二月二三日に南京城内に侵攻・陥落させました。「捕虜は取らない、

現地で処分する」という日本軍の方針もあって、その過程で南京郊外と城内で多数の中国人軍民が殺害されました。これが「南京虐殺」とよばれています。「南京虐殺」は戦争犯罪だったという見解と、そうでないという見解がありますが、どちらが真実に近いのでしょうか。

② いわゆる「日本軍慰安婦」には「性奴隷」的虐待をつけた者が多いという見解とそうでないという見解があります。どちらが真実に近いのでしょうか。

③ 満州事変以来の一五年戦争(アジア太平洋戦争)は、日本にとって「自存自衛の戦争」であったという見解と「侵略戦争」であったという見解があります。どちらが正しいのでしょうか。その根拠は何ですか。

④ 大日本帝国による朝鮮統治の不当性を承認し、朝鮮独立運動の志士たちへの弾圧を日本政府(天皇)は公式に謝罪してほしいという見解を二〇一二年八月一四日に韓国の大統領が述べました。この見解は正しいですか、間違っていますか。

(2) 一九四五年八月に終わった戦争は、二、三〇万人の日本軍関係者の死(うち六割は餓死、一六%が溺死、五割の遺骨は戻らず)、一千万人ともいわれる周辺諸国民の犠牲をもたらすかたちで、終結しました。このような惨事を招かない別の道(選択肢)はなかったのでしょうか。どの時点で、どのような別の道を選んでいたら、紛争のもっと平和的で創造的な解決がありえたのでしょうか。重要度の点で三つの時点を選んで、別の道の可能性を論じてください。「戦前の失敗」を繰り返さないために、「大日本帝国」の歩みからどのような教訓を引き出したらよいのでしょうか。

(3) 他の受講生は注目しないだろうが、重要だと考へる「掘り出し物」のテーマをミュージアム展示のなかから一つ、探しだし、調べた成果を披露してください。

これまでは、ミュージアムに行ったふりをして、過去の見学レポートやミュージアムのホームページなどを適当にコピー・ペーストして、作成したものが目立ちました。そこで一二年度は、見学した証拠にミュージアムが発行するシールをレポート表紙に貼り付ける。シールがないと五点減点という厳しい措置をとることにしました。その効果はてきめんで、二〇一二年度後期の私の受講生の見学数は、(後述する「平和の経済学」の受講者を含めると)七一六名に達し、BKCからの訪問学生数の七割余を占めたほどです。

一九九五年から「世界の学生と被爆地を巡礼するセミナー」を担当

一九九五年から毎年夏になると、八月一日から一〇日まで、世界の学生と被爆地を巡礼し、核の惨事を繰り返し返さぬ道を語り合う「国際平和交流セミナー」を続けてきました。引率教員はつぎの四人——アメリカン大学(AU)のピーター・カズニック教授、二五名の原爆乙女をニューヨークのマウントサイナイ病院で整形手術をうけさせる運動を推進した谷本 清牧師の娘さんで、AUを卒業した近藤紘子さん、カナダのバンクーバー在住で、通訳としても活躍していたたく乗松聡子さん(ピース・フィロソフィーセンター代表)、それに私の四人です。アメリカンと立命館という二大学

の協力を得て、このユニークなプログラムを一八年間続けることができました。

きっかけとなったのが、当時AUを卒業したばかりの直野章子さんの来訪でした。彼女のお母さんと私の畏友の島 浩二さんの奥様とが友人同士という関係があり、一九九四年八月二三日の昼下がりに、彼女が新設もない平和ミュージアムに私を訪ねてくれたのです。AUを二か月前に卒業しましたが、在学中に原爆投下をめぐる米国人の意識水準の低さにショックをうけてきたと直野さんは語りました。「戦後五〇周年にあたる一九九五年度のAUの夏セッション科目として、原爆投下を学ぶ新科目の開設を求める請願運動を始めたい。については請願の賛同者になるとともに、新科目が設置された暁には、日本での研修プログラムの実施に協力してほしい」と要請されたのです。彼女の熱意に心を打たれ、可能な支援を約束しました。

数か月後、請願運動が功を奏して、九五年度のAUの夏セッション科目に「核の歴史——ヒロシマ・ナガサキを超えて」が特設されることとなり、ピーター・カズニック教授が担当教員、直野さんが企画担当職員となったという吉報が届きました。同じ頃、スミソニアン航空宇宙博物館が企画していた原爆展が、米国各界の反発をよびおこし、中止されるといふ事件がおこり、出品を予定して米国に渡っていた被爆資料が宙に浮いたわけです。そこで直野さんが中心となって、AUで被爆資料の展示を引き受けることになりました。「もう一つの原爆展」は一九九五年の六月に開かれ、広島市長はじめ、多数の被爆者がAUを訪れる機会となりました。

九五年八月初めに、ピーターと直野さんに引率されて、AUの学生八名が、立命館大学の国際平

和ミュージアムにやってきました。私は、平和学を受講学生から一〇名のボランティアを募り、京都・広島をめぐる一週間の旅を共同実施したわけです。

九六年以降もひきつづき、AUはこの科目を開設し、ピーターは、毎夏一〇名から一五名の学生を引率して、京都・広島・長崎の地を訪れるようになりました。対応して立命館側も九七年度以降は、このプログラムを国際平和交流セミナー科目（二単位）として公認し、私が引率教員となりました。両大学共同企画の「原爆学習の旅」は、こうして始まり、二〇一二年で一八回目のセミナーを終えたわけです。なお直野さんは、その後、米国で博士号をとられ、帰国後は半年間、立命館大学で非常勤講師をされ、今は九州大学准教授として、平和研究に活躍されています。

このプログラムは、旅行社が組織する「バック型の旅」とは対極にあるスタイルをめざしています。三九三年前にメイフラワー号に乗ってプリマスの地にたどり着いた「巡礼者」たちと同様に、八月一日の初顔合わせ集会で「平和巡礼団」の憲法にあたる「京都議定書」を策定します。①昨年度に参加した四名の先輩学生が「学生リーダー」として再登場し、イベント企画の多くを彼らに委ね、学生主体の運営を行うこと、②全員に共益が及ぶイベント・現地移動費・歓迎夕食会・お別れパーティーなどの費用として、参加者全員から（教職員からも！）八〇〇〇円を「税金」として集め、「共通基金」を設立し、学生リーダーの管理下で運用し、余剰金が出れば、最後の集会場で返金すること、③巡礼団の旗は、「スヌーピー」のタオルにすることなどが決まります。「スヌーピーのタオル」は、私の二人目の孫娘が保育園で使っていたのを借用したものでした。

いまだ福島第一の核惨事は収束していませんし、北朝鮮の「強化型原爆」（恐らく三F爆弾）の実験も行われ、東アジア各地では、日本企業の不買運動が盛り上がっています。今年で六三年目を迎え、東アジア史上最長の戦争となった朝鮮戦争をいかに終えたらよいのか。「核の惨事」の連鎖をどう停め、東アジアの平和を創造するには、どうしたらよいかについても、議論を深めます。

このプログラムは、学術面でも多くの成果を上げてきました。カズニツク教授は、映画界の巨匠のオリバー・ストーン監督と組んで「語られざる米国史の内幕」という一〇巻のテレビ映画シリーズを制作し、全米に大きな反響を呼んでいます。原爆投下の内幕を描いた「巻」を含むシナリオは近く翻訳され、三冊に分けて早川書房から出版されます。また一〇巻のテレビ映画シリーズも、NHKのBS1で放映が予定されています。スミソニアン論争から一九九年をへましたが、ピーターの執念と本プログラムの触発力とが合成されることで、原爆投下とは何であったのかを公正に議論できる舞台が整ってきたのです。

乗松聡子さんたちが英語で書いた本の日本語版（ガバン・マコーミック／乗松聡子『沖繩の怒—日米への抵抗』法律文化社）も出版されました。プログラムのなかで広島市立大学の田中利幸さん、鹿児島大学の木村 朗さんと交流してきた成果が、このような形で実ってきたわけです。

「乗松さんという素晴らしい通訳がつくので、英語が得意でなくても、平和に強い関心があれば、それで十分。一〇日間、英語のシャワーを浴びることで、英会話能力は伸びるし、世界各地に心がつながる友達をつくるチャンスです。近藤絃子さんの案内で、六八年前に被爆者がさまよった道と

建物の跡をたどる『平和の巡礼』の旅に出かけませんか」と、二〇一三年度も応募を呼び掛けるつもりです。

一九九六年から「平和の経済学」を担当

一九九五年から科目の時間数を四単位から二単位へ半減（半期四か月で完結）するという教学改革が実施され、私が責任を負う欧米経済論がアメリカ経済論（二単位）と改称され、時間数が半分となったことはすでに述べましたが、これにあわせて、同じく二単位もので「平和の経済学」という科目が新設されました。私の研究上の関心が、南部の地域開発や黑人問題から、しだいに米国の軍需・宇宙産業や地球の上の平和をささえるための基盤として、地球と人との間の健康な関係の再建や、ヒトの心と身体との間の精神的な内なる平和の問題にシフトしつつありましたから、「平和の経済学」の新設は私にとって願ってもない贈り物でした。おかげで前期にアメリカ経済論、後期に平和の経済学を担当でき、わたしの思いのたけを学生と分かち合うことができるようになりました。

一九九六年から二〇〇八年までは私一人で講義しましたが、研究休暇をとった二〇〇九年には、友人の池尾靖志さんと伊藤恵子さん（里山研究庵ノマド研究員）にお願いしたことが機縁となり、一〇年以降は、伊藤恵子さんが五回、私が一〇回担当するというリレー講義に移行しています。

「平和の経済学」のレポート課題の軸にあるのも、「頭で論理的に考えるだけでは答えが出ない問

「題」、つまり「収束する問題ではなく、拡散する問題」です。たとえば「宇宙になぜ我々は存在するのか」、「イノチとは何か。私（自我）がイノチを所有しているのか、それともイノチが私を生きており、私を自然体に発達させているのか」といった問題。あるいは人生をかけ、全人格を投入しないことには、答えが出ない問題（「ヒトは戦争を廃絶できるのか」、「核兵器をなくすことはできるのか」等々）といった問いも含まれています。

ご参考までに二〇一二年度後期の「平和の経済学」の受講生二五〇名に課したレポートの論題を本稿の末尾にあげておきます。伊藤さんも出題されますが、伊藤レポートのばあいは、肉筆での作成を義務付けます。そのためネットサーフィンやコピー・ペーストによる安易なレポート作成は不可能となりますし、漢字をしっかりと書く訓練になります。日本語の作文能力を鍛えるうえでも効果が高いように思います。

二〇〇三年から七年間、「近江草津論」を担当

琵琶湖草津キャンパスの地元学として、二〇〇三年から「近江草津論」という特講科目を作ってもらい、二〇一〇年まで七年間にわたって、担当しました。当初三年間は、寄稿いただいた吉田真さん（日本クモ学会の元代表）と共同担当し、二〇〇五年度の立命館の教育実践優秀賞をいただきました。その後は仲野優子さん（しがNPOセンター専務理事）と共同担当しました。その節には、寄稿いただいた竹谷利子さんをはじめ、草津の市民団体や企業・市役所の皆さん方に大変お世話に

なりました（詳細は、藤岡惇・仲野優子「学生のやる気を引き出す地域連携——『持続可能な共生型社会』をめざす提言づくりの経験」清水亮・橋本勝『学生・職員と創る大学教育』二〇一二年所収、わたしのホームページ <http://www.peacefulbiz/> から読むことができます）。

二〇一一年からは、「葬式をしない」ことで有名な大阪の浄土宗寺院の應典院主幹の仏僧で、本学准教授でもある山口洋典さんが担当してくれています。山口（グッチー）さんは、国際平和交流セミナー広島長崎プログラムの立ち上げ期に学生リーダーとして活躍した人。学生主体の運営方法を開発してくれた立役者でしたので、奇縁を感じます。

教育面で立命館からいただいた最大の支援は、何と言っても、教材として申請すれば、数十ページの資料であれ、何百部でも無料で印刷・製本してくれるサービスでした。この制度を利用して、一〇〇種類を超える教材を印刷してもらい、受講生に配布してきました。研究室を訪れた方であれば、私の部屋が何十種類もの教材の備蓄倉庫になっていることにビックリなさったことでしょう。

経済（学）教育学会で学んだこと

一九八一年に経済学教育学会につながる「経済学教育を考える集会」が北海道大学でありましたが、この年から勘定すると三二年ほど、経済（学）教育学会（二〇〇三年に「経済教育学会」と改称）の活動に参加してきました。経済教育のありかたを学生・生徒の発達を軸にして組みなおす——そのために積極的な経験を発掘し、交流し、普及していくことが目標でした。人間の発達科学

の専門家・教育学者・中高の社会科教育実践者など、通常の専門学会では会えないような人々と交流できたことは幸いでした。専門知と教養智の両方を支える土台は「野生智」⇨「常民智」であることを教えていただきました。とくにKJ法を創造的に展開された林義樹さん、数百人規模の講義でも、主体的な学びの場を創造するメソッドを開発された富山大学の橋本 勝さん、また寄稿いただいた亜細亜大学の宇佐見義尚さん、札幌学院大学の佐々木 洋さん、大月短期大学の長谷川義和さんとの交友によって教育者としての人生が豊かなものになりました。

IV 研究面を振り返ると

尾崎芳治先生との出会い

自分が何者であるのかが見えにくい青春期には、よい教師と出会えることは貴重なことです。その点では学部学生から大学院時代までの八年間、指導していただいた尾崎先生には大恩があります。わたしの最初の論文「プランテーションの経済構造」を書いた時に、高く評価していただいたおかげで、自信をもつことができました。自信過剰と自信喪失との間を往復する、傷つきやすい「若くて不安定な魂」とっては「適切に褒めていただく」ことほど、力になることはないからです。古典に立ち戻ることの大切さも教えていただきました。

すこし先輩にあたる世代でいいますと、森岡孝二さんと安斎育郎さんのお二人の生き方から深い影響を受けました。お二人の問題提起、あるいは委ねられた仕事を引き継ぎ、実践するなかで、私自身も多くの発見をし、人間関係を広げることができました。

このような人々との多彩な交流のなかで、一九七〇年代には、一步一步、レーニン・毛沢東主義の影響圏から、私は離脱していきます。そして一九九〇年代になると、非暴力主義のガンジーの影響をうけた「社会派エコロジスト」へと変わっていったと自己規定しています。あえて強引に特徴づけをすると、「マルクス・レーニン主義」から「マルクス・レーニン主義」へと移っていったと言えなくもありません。「レーニン主義」とは、ジョン・レノン。マルクスとガンジーないしレノンとの融合こそが、「国家産業主義」への移行を正当化する教条の体系に堕した「マルクス・レーニン主義」から自らを解放するうえで、導きの糸となったように思います。

学内での活動

一九九六年―一九九八年には、国際平和ミュージアム企画局長を務めました。一九九八年四月に、国際平和ミュージアムの上部機構として立命館大学国際平和センターが設立され、これに伴い、人権問題研究室の機能は、九九年に国際平和センターのなかに新設された「平和・人権研究セクター」のなかに発展的に継承されることになりました。九九年以降は、この「平和・人権研究セクター長」となり、新生に配布していた『ガイドブック 私たち人間の権利』の改訂のしごとに取り組みま

した。また二〇〇〇年に入ると、教養教育センターの副センター長となり、BKCでの教養教育の責任者ともなりました。ただし立命館大学は、専門学部中心の仕組みがあまりに強すぎ、教養教育への私の思いは、空回りした感が強いのが残念です。

二〇〇五年にミュージアムの全面刷新のなかで、一階部分に国際平和メディア資料室がオープンしました。同年以来、メディア資料部門のチーフとなり、収書の充実をはかる仕事をおこなっています。

また立命館の教学理念と実態の劣化を憂え、学部を超えたBKC教学の下からの改善改革を図ろうとして、池田研介、吉田真さん（いずれも理工学部）などと語らって、二〇〇五年二月一九日にたちあげたBKCの「月曜会」の世話人を務め、その後七年間に三九回の例会を積み重ねました。変質する立命トップ層にたいする危機感から六〇歳代に入って立命館教職員組合の活動も再開し、二〇〇七年度は職場委員、二〇〇八年度は執行委員、二〇〇九年度前期には研究休暇をいただきましたが、二〇一〇年度には副委員長、二〇一一年度には再び職場委員を務めました。

社会活動

わたしの長女の小学校入学にあわせて、私の地元の京都市上京区の東部地域で、共同学童保育所（子育て協同組合）の「虹の子クラブ」づくりに参加し、初代の保護者会長を務めました。クラブは昨年に三〇周年を迎え、通所児童数が八五名を越える大規模な学童保育所に成長しています。指

導員集団を束ねるリーダーの森徹さん、二代目の会長を務められた塩見全一さんに寄稿いただきました。毎年一五名程度の児童が入所しますので、三〇年の間に四五〇名の子どもたちを迎え、彼らを「遊びのプロ」に育てたことになります。一〇周年の折には、『ぼくら遊びのプロなんや——子育て協同組合の挑戦』という本を出版しましたが、三〇年記念誌にも「虹の子クラブの将来像を考える」という提言を寄稿しました。

一九九九年五月中旬にオランダのハーグで二二世紀を「不戦の世紀」にするための方策を話し合う「平和のためのハーグアピール集会」が開かれましたが、その場で「宇宙への兵器と核エネルギーの配備に反対する地球ネット」と出会い、それ以降広島の大庭里美さんとともに、「地球ネット」の諮問委員（現在は理事）を務めるようになりました。その縁で、地球ネットの中心リーダーのブルース・ギャグナンさんやディブ・ウエップさん（リーズ・メトロポリタン大学、英国最大の反核団体CNDの議長も兼務）たちを日本での講演旅行に招くようになりました。

二〇〇九年春に韓国のソウルで開かれた地球ネットの総会では、済州島南岸のカンジョン村への韓国海軍港の建設に、身を挺して闘ってこられたソンヒー・チョイさんと並んで、同年の「宇宙の平和賞」を受賞する栄誉も与えられました。

昨年三月には、非暴力の闘いを続ける済州島カンジョン村で、地球ネットの総会が行われたのですが、沖縄の普天間基地の騒音訴訟を担う人、ジュゴンと生物多様性を守るという視点から、辺野古への基地移設に抵抗する人たちとともに、訪韓して参加。「生きとし生けるもの」の「生命平和」

の旗を掲げて、粘り強く非暴力の抵抗運動を展開する宗教者のエネルギーにビックリしましたし、自然生態系への暴力を抑えるために、あえてモーターボートを使わず、カヤックを漕いで建設予定地のグロンビ・ロックの聖地での「祭事」に参加したことも、忘れられない思い出です。その折には、英国のトライデント原潜のファスレーン基地を三六五日間封鎖する非暴力直接抵抗運動を完遂したアンジー・ゼルターさんと出会うことができ、鮮烈な印象をもちました。

二一世紀のコペル君に——自然観のコペルニクスの転換を

「事実は真実の敵である」という言葉があります。スペインの文豪セルバンテスがドンキホーテに語らせた言葉です。人間社会を基軸にして外界を観察するかぎり、確かにヒトと地球の周りを、太陽や星が周回しているように見えます。事実認識としては天動説が正しい。しかし地球とヒトが太陽の外周を回っているのが真実の姿ですよね。

コペルニクスの時代から五〇〇年をへて今日、同様の錯誤が、いっそう深刻な姿をとって立ち現れています。ヒトの脳を基軸として自然をエコロジーではなく「環境」として捉える自然観が台頭し、支配的になってきたのです。「地球環境保護」、「環境庁」…など、皆さんも「環境」という言葉が無批判に使っていませんか。

「環境」とは、英語で言うところの“environment”という単語の翻訳です。それでは environment とは何か。語源をたどりますと、“viron”（環・土地の周囲を意味するフランス語）に行き着きます。

つまり「人間の生存に必要な外圍条件の総体」というのが、「環境」という意味なのです。土星にたとえますと、ヒトの脳や社会というのが、土星の本体であり、自然というのは、土星を外（辺境）から囲んでいる「環」なのです。その意味では、environmentを「環境」と訳した人は、正確な翻訳をされたものですね。

自然を「環境」と見るのは、コペルニクス流にいうと、まさに唯脳論（究極の観念論）の視点にたった「天動説」なのです。なぜ再び「天動説」的自然観が台頭するに至ったのか。今日の支配的哲学である、脳を中心におき、全てを分けていくデ・カルト的思考の必然的産物だからです。

この究極の観念論が、社会科学全体をゆがめている主犯であることを直視してほしいと思います。真実（地動説）を優先させて、事実（天動説）を打ち破ったコペルニクスの生き方に学び、自然を「環境」と呼ぶことが錯覚であることを自覚し、「環境」という言葉を使わない、使わせない運動、自然をエコロジーと呼ぶ文化運動、自然観を転換させる文化革命を推進しませんか。この哲学的立場の転換から、経済教育を始める運動を展開しませんか。

しかしどうしたら「生きる」とは「イノチの移し替え」であると観じ、「イノチが私を生き、私を自然体に発達させている」と悟ることができるのでしょうか。そのためには「殺される牛や鶏の顔に自分の親の面影を見る」訓練をし、「大地を殺すことは自分を殺すこと」「毒死した万物の声に身悶える」（石牟礼道子）感性と体験を育むことを、経済教育の原点に定置する必要があると思います。そうすると「チッソは私であった」（緒方正人）、「東電は私であった」という考えが生まれ

るし、「日本軍も原爆を開発していたら、起死回生の手段として、米国に投下しなかったらどうか」という問いかけが自然と出てくるのではないか。伊藤若冲さんの「野菜涅槃図」ではないですが、「生命平和」を支えるイノチの曼荼羅絵の世界、「至らなきの自覚に発する慈悲」の世界が浮かんでくると思います。

私も変わるし、あなたも変える

ナチスに占領されていたオランダのアムステルダム の隠れ家で、アンネ・フランクという女の子が暮らしていました。一九四四年七月一五日付けの日記に彼女は次のように書きました。「この世界が荒廃した荒れ野と化していく様子をわたしは、目の当たりにしています。……しかしそんな時でも美しい星空を見上げると、いつの日か……このような非道な出来事は終わりを告げ、平和と安らぎの世界が戻ってくると信じていることができます」と。宇宙、自然界は愛と適応の力に導かれて、一層多彩で多様で、そのゆえにバランスのとれた美的存在へと自己創発していることをアンネは直観していたのではないか。このような「詩的直観」の力が、彼女の生をささえたのではないかと感じます。しかしその二〇日後の八月四日午前一〇時、アンネは家族とともに治安警察に逮捕され、アウシュビッツ収容所に連行され、一五歳と九か月の短い生涯を閉じたと伝えられます。

二〇〇七年九月、北極に近いアイスランドはレイキヤビクの入り江に、ニューヨークに住むヨコ・オノさんが「イマジン・ピース・タワー」を作りました。亡き夫ジョン・レノンの誕生日の一

○月九日から、彼が暗殺された一二月八日まで、毎晩このタワーから一五本の光を天空・宇宙にむけて射光しています。「一人でみる夢は、ただの夢にすぎません。しかし皆で一緒にみる夢は、現実になります」と、ヨーコさんは、呼びかけています。

モハニダス・カラムチャンド・ガンジーは、「Be the Change」―「変化を望むならば、まずあなたが変わりなさい。平和を望むならば、まずあなたが平和の人になりなさい」と述べました。No Way to Peace, but Peace is A Way” (平和への道はなく、平和が道である) というわけです。

内村鑑三は「後世への最大の遺物は人の生き方」だといいました。まさに「My Life is My Message”です。そのためにもガンジー・ジー（じいさん）の残した「明日死ぬつもりで生きろ、永遠に生きるつもりで学べ」という生活を実践してください。

あなたは生の証しとして、どんなメッセージを後世に発信したいですか。「日本は東海に張られし一本の弦、平和の樂を高く奏でよ」とは、結城哀草さんの一九五三年の歌ですが、そんな人生、そんな立命館学園をつくっていったら、すばらしいと思います。ご清聴ありがとうございます。

資料 「平和の経済学」のレポート・クイズ課題（二〇二二年度後期、抄）

第一回クイズ（一〇月七日まで）

1. 脳が記憶しているあなたの最古の心象風景ないし体験とは何ですか。何歳のときの風景ないし体験ですか。
2. 「ほんとうに大切なものは、目には見えない。こころでしか見えないのだよ」と「星の王子様」は語りましたが、それは正しいですか。
3. 「こころ」とは何であり、どこにあるのですか。

第一回レポート（一〇月一三日―一六日）

以下の五問から四つを選んで答えてください。

1. 三六億年ほど前に地球の深海の底で最初のイノチ（生命）が生まれたといわれます。イノチとは何ですか。「私」（脳・不変とされる自我）がイノチを持っているのですか、それともイノチが「私」を生き、私の心身を自然体に向けて発達させているのですか。

2. 二〇〇万年ほど前に自然から社会が枝分れし、一万年ほど前に社会から政治が枝分かれし、ほぼ同時期に社会から文化が枝分かれする動きが始まり、五〇〇年ほど前に社会から経済が枝

分かれたといわれます。自然、社会、政治、経済、文化（芸術・学問・宗教を含む）とは何ですか。相互にどのような位置関係にあるのかを図示してください。

3. 自然をヒト（脳）の土台ではなく、外部に位置すると考える「天動説的な自然観」は、なぜ生まれてきたのでしょうか。

4. 直立歩行は体重に占める脳の比重を急激に高め、未熟児の早産をもたらした結果、原始人のメス（女）の性行動をボノボ型に近づけ、チンパンジーに頻発するオスの子殺しをなくし、情愛にみちた安定的な家族関係を築く契機となったという説があります。それは正しいですか。

5. 人生の意味について二つの考え方があります。「自分で望んで生まれてきたのではないし、どうせ死ぬのだから死ぬまでは楽しいことをして、楽で得な生き方をしたい」というのが、第一の考え方です。これにたいして宮沢賢治は「自我の意識は個人から集団・社会・宇宙と次第に進化する。正しく強く生きるとは、銀河系を自らの中に意識してこれに応じていくこと」だと歌い、同様の立場からアウシュビッツ収容所から生還したビクトール・フランクルは、「自然と社会はいったい私に何をしてくれるのかと問うてはならない。私を生み出してくれた自然と社会とが私に何を期待しているのかを探りあて、その呼びかけの声に……正しい行為をもって応えることこそが人生の意味だ」（『夜と霧』）と述べました。これらを第二の考え方としましょう。あなたは、どちらの考えに近いですか。どちらでもない第三の考えのばあいは、それを述べてください。

第二回クイズ（一〇月一七日―十一月二日）

世界報道写真展をじっくりと観た上で、他の受講生にも注目してほしいと感じた写真を二つ選び、写真の背景事情も調べたうえで、注目してほしい理由を解説してあげてください。

第三回クイズ（一〇月二三日―十一月四日）

他の受講生の書いた第一回レポートを読み、啓発されたレポートを二本から四本ほど選びだし、これらレポート末尾の「返信」ボタンをクリックし、メッセージ欄を開け、そこに啓発された理由を書きこんでください。

第二回レポート（十一月六日―十一月十日）

以下の五問から四問を選んで答えてください。

（一）知日派総帥のジョセフ・グルー（元駐日大使で国務次官）やヘンリー・ステイムソン国防長官が付加したポツダム宣言草案第二二条末尾の「現在の皇統下の立憲君主制の存続もありうる」という文言が、なぜ発表直前になって、ジェームズ・バーンズ国務長官やトルーマン大統領の手で削除されたのか。原爆投下直後に「天皇制温存」の約束を米国は発するようになるが、それはなぜか。トルーマン政権は、何のために庶民密集地区の上に、二発の原爆をたてつづけに投下したのか。

(2) 米国は、どのような戦略目標をもって、日本に原子力産業と民間テレビ局の導入を図ったのか。読売新聞社主の正力松太郎は、どのような役割を果たしたのか。

(3) 一九世紀から第一次大戦時までは、軍拡が戦争の勝利をもたらすばあい、その国の経済成長に役立つことが多かったが、冷戦期に入ると、逆に軍拡する国の産業競争力を阻害するようになったという説がある。その説は正しいか、誤っているか。そう判断する理由は何か。一九八〇年代後半から九〇年代初頭に「冷戦の経済的勝者は日本だ。中国革命と憲法九条のおかげだ」という説が主張されたことがあるが、この説は正しいか。

(4) ソ連の経済は、一九六〇年代までは急成長し、発展途上国の「近代化・産業化」のひとつの成功モデルとなるが、その後は一転して低迷に陥り、一九九一年には破綻する。それはなぜか。藤岡は、ソ連型社会とは、マルクスたちがめざした農工の再融合、精神と肉体、都市と農村の融合、持続可能な経済をめざす「社会主義」ではなく、帝国主義戦争からの離脱と自律的な産業化（工業化、農業の化学化・機械化、自然改造、大都市の形成、分業の促進）をめざす「国家産業主義」の一変種にすぎなかったと考えているが、この見解は正しいか。

(5) 二〇〇三年春にブッシュ政権は、独仏中口などの反対をおしきり、なぜイラク戦争を始めたのか。「軍産複合体」とは何であり、彼らはどのような役割を果たしたのか。サダム・フセイン政権が狙ったイラク石油のユーロ決済への転換は、開戦にどのような影響を与えたのか。

第三回レポート（二月四日―二月四日）

（1）「核の時代」とは、それまでの時代と何が違っているのですか。広島・長崎・ビキニ・チェルノブイリ・フクシマの核惨事を比較しながら、論じてください。

（2）五年前に「二〇〇年に一度」といわれる金融恐慌が発生し、巨大なキャピタルロス（株価と地価の暴落）が生まれました。莫大な公費の投入にもかかわらず、南欧諸国と米国の国家信用不安を招き、デフレと大量失業の危機を引き起こしています。なぜ、このような事態が起こったのでしょうか。最低限、①貧富の格差の拡大、②巨額の「キャピタル・ロス」の発生、③対イラク・アフガン戦争の挫折④「夢の新型戦争」バブルの崩壊、④漁夫の利を活かした中国の経済的躍進という四つの要因には言及してください。

第四回クイズ（二月九日―二月四日）

立命館大学国際平和ミュージアムを見学し、以下の（1）―（3）の間に答えてください。受付で見学日の入った赤の押印シールをもらえますので、大切に保存し、レポート集に貼り付けてください。

（1）平和博物館（平和のための博物館）とは何ですか。世界と日本の平和博物館運動は、どんな到達点にあり、どんな課題を抱えていますか。

（2）このミュージアムは、ことし開設二〇周年を迎えました。良い点、改善を要する点は何で

すか。

(3) 他の受講生は注目しないだろうが、重要だと考える「掘り出し物」のテーマをミュージアム展示のなかから一つ、探しだし、調べた成果を披露してください。

第四回レポート（一月二二日まで）

以下の八問から四問を選んで答えてください。

(1) デンマーク国民は、ドイツの占領下でユダヤ人を守った歴史をもち、最近の国民の幸福度調査では世界第一位となっています。他方、中米のコスタリカは、軍隊をもたずに六〇年にわたって平和を維持しています。両国の歩みを比較して、共通しているところを四点以上あげてください。

(2) オランダでは、労働時間の大幅短縮（パートタイム化促進）や派遣労働者と正規労働者の同権原則を導入する方策で失業問題を克服しつつ、国際競争力も維持しているといわれます。なぜそのようなことが実現したのですか。この経験を日本に導入して成功させるには、どんなことに取り組む必要がありますか。

(3) 「格差縮小」がデフレ不況の克服、社会問題の解決、平和創造のカギだという意見がありますが、その理由は何ですか。この意見は正しいですか。

(4) ASEANは、外国との軍事同盟への加入の禁止、外国の軍事基地の撤去を外交の原則としています。①このような原則はどのような歴史的教訓を踏まえて出来上がったのですか。②TA

C（東南アジア友好協力条約）とは何ですか。アセアン諸国や日本が抱える中国との領土紛争をTACや国連システムを用いて平和的に解決するには、どんなことに気をつけたらよいのでしょうか。③二〇一二年一月の東アジアサミットで、アジアを束ねた「地域包括経済連携」（RCEP…Regional Comprehensive Economic Partnership）の交渉開始が宣言されました。TPPではなくRCEPのほうが東アジアの平和創造と格差解消に効果的だという意見がありますが、それは正しいですか。

(5) 「日本軍慰安婦」にかんする河野官房長官談話（一九九三年）、「アジア太平洋戦争」終結五〇周年にあたっての村山首相談話とは何ですか。これらの談話の取り消し、A級戦犯を含む昭和殉難者の復権を求める「日本会議」とはいかなる組織で、安倍晋三内閣の閣僚はどんな役割を果たしていますか。これら談話は取り消すべきでしょうか。そのばあい東アジアの平和創造と発展にどんなプラスとマイナスの影響が生まれるでしょうか。

(6) 今年は朝鮮戦争の停戦協定から六〇周年です。その後六〇年の間、終戦協定が結ばれずに朝鮮戦争が継続したままになっているのは、なぜですか。

(7) 藤岡稿の「軍事攻撃されると日本の原発はどうなるか」を読み、賛成できる点、賛成できない点を論じてください。

(8) 失業危機、エコロジー危機、戦争危機、健康危機という現下の四つの危機を統合的に解決するにはどうしたらよいのでしょうか。藤岡構想（「平和の経済学」の終章）を読んで、そのメリッ

ト・デメリットを論評しつつ、あなたの見解を述べてください。なお「平和の経済学」は、藤岡のホームページ <http://www.peaceful.biz/> から入手してください。

伊藤恵子講師へのレポート（二月一八日―二月一〇日）

五回にわたる授業では、「平和の経済を支える地域・家族基盤」としての「菜園家族」構想について、その背景や内容の概要を講義しています。これら講義の内容や配布資料をふまえ、論文『菜園家族宣言――静かなるレポリユーション』（小貫雅男・伊藤恵子、二〇一〇年）のなかから下記目次に○で囲んで指定した箇所を読んだうえで、この構想の骨子を記すとともに、あなたの意見を書いてください（この論文は里山研究庵Nomadホームページに掲載中です）。分量はA4サイズの手紙に手書きで二〇〇〇字以上。

第二部

私と世界とアツちゃん先生

アッチャン先生は生涯学習の名案内人

青山 富真

アッチャン先生との出会いは、先生がご担当されていたアメリカ経済論の講義だったと記憶しております。その後、博士課程前期課程でご指導を賜りました。

先生は温厚なお人柄で、他者の意見を否定することなく、優しく耳を傾けてくださいます。しかし、先生に質問をしても、「それはこういうことです」と答えてくださることはなく、ハンドアウトが手渡されます。その中身は、世界を取り巻く様々な問題を取り上げた論文、新聞記事、エッセイ、詩など多岐にわたります。ヒントは差し上げますから、答えは自力で探しましょう。これが、問題の本質を見抜く訓練、つまり「藤岡流指導法」なのです。そして、時には教室を飛び出して、自然に触れることの大切さ、様々な事柄に関心を持つことの大切さなども教えてくださいました。先生に影響を受けた私は、「生涯学習」「遊学」という禁断の扉を開けてしまったのです。

或る日、先生と雑談をしているときに、「地球を飛び出して宇宙に行ってしまいました」と仰いました。「持続可能な地球の発展を考察するうえで、宇宙の軍拡経済について研究しています」と、事の詳細をお聞きし、地べたにしか目をやらず、右往左往している自分の視野の狭さを思い知りました。M1（前期課程一回生）の夏には、国際平和交流セミナー（広島・長崎プログラム）にティーチング・アシスタントとして同行する機会を与えていただき、フィールドワークやアメリカン大学

の院生との交流を通して、普段の研究とは異なる貴重な経験をさせていただきました。

先生のご指導のもと、充実した院生生活を送っていたのですが、M2の後期セメスターが始まった直後に1型糖尿病を発症し、入院を余儀なくされ、研究および、論文執筆に支障を来すこととなりました。退院後も焦る気持ちが先行し、論点が二転三転するなど、スランプに陥りました。そのとき先生が、「離れた場所に存在する井戸をそれぞれ掘り下げていくと、水脈がつながっていることに気付くでしょう。一見すると関連性がない事柄でも、考えを掘り下げていくと、それらはすべて繋がっているのですよ」と話してくださったおかげで、焦る気持ちは解消され、無事に論文を提出することができました。

アッチャン先生、本当にありがとうございます。今後益々のご活躍とご健勝をお祈り申し上げます。

とともに、引き続きご指導のほどよろしくお願ひ申し上げます。

(二〇〇八年 経済学研究科博士課程前期課程修了)



2006年8月：国際平和交流セミナー広島・長崎プログラムにて
後列左から青山、藤岡先生、藤川君（学生リーダー）
前列左から岩下さん（学生リーダー）、河野さん（学生リーダー）

いつも時間と空間を超えた巨大な視点

芦田 文夫

藤岡惇さんとは、立命館大学経済学部で同僚として三四年間、研究と教育と大学づくりと社会的諸活動とをずっと一緒にしてきました。私のほうが干支でいえば一回り年上なもので、いつも元氣あふれる若き「突きあげ」役として一目置かせて頂いておりました。もう定年だとは、とつても思われません。これからむしろ大学の「外回り」で、また力を合わせて頑張っていきましょう。あまり「晴耕」ということで「自然」に還ってしまうのでなく。

これから、研究者としての「ライフワークの完成」はいうまでもありませんが、基礎研の「勤労と研究」の総合にも精を出されるのでしょうか。この文集の呼びかけの皆さん方の声からも、長い間の藤岡さんの尽力と今後への大きな期待が感じとれます。私も大学院の時から、島恭彦先生や吉村達次先生に頼まれ、京都学習協で勤労者教育に発足からずっと半世紀にわたって携わってきました（今年五〇周年の記念イベントを計画しています）。そしてこの年になって、責任者を引き受けてくれないかと言われています。嬉しいことに、若い労働者達の間で学習への意欲と姿勢がまた高揚をみせかけているのです。お互いに連携しあって、しばらく老骨に鞭打つことにしましょう。

もう一つは、「立命館大学の民主化」への努力です。五年ほど前、私たちOBは見るにみかねて「立命館大学の民主主義を考える会（元教職員）」をつくって、現役の皆さん方へ応援のメールを送り

続けてきました。藤岡さんたちは、教授会や教職員組合だけに任せないで、教職員の横断的な自主的な「フォーラム」を新たに創りあげ、その中心となつて運動を進めてくれました。定年になられて、現役と元教職員とのかすがい役としても、これからは非力を貸して下さい。

現役を退くと、もっと読んだり考えたりしたいと思つてもなかなか出来なかつた研究に、時間をかける余裕が確かに出てきます。藤岡さんからはこれまで、宇宙や地球に生命が生まれてきた何百・何十億年の過程のなかで人間・社会のあり様を考えていく話したとか、いつも私達の時間と空間の意識を超えたような巨大な視点を投げかけてくれました。私などはそれを受けて、これまで辿つてきた自分の狭い軌道をせめてどう広げていくかに精一杯のあり様でした。これからは、むしろ研究上での交わりにもっと比重が掛けられ得ると思いますので、どうか変らず次々と「私の想定外」の刺激を与え続けていただくことを願っております。長い間、実に様々な分野でのひたむきで誠実なご努力、ご苦労様でした。

(立命館大学名誉教授)

歌と活動を通して

阿部ひろ江

私は京都市北区で町家ギャラリー、エイコンズ・ビレッジをしながらシンガー・ソング・ライター

をしています。歌は平和や原発、社会問題などをテーマにしたメッセージ性のあるもので、エイコンズ・ビレッジではやはり社会問題などをテーマにイベントをしています。

藤岡先生との初めての出会いは、藤岡さんがMLでうちのピースキャンプの案内を見て「参加して宇宙軍拡についての話をしたい」というものでした。願っても無いことで、ありがたくお受けしました。その後、藤岡さんが長年取り組んで来られた、米国の学生と日本の学生による広島、長崎平和の旅に何度か歌いに行かせて頂くようになりました。

私にはオーガニックでリーズナブルなベジタリアンレストランをしている友人が多いので、広島、長崎平和の旅を初めとして、藤岡さんのお友達の外国の活動家や教授などが来られた時も、よくそのようなお店を紹介させて頂いて、私も同席させて頂きました。

そんな中で一番印象に残っているのは、なんととってもドイツの反核活動家レギーナ・ハーゲンさんでしょうか。京都に滞在されている間に、うちの近所の高齢者協同組合でヨーロッパの核の状況について講義もして頂いたし、歓送会では丁度その時期に企画されていた私のコンサートをさせて頂きました。

その他藤岡さんとは思いがけない所で二度程お会いしています。一度目はハワイ在住の画家小田まゆみさんの個展会場。二度目は静岡県のエコヴィレッジ「木の花ファミリー」のコンサート&交流会です。そんなところからも藤岡さんの交友関係の幅広さや自由な発想が伺えます。

又お宅がうちのご近所であるため、健康のためのウォーキングで船岡山でお会いしたこともあり

ます。これからもますますお元気で活動され、私達に沢山の示唆を与えて下さることを願っています。

アッチャン先生と宇宙戦争

有地 淑羽

アッチャン先生との思い出はなんと言っても宇宙戦争のことだろう。

一九九九年頃だったと思うが今は亡き大庭里美さん（広島の熱心な翻訳家&活動家）と藤岡先生で宇宙戦争反対の学習会と（ブルース・ギャグナンたちが製作した）ビデオの上映をした。その当時は「宇宙戦争」と言う概念のない時代で、ミサイルで核ミサイルを宇宙空間で迎え撃つというビデオを学習会参加者にもってもらったが、参加者は不思議な顔をして会場を出ていかれたことを覚えている。

一九九七年にアメリカ航空宇宙局NASAが土星の探査衛星カッシーニを打ち上げた時にも、大庭さんが日本語の訳をくれたビデオをつくり、反対運動をした。

その後も巨大アンテナを使った世界を盗聴するシステム（エシユロン）、インターネットで飛び交う情報からテロリストの危険な会話を見つけだすしくみを二万人の技術者が開発しているという

話を聞いた。どこまでが現実のことでどこまでが宮沢賢治の童話の世界なのだろうか…と思ったこともあった。

しかし宇宙の軍事衛星を使ってミサイルを誘導する話しはすぐに現実のこととなった。九・一一後のイラク戦争でミサイルが誘導されながらイラクの戦車を爆破するシーンをテレビで見て「藤岡先生！これがカーナビ機能を使ったミサイル誘導！」なのですね…とショックだった。

一〇年が経って、先生の言われたことはすべて夢ではないことがわかった。宇宙の軍事衛星をクリントン大統領が民間に開放したことでインターネットやカーナビが普及したことも、また私たちが便利に使う検索機能もアメリカの軍事技術で開発したものであることも理解した。そしてミサイル防衛にも現実には私たちの税金が使われてしまった。

ちよつと怪しいエピソードと言えば、藤岡先生の学習会で出された資料に、日米の自動車交渉で橋本首相がアメリカに行ったときに、アメリカ側は盗聴システムを使い事前に日本の作戦をつかんでおり、準備をしてから交渉に臨んだために日本は交渉に失敗したという資料が使われた。私は家に帰って「盗聴されて交渉内容がつつぬけている？このこと外務省は知っているのかな？」と思ったので少し前に、核兵器廃絶条約の交渉をした時にもらった外務省のお役人の名刺宛てに、郵送で、藤岡先生にもらった資料に赤線を入れてそのまま送った。その後その外務省のお役人からは何も返事はないが、三ヶ月としなうちに外務省の改修工事がきまり、一年たつかたないかで総理官邸の建て替えが決まった。本当かどうかを確かめることはできないが、熱く国防を語る学者より

「日本の国益を藤岡先生は守った」と私は勝手に思っている。

(平和友の会 交流部会)

藤岡先生、お礼申します

安齋 育郎

一九八六年四月、私は立命館大学経済学部「自然科学概論」担当教員として採用され、藤岡先生と知己を得ました。私の出身は東大工学部原子力工学科。六四年に卒業論文「原子炉施設の災害防止に関する研究」を書き、引き続き大学院で放射線防護学を研究していましたが、やがて日本の原発開発のあり方に疑問をもち、六九年に医学部助手になつてからも原発批判の側に身を置き続けました。結局、「反国家的なイデオログ」という烙印を押され、一九八六年三月までの一七年間、助手のままでした。立命館に来ることになつた時、朝日新聞は、「名物の『万年助手』また一人東大去る」と紹介したほどです。それなりに「名物」だったのですね。この記事は、『日本原爆論大系』（日本図書センター）を編集された岩垂弘記者が書いたものです。現在、「平和・協同ジャーナリスト基金」の代表運営委員を務めておられます。

かくして八六年四月に藤岡先生と同僚になつたものの、赴任後三週間ほどでチエルノブイリ原発事故（一九八六年四月二六日）が起こり、講演や執筆活動に忙殺されて経済学部の先生方と深く交



名物の「万年助手」
また一人東大去る

宇井純氏とともに「東大の万年助手」といわれた同大医学部助手で放射線防護学専攻の安斎青郎さん(白黒)写真



が、四月一日から立命館大学経済学部の教授になる。十六年にわたる助手生活にサヨナラするわけで、「月給もこれまでより奥くまらです」。宇井氏も四月から初編大教授になることが決まっており、これで名物の「万年助手」が相次いで東大を去ることになる。

立命館大の担当は「自然科学概論」。「授業では、まず、スライドを使って核問題を話し、みたい」と、意欲満々。

わかることは出来ませんでした。私は二年後の八八年には新設の国際関係学部に移ってしまったので、経済学部時代には藤岡先生との関係はいわば「端緒期」だったと言えるでしょう。

ところが、前年の一九八七年、全学協議会で「国際平和ミュージアム」を設立する方針が確認され、これが藤岡先生と私の共同の舞台づくりにつながっていたのです。国際関係学部に移籍した翌八九年、常任理事会で国際平和ミュージアム設立準備室の設置が決められ、以後、私も加わってとんとん拍子で準備が進められ、ついに九二年五月一九日の立命館大学創立記念日に開館に漕ぎ着けました。開館時の館長は加藤周一さんでしたが、私は「館長代理」を仰せつかり、「おだいりさま」と呼ばれていました。そして、戦後五〇年目の一九九五年に私が館長になった翌年、藤岡先生が企画局長（現在の副館長）に就任され、何かと共同の機会が増えました。これ

まで、企画局長、運営委員、メディア資料室長、国際平和博物館会議プログラム委員長など平和ミュージアムのために長年にわたって多面的にご貢献いただき、とても深く感謝しています。

藤岡先生は「心にとらわれない人」で、あまり過去の因習やがんじがらめの取り決めに縛られず、いろいろなアイデアを提案・発信してくれます。あの独特の藤岡節で、思うところを自在に訴えかけます。いわゆる「常識」とか「規則」とかに頓着する人から見ると、「エッ、マジ!」とか、「そんなの無理」とか思えるようなことでも、等身大から宇宙大の話まで自在定規のごとく、心赴くままにアピールします。もつとも、「自在定規」などという表現は、今は通用しないでしょうね。昔は今と違って図面やグラフを描くときはハンド・ドローイング（手描き）でしたが、円や直線ではなく、グニャッと不定形に曲がった線を引くときには、その曲線に沿った形に曲げることのできる硬質ゴムの定規（自在定規）を使いました。雲形定規というのもあって、いろいろなカーブをもつ雲のような形をした定規をとつかえひっかえして描く方法もありましたが、ぐんにやり曲がる特殊な硬質ゴムで作られた定規は、描きたい形に定規を曲げ、それを当てがって描く道具として便利な面がありました。もつとも「自在」の意味は、「意のままであること。自分の思うとおりにできること」ですので、「自在定規を使う立場」からはその通りでしょうが、「自在定規の立場」から見ると「状況に合うように自分を曲げる」ことを強制されるので、「自在定規」という言葉の本義はあくまでも使う人の立場でしょう。藤岡先生は、状況を判断してそれに適応する柔軟性（自在定規的性能）もお持ちですが、まずは、規則や因習に自分を合わせるというのではなく、自分が「こうあ

るべきだ」と考える筋道に沿って「思考を自在に組み立て」る生き方をされている方で、取り決めや習わしに自分を合わせて自主規制するような姿勢はとらない、その意味で非常に自律的で、素敵な先生です。だから、時には目の前の状況と間尺が合わず、煙たがられたりすることもあるに相違ありませんが、まあ、いいじゃあないですか。今後とも心自在に生き、発信し、適当に煙たがられることを希望します。新しい時代や文化を拓く「ガイアの夜明け」を迎えるには、私たちも「定型人」から「自在人」にならないといけないと思いますが、藤岡先生を一つのモデルとして、私もそう生きたいと思っています。「自在人」としての藤岡先生は、カラオケは苦手です。決められた旋律に合わせて声帯の振動や呼吸の強弱を塩梅するなどというのは、藤岡先生の生き方には合わないのではないか、旋律を自分でコンポーズする作曲家の方にこそ藤岡流の生き方があるとお考えなのではないか—そう勝手に解釈しています。

(安齋科学・平和事務所／所長)

平和教育とともに担って

池尾 靖志

藤岡先生とは、今年でちょうど二〇年になる。一九九三年四月に立命館大学大学院に入学し、平和研究を学ぶにあたり、国際地域研究所の「軍縮と平和」プロジェクトを通して知り合った。

当時、藤岡先生は、「暴力についてのセビリア声明」を印刷して研究会の出席者に配布し、戦争を引き起こすのは、人間の本性ではないことをさかんに強調されておられた。私が藤岡先生と知り合ったのは、それ以降のことなので、先生が、マルクス経済学でどのような業績を残されているのか、多くのことは知らない。ただ、私の当時の問題関心は、軍需中心の経済システムをいかに民需中心の経済システムに変化させていくのか、という点にあったので、不躰ながらに、研究会で質問していたような気がする。

軍需産業で働いている人々の中にも、不本意ながらに職に就いている人たちが、労働組合を通じて「平和」を訴える中で、会社側から不当に扱われるケースもある。そのような人たちと、平和運動や労働運動がいかに関わり、雇用の確保をはかりつつ、民需経済にシフトさせていくのか、いまでも、経済学の課題であると思うのだが、先生はどのようにお考えなのであろうか。これからも先生には、末永く、生活者の視点をもちながら、研究と教育とに専念されることを祈念したい。

先生の健康面でも一言ふれておかねばなるまい。あるとき、先生が、心臓がとまりかけたことを、安齋先生を經由してだったか、定かではないが、知った。私が学部時代にお世話になった国際関係論の先生も、昨日まで元気だったのに、朝起きたら心不全で亡くなられ、多くの学生・院生が路頭に迷ったことがあった。だから、おなじ平和研究を志す藤岡先生のことも、非常に心配させられた。それ以来、先生の価値観も、より人間と環境との調和を強調されるように変化したように見受けられる。もともと、温厚なお人柄の先生ではあるが、より、温和な性格になられたような気がする。

それまで、南草津駅からびわこ・くさつキャンパスまで、大学正門までの間にきつい坂があるのだが、自転車で行われていた。先日、自転車で通われていたように記憶しているのだが、無理をされていなければいいのに、と思わされる次第である。

最後に、立命館大学でのお働きについて。藤岡先生は、長きにわたり、立命館国際平和ミュージアムの運営委員として、また、メディア・資料セクター長としてご活躍であった。今こそ、平和教育の充実が求められる。ぜひとも、先生には何らかの形で、憂うべき現状にある社会変革のために、平和ミュージアムを立て直していただくことを希望する。

(立命館大学非常勤講師)

藤岡先生の思い出

池田 清

「働きつつ学ぶ」基礎研にかかわって三〇年、自治体職員から大学教員に転身して一五年になります。この間、私が参考にしたのが、「経済科学通信」もさることながら、いつも基礎研の研究大会などで持ってきていられた藤岡惇先生の論文のコピーでした。私などにも気前よく配っていたいただきました。これがすごい内容のもので、私の研究に役立つものも少なくありません。人間がより良く生きるにはどうすればいいのか、そのためには社会や経済はどうあるべきなのかなど、学ぶべ

きがありました。

また藤岡先生は教育にも熱心で、立命館大学の非常勤講師のときに、昼休みに社会人学生の女性たちと懇談したところ、藤岡先生がとても熱心で丁寧に教えてくれる、と言っていたことを覚えています。

これからお身体を大切にご活躍を願っています。

(神戸松蔭女子学院大学教授)

「月曜会」の世話人として想う、立命館のこと、教養教育のこと

池田 研介

BKC（立命館大学びわこ草津キャンパス）ができた一九九四年に理工学部物理学科に赴任しました。ひよんな事がきっかけで、二〇〇六年に藤岡さんと「月曜会」という会を始め、既に七年目になります。

あの理事会側による一方的な一時金カット事件が起き、拡張政策をとる経営側と現場の教職員の間に明確な亀裂が生まれはじめた頃です。経営側は一時金カットと抱き合わせて教員の「研究成果」に応じた給与配分案（「研究推進手当ての支給についての方針」）を出してきたり、その後の「ガバナンス文書」に危機意識を抱いた理工教員が生物地学教室という理工教員のたまり場に集まって盛

んに教授会対策をねっていたところ、経済学部で同様な運動をされていた藤岡さんが現スポーツ健康学部の三浦正行さんから数名の方と、生地教室における理工教員の議論の場にこられ、それがきっかけになって藤岡さん、三浦さんそれに僕が世話人になって「月曜会」が自然発生的につくられました。

会の設立趣旨は、総合大学と言いながら、学部の垣根を超えた交流が教職員の間、特に教員同士の間で殆どないのはおかしい。それがないから、「広い視点で考える」事を教えるべき大学らしい教育もできないし、経営側が暴走してもそれに有効な歯止めをかける現場側の連携した意見が形成できない。教育研究上の問題、あるいは教育研究に直結する行政上の問題でBKCを横断した議論ができる場を月曜会という形で提供しようという事だったと思います。

むろんフォーマルな会則などはなく、入会退会自由。理工の小笠原さんが作ってくれた月曜会メンバーリストにのつておればそれが会員で、会員の要請によって世話人が会を開催する。教授会が火曜日なので、教授会対策もあつて月曜日に開催される事が多かったため、なんとなく「月曜会」とよばれるようになったと思います。

最初の会合は二〇〇六年一月で、都立大学の首藤啓さんに都立大学が石原慎太郎の暴走によっていかにダメージを受けたかという話をしていただきました。それ以降、理事会がバナンス問題、新学部設置問題、BKCでの教育改革実践活動等に関する会合を細々とではありますが続けてきて、先日三九回目の会合を行いました。

立命館学園経営陣のトップ達が指導する「上からの」大学改革なんて殆どハコづくりしかできません。立命館学園経営陣のトップ達は新しい箱ができれば大学の発展と思込んでいるようですが、大学にとって最大の問題（これは立命館のみならず日本の国公立大、私立大学を問わず）はいかなる学生をいかに育てるかという思想が根本的に欠如している事にあります。特に昔のように「選民」（エリート）を育てる大学ではなく、大衆化した大学に於いて。それがなま、なんとなく五〇年昔と変わらぬ教育モデルを踏襲した専門教育をしている。それは我々教員自身が丁度大学が大衆化する時代の境目に大学時代を過ごしたため、未だ選民教育時代の大学教育モデルしかイメージできない。教員側の意識が変わらない為でもありません。なので、箱づくり一本槍の経営トップに対して教育現場からの有効な反撃ができない。

僕が所属する物理学分野についていえば、日本中の物理教室では学生の殆どが将来物理学と直接関係ない仕事につくであろう事を前提とした教育をしておらず、全学生が将来日本物理学会会員となるかのような専門的教育をしております。経済学部もおそらくそうでしょう。

僕自身そういう大学教育に違和感をもっていましたし、当時、僕が属する物理教室のメンバーの多くも僕と同じ意見をもっていました。大衆化と同時に学生がこれまでの伝統的物理学科的教育についてこれなくなっており、何らかの改善が必要である事は学科全体の認識であったので、組織的な教育改革を始めたのもその頃からです。

この努力は、当時のメンバーが新しいメンバーに入れ替わった今もつづけられており、他学部他

学科のモデルになりうる斬新な試みが提案され実践されてきました。しかし何か欠けているものがあつたのです。結局我々がおこなつてきた事は、「昔のような学力をもつた」学生を回復する事、伝統的な物理教育を受容できるように学生を「動機づける」教育であつたように思います。

それを教えてくださったのは藤岡さんでした。何度か物理学科をふくむ理工学部のようにいった教育改革実践が月曜会で紹介されましたが、藤岡さんは「すばらしい」と評価されながらも、大学学部教育の中心課題が教養教育にある事を忘れてはならない事、しかし日本の大学は専門教育とも教養教育ともつかない中途半端な教育をおこなつており、真の教育改革とは「学力の回復」を主目的とした教育改革と違う次元の課題である事を必ず力説されました。藤岡さんの学部教育改革は、専門細分化してしまつた学部を学生に統合的な教養教育を施す事が可能なように再組織しなおし、各学部を特定キャンパス内に閉じ込める事をやめる。一方、学生が必ずある期間入寮する「出家寮」の建設を含めた大変過激な案でした。

藤岡さんの主張の重要なポイントには、大学が行うべき教養教育の中心には、答への容易に見つからない問題を学生に考える事の意義に目覚め考える体験をしてもらう事を据えねばならないという事があります。その精神を、多数の学生を相手にせねばならない教養講義でも実践されてこられた事も知り、驚きました。しかし藤岡案の概要を現状ではとても実現できそうもないので、出席している会員達は僕も含め「また藤岡節が始まつた」という反応を示したものです。

しかし藤岡さんはそう受け取られる事を十分承知の上で必ず自説を展開されました。前のめりに

なりながらも、周囲から浮いて見えようと、理想を高らかに掲げそれにむかつて進んでゆかざるを得ない姿といい風貌といい、ピーター・オトゥールとソフィア・ローレン共演の名画「ラ・マンチャの男」のドン・キホーテセルバンテスを彷彿とさせるものがありました。

藤岡さんの「解けない問題教育論」に更につけ加えるなら、解けない問題を学生と共に考える時、経験の差こそあれ、学生と教員は同じ地平にたつ同輩である事になります。同じ場に立った議論を通して、教員は学生に教える事で逆に学生から教えかえされ、相手の人格に目を開かされる存在になる。この過程は、研究によって自分の視点が新しい地平を獲得する過程と同相の構造をもち、喜びをもたらします。研究と教育が大学で同時に行われる深い意義はそこにあるのかも知れません。僕自身は月曜会での藤岡さんや他の会員たちとの議論を通して、あるべき大学教育のほんやりとあつたイメージがクリアに認識できるようになつたと思います。

細々と月曜会をやってきましたが、残念ながら教育に関する会合には、政治向きに関する会合に比べて集まりがよろしくないのが現状です。しかし月曜会の基本は、あるべき大学の姿とそこで行われるべき教育を議論によつて深め合う場所であると思います。それに加え異なる分野で研究を進める教員が、お互いの研究内容とその意義を他分野に知つてもらうアカデミックな場にもしたい。このような教育研究の基盤に立つて、政治むきの議論が必要ならば行われるべきでしょう。月曜会の意義は、現場の教職員（むろん学生院生も参加自由）が大学の教育研究を改善する議論を通して草の根からの大学運営に対する意見が醸成される場を提供する事にあります。

月曜会の精神を体現されておられる藤岡さんには、まだまだ現役としてかかわっていただける事を深くお願いする次第です。

(立命館大学理工学部物理科学科 教授)

亡父・池田一郎と藤岡先生

池田 伸

藤岡先生には、教養教育のあり方などに関してたいへんお世話になりました。しかし、本来ならこの稿は、「戦争遺跡」の関係でかつて授業を分担させていただいた亡父の池田一郎が書かせていただくべきものかと思われます。もちろんいまとなつてはそれも適いませんで、二〇〇五年の一郎の追悼文集に寄せていただいた藤岡先生のお言葉を再録させていただきます、御礼かたがた先生のますますのご活躍を祈念させていただきます(後段は、藤岡先生ご自身にあてはまるのではないでしょうか)。

池田「一郎」先生には一九九九年度から〇四年の七月まで、六回にわたり、私ども立命館大学(琵琶湖草津キャンパス)で「戦争の歴史と現在」の講義チームの一員としてお力を貸して頂きました。……実態調査をふまえた熱弁は大変ユニークで、学生の心を動かすパワーを持っていました。……

(立命館大学経営学部)

「石川君らしくない論文でしたねえ」

石川 康宏

藤岡惇先生の退任を記念する論集に、こうして一文を掲載させていただけることを大変幸せに思います。私は一九七五年に立命館大学産業社会学部に入學し、一旦中退の後、編入學した二部経済学部を一九八六年に卒業しました。その際、二部の三・四年生ゼミでお世話になったのが藤岡先生でした。

ゼミは、決められたテキストを読みながら、あわせて経済関係の時事問題を學生が報告して話しあうという形のものでした。累積債務問題の「解決策」として、当時アメリカ政府が提起した「ベーカー構想」について議論したことなどが、なぜか記憶に印象的に残っています。

二年間のゼミの最後には、数人のメンバーで卒業コンパを行いました。その席で私の卒業論文について先生から「石川君らしくない論文でしたねえ」と穏やかに指摘していただいたことも覚えています。じつは卒論の提出が、私の第一子誕生と重なってしまうという事情があり、それにかまけて、私は論文作成に十分に集中することができなかつたのでした。特に女性の同級生からは「そういう事情なら仕方ありませんよ」という助け船の発言もありましたが、振り返ればやはり私自身の若さ、幼さの成せる業だつたと思います。

遅い大学卒業の後、私は京都大学の大学院に進學し、九五年には神戸女学院大学に赴任すること

になりました。その間、直接、藤岡先生にご指導をいただく機会はありませんでしたが、何度かお目にかかり、声をかけていただいたことはありました。

院生時代、私は京都で公的保育の拡充を求める運動に加わっていたのですが、京都市長選挙の取り組みにかかわり、当時学童保育の運動に参加しておられた藤岡先生に偶然お会いすることがありました。私はフロアの一参加者であり、先生は壇上にあがってお話をされる立場でしたが、教室の外でのそうした先生の姿に初めて接して、とても新鮮な思いがしたことを覚えています。

大学の教員になってからは、基礎経済科学研究所の大会で、二度ほどご一緒させていただきました。一度は、たしか大阪経済大学での「平成大不況」をテーマとした分科会の中で、二度目は立命館大学での「憲法改定は日本経済をどこに導くか」という全体会のシンポジウムでのことでした。このシンポジウムは、安倍内閣が改憲への動きを強めるなかでのことであり、どこか、いまの社会状況と重なってきます。

大学を卒業してすでに二七年の時が流れましたが、大学の教師として、社会の中の知識人として、現在の私に多少なりとも役割の果たせているところがあるとすれば、それに必要な素養の一部は、間違いなく藤岡ゼミで培われたものでした。心から感謝しています。

ご退任後の先生の新しい人生が、さらに充実したものとなることを心よりお祈りいたします。

(神戸女学院大学)

小学一年生の惇さん

石澤 雅雄

ある日の児童朝会。全校の子どもが運動場に整列して、校長先生の話を聞いていました。話はいつも面白いものでなく、私はひたすら「早く終わらないかな」と念じていたものですが、その日の校長先生の話は、次のように尋ねられることから始まりました。

「学校でいちばん汚い場所はどこでしょう?」と。

汚い場所と言われても、まったく見当が付きません。周りの子どもたちも、首をひねっています。ところが、とつぜん惇さんがこう言ったのです。「便所や。」

私は「そうかなあ?」と疑問に思いました。校長先生が朝っぱらから便所の話をされるとは考えられなかったからです。ところが惇さんは自信満々で「ぜったい便所やで。学校の便所は汚い」と。私たちは、惇さんの意見をめぐって小声でささやき合い、朝会はざわめいていました。

すると校長先生が、「答えは便所です。」と言われました。私はびっくりしました。まわりの子どもたちもびっくりしました。答えが便所だったことにもびっくりしましたが、惇くんってすごい、校長先生の問題が解けるなんて、とおどろいたものです。

たぶん校長先生はそのあと、便所はきれいに使いましょう、とでも諭されたのだと思いますが、それはまったく記憶にありません。ただ、惇くんはすごい、と思った印象だけを覚えています。

のちに惇さんは研究者の道を歩むことになりましたが、新聞や雑誌で彼の書いた論文にたまたま出会うことがありました。私のような門外漢が読んでも分かりやすいものでしたが、それは理屈をこね回すような文章でなく、現実をリアルにとらえる文章だからだろうと思います。事実にもとづいて論理を組み立てるといのは、当たり前のようなでなかなか難しいものです。そのような研究態度は、このエピソードからわかるように、小学一年生のときから、すでに培われていたということ、言い過ぎでしょうか。ははは！。

(京都市立生祥小学校と京大経済学部同窓生)

手渡される「体験」——東京大空襲とヒロシマ・ナガサキ

I Z U M I

藤岡惇先生のご退職に際して長年のご功勞に敬意を表し、益々のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。

私は東京の下町・浅草の浅草寺雷門近くで、江戸末期に建てられた土蔵を再生したアートスペース「ギャラリー・エフ」を運営しております。一九四五年三月一〇日の東京大空襲で灰燼に帰した浅草地区のなかで、奇跡的に生き残った我が家の土蔵を改造した空間で、隣ではバー・食堂も営業しています。

二〇一一年秋、藤岡先生のご手配により立命館大学国際平和ミュージアムのミニ企画展示室にて写真展『FROM ABOVE in 京都』を開催させていただき、初めてお目にかかりました。

〇八年に米国人写真家ポーレ・サヴィアーノと立ち上げた写真プロジェクト『FROM ABOVE』では、広島／長崎の被爆者、各地の空襲被災者、核実験の被爆者を訪ねて証言を聞き取り、現在の肖像を記録しています。それまで平和「活動」とは無縁で距離を置いていた私は、プロジェクトを通して被災者の方々と対面する機会を得、平和への願いを「人から人へ手渡す」ということの意味と有効性を実感しました。その人の笑顔や涙に個人として直接触れる体験により、「この人を二度と悲しませたくない」という想いが生まれ、それに基づく行動は押し付けられたものと違って継続可能でした。だからこそポーレも、何よりも被爆体験を直接聞いてほしい、時間は限られている、と作品を通して訴え続けています。

展覧会前、先生からご紹介いただいた被爆者の花垣ルミさんに「まもなく京都でお目にかかります」と電話をした中で原発事故の話になり、「私たちの反核運動が足りなかったから原発を止められず、新たな被爆者を生んでしまったことに責任を感じている。しばらくは人前に立てなかった」とおっ



後列右端がIzumiさん、ついで花垣ルミさん

しゃって、私は言葉を失いました。未だに誰もが責任を明らかにしない中で、広島の炎に焼かれた方がまっすぐにご自身の責任を口にされた。七〇年近く経ってなお、彼らが重荷を降ろすことはなく、私たちに託すこともできずにおられるのだと思い知らされました。

ちょうど震災から半年の日で、乱れた心のまま慣れない京都に一人で到着し、御所の緑の中で思いきり深呼吸すると涙がこぼれたことを覚えています。そして頼りの藤岡先生は、準備を整えニコニコ笑顔で迎えてくださいました。会場に着き、さて手を貸してくださいさる方は……と見回すと、先生



が「私ですね」とニコニコ。初対面で、作業着でもない、大学の先生に「あれとって」だの「これ持って」だのなかなかなか言いづらいものですが、後半はそうも言っておられずこき使っていました。翌日は東京へ戻る私のため、先生はその日のうちに内覧会と会食の場を設けてくださいました。そこには常に先生の細やかな気遣いと、場の成り行きを見守る笑顔や合いの手があり、なごやかさの中で語られた様々なお話は、今も私の中で貴重な一頁となっています。どこの街であれ、一人でもそんな方がいて手を広げて迎えてくださるなら、私たちは勇氣を持って歩を進めることができます。こうした体験が先生の周りでこれからも益々育ってゆくことを確信しております。（浅草でギャラリー・エフ主宰）

「くずれぬ平和」の種をまく人

伊藤 恵子

藤岡惇先生とのご縁の端緒は、奇遇にも今から一〇数年前、当時同じ滋賀県内の彦根と草津の大学にいながら、なぜか遙か南の果ての沖繩・八重山群島の竹富島がきっかけとなった。琵琶湖に注ぐ犬上川の最上流、鈴鹿山中の限界集落に里山研究庵 N o m a d を定め、小貫雅男先生と共同で二一世紀の未来社会論への試論として「菜園家族」構想なるものを提起しはじめた頃のことである。その最も初期の自家版小冊子（二〇〇〇年発行）が竹富島の喜宝院菟集館に平積みされていたのを、藤岡先生が「デイープ・ピースⅡくずれぬ平和」の礎となる「うづぐみ（協同）の精神」をもとめてここを訪れた折に目に留めて下さったのである。

以来、山中に籠もり勝ちな私たちを折に触れて研究会などにお誘い下さるようになった。立命館大学での先生の講義にもゲストスピーカーとしてお招き下さり、二〇〇六年一二月初旬のある日、「菜園家族」構想の話をさせていただいた。思いのほかの小春日和、うっかりどこかにマフラーを置き忘れて帰ってきてしまった。諦めかけていた頃、先生からご連絡があり、ご親切にもわが庵まで郵送して下さいました。その時、マフラーにくるむように同封されていたのが、インド出身・イギリス在住の思想家サティシュ・クマルルさんの新著『君あり、故に我あり―依存の宣言―』であった。小泉首相が「改革なくして成長なし」と絶叫し、弱肉強食のグローバル市場原理至上主義の風潮

が席捲していた当時、偏狭な競争原理や浅薄な効率主義と成果主義が大学にも及び、私自身も精神的に苦悩の日々を送っていた。そんな折、インド農村社会の伝統的世界と近代文明発端の地イギリスとの複雑な葛藤の中から生まれたサティシユさんの思想は、モンゴルの遊牧社会と日本の地域を研究してきた私にとって、大いに共鳴するものがあつた。そして、大地への回帰と素朴な精神の復活をもとめて、新たな未来像を切り拓こうと思案と実践を重ねている人々が海の向こうの世界にも確かにおられることを知り、読み終えた時には、長らく閉ざされていた視界が一気に晴れ渡っていき思いがした。

周囲の人々に対する先生の生来とも言うべき優しさと根気強さは、次代を担う若者たちに接する大学での日常のお姿にも通ずるものがある。中江兆民の『三酔人経綸問答』（一八八七年）の作中で、民主主義者で理想家の洋学紳士君と膨張主義的国権論者の豪傑君の議論を聞いて、指南役の南海先生が語りかける。曰く「紳士君、進化の神は、人々の思想が合体して、一つの円をかたちづくるものです。思想は種子です、脳髓は畑です。あなたがほんとに民主思想が好きなら、口でしゃべり、本に書いて、その種子を人々の脳髓のなかにまいておきなさい。そうすればなん百年か後には、国じゅうに、さわさわと生え茂るようになるかも知れないのです」（現代語訳）。三十数年の長きにわたり「デイーブ・ピース」くずれぬ平和」の思想を鍛錬し、その種をまき続けてこられた藤岡先生。一つの芽がやがて実を結び、さらなる広がりを見せていく光景に思いを馳せる。その輪の片隅に加えていただいた新参者の一人として、今しばらく先生の近くで学んでいけることを光榮に思う。そ

して、先生の平和へのその尽きせぬ情熱の源泉はどこにあるのか、いつか知り得る時が来るだろう
かと思っている。
(立命館大学経済学部非常勤講師)

学生時代から変わらぬ人となり

井上 昇

藤岡さん、定年退官おめでとうございます。そして三十四年にわたる教育・研究活動本当にお疲れさまでした。

私は京都大学の尾崎ゼミ四期生で、藤岡さんとは尾崎芳治先生のもとで二年間過ごした一人名の一人です。昨年六月に四二年のサラリーマン生活を終え、現在は自分に合ったセカンドライフを目下模索中といった所です。

大学卒業後、同期生同士の交流は活発ではなかったものの、藤岡さんとは尾崎ゼミの集い等でよく顔を合わせ、お互いの状況を知りあえる間柄であったかなと思っています。

学生時代を振り返ってみますと、ゼミでの勉強は藤岡さんは当然ながらよく勉強されており、我々学生同士の議論を常にリードする存在でした。

大学三年時には、各ゼミ毎にゼミ活動の成果である経済論文をまとめて、関西ブロックゼミナー



1968年8月31日尾崎ゼミ3・4年合同合宿（八方尾根）。
2列目左から3人目が藤岡さん、4人目が筆者

この時期は又単に勉強するだけではなく、当面の大学自治問題に関し、学生として「どう考え、どう発言し、どう行動するか」が、個々人に問いかけられた時期でもありました。

当時はノンポリと称してこの問題についての思考を止めてしまう学生も多かったような気がしますが、藤岡さんは、この問題についても自己の信念に基き、発信し、行動されていました。（私は発言も行動も及び腰でだらしなかつたなと回顧しています）

ル大会や全国大会であるインターゼミナールに参加して発表するというビッグイベントがありました。

当時はいわゆる「大学紛争」たけなわの時代で、京大も落ちついて勉強できる雰囲気ではありませんでした。それでも同期生全員で半年かけてレーニンの「ロシアにおける資本主義の発展」を読み込み、長野にて合宿し、福岡大学でのインゼミ発表に向けて取組みました。私はゼミ幹事として計画通り勉強を進捗させていく役割でしたが、外部環境の悪化もあって論文が間に合わないのではとイライラしたものでした。その時、藤岡さんには表だって動くやり方ではなく蔭で常にサポートしていただき、何とか仕上がってホッとしたことを今でもよく憶えています。

その後社会人になって尾崎ゼミの集いなどで再会した時も、藤岡さんの姿に感心させられた事がよくありました。藤岡さんはそういう会の発起人になっておられるのですが、参加された方々に実に細やかな配慮をされると共にまめまめしく動き回られて、表の役割と裏方仕事を両方とも陰日向なくこなされていたのです。藤岡さんのお人柄が偲ばれ、多くの皆さんを魅きつけてやまない理由でしょう。

藤岡さんの研究に関してはコメントできる能力はありませんが、（私は『グローバルゼーションと戦争』を拝読した程度です）藤岡さんの「まっすぐでひたむきで親しみやすい人となり」は学生時代からそのまま変わらないなというも感じている所です。

またそのお人柄ゆえに研究室に閉じこもる事なく、多くの学生さんとの対話、東日本大震災の現地訪問、さらには平和についての種々の発言、提言をされ続けておられるのではと推察いたしております。

今後は特別任用教授としてライフワークの完成をめざされると伺っております。同期生の一人としてその成就をお祈り致します。

（京都大学経済学部同窓生）

関西にFUJIOKAあり

今堀 洋子

藤岡先生は、海外からエコロジィや平和に関わる研究者や活動家が来られた時の関西でのホスト役をずっと担ってこられました。藤岡先生のおかげで、素敵な方々と身近にお目にかかる機会を何度となくいただきました。その中には、ガンジィの非暴力を引き継ぐ思想家のサティシユ・クマールや、「幸せの経済学」の提唱者であるヘレナ・ノーバークⅡホッジ、そして、アメリカの環境思想家ジョアンナ・メイシーがおられます。彼らとの出会いは、私に大きな影響を与えました。藤岡先生に、深く感謝しております。ありがとうございます。

また、藤岡先生は、とてもマルチな方で、講演会の企画から、会計、司会、通訳、歓迎パーティの主催まで、何でも一人でこなされてしまいます。交渉力も抜群で、予期しない場面に遭遇した時に、その威力を発揮される様子を、幾度となく目撃しました。唯唯、感服しております。大学を退官され、益々自由に羽ばたかれることと思います。これからも注目させていただきます。

(追手門学院大学)



2009年11月にサティシユ・クマールの講演会の打ち上げの席で、左から谷川佳子さん、藤岡先生、サティシユ、今堀洋子。背景にコワルチェク夫妻

広島からブラッドフォードへ

岩崎 容子

藤岡先生、ご退官おめでとうございます。先生には私が立命館アジア太平洋大学の三年生の頃に受講した立命館大学、立命館アジア太平洋大学、アメリカン大学の共同科目である広島・長崎のスタディーツアーで大変お世話になりました。

私が参加した二〇〇五年度は例年よりもアメリカン大学側の参加者が多く、約五〇人の大所帯での講義、ツアーとなったとおっしゃられていました。個性の強い学生ばかりで、先輩の学生リーダーも参加者の管理に手を焼いていたのを覚えています。広島・長崎の被爆者の方々の話を聴いたり、講義を受けてそれを元にディスカッションをしたりと、この授業を通して核兵器とは爆発した時点で終わりではなく、苦しみが始まる兵器なのだ学びました。残念ながらそれ以降先生の授業を受ける機会には恵まれませんでしたが、核兵器を取り巻く国際社会や被爆者の社会環境についての興味は薄れることはなく、卒業後に製薬会社に就職してからはより一層興味が増しました。

どうしてもその思いが忘れられず、先生にオプザーバーとしてスタディーツアー参加をお願いしたのは二〇一〇年のことでした。それまで疎遠だったにも関わらず快く受け入れて下さった先生のご厚意には本当に感謝しております。その際に長崎で行なわれたディスカッション「長崎の原爆投下の目的について」を受けて、もっと勉強したいと大学院進学を決意しました。先生には入学の為の

推薦状を書いていただいたうえに、志望校の訪問のご経験があるということで学校の雰囲気なども教えていただきました。その言葉が励みとなり無事合格通知を頂き、一年間イギリスのブラッドフォード大学大学院平和学部の国際政治と安全保障コースで学びました。苦手な英語と慣れない環境ということもあり、なかなか思うように課題をこなす事も、成績をとる事もできずにふさぎ込む事が幾度もありました。課題締め切り前の切羽詰まったとき、プレゼンのミーティングで他の学生に圧倒されて何も言えなかったときなど、落ち込むたびに留学前に先生から頂いたハガキを読み直し、そのたびに勇気づけられたことを今も鮮明に覚えています。わずか一年間ではありましたが、何度あのお葉書に救われたか分かりません。

昨年二〇一二年一二月に無事大学院を卒業し、帰国後すぐに広島平和構築人材育成センターの「平和構築基礎セミナー」を受講いたしました。先生にきちんとご挨拶も出来ない間に二〇一三年二月からは長崎大学の核兵器廃絶研究センター（RECNA）でのインターンが決まりました。今後は核兵器を取り巻く環境を中心に、国際協力分野で活躍出来ればと思います。この進路選択に強く影響を与えてくださった先生のご指導に深く感謝し、今後のご健康とさらなるご活躍を祈念いたします。

中学の元社会科学教師からの期待

岩下美佐子

私は乗松聡子さんを通して、先生とお知り合いになることが出来ました。第六回の国際平和博物館会議での報告依頼をいただいてからです。私は、大学の教授・研究者には「難しく、苦手」ないメージを持っていましたが、先生は会ったその時からとってもフレンドリーで、ずっと前からの親しい友人であったかのような気楽さを与えてくださいました。「アッチャン先生」とみなさんが呼ばれているのはびっくりですね。これはとても大切なことなんです。「図々しすぎやしないか」と遠慮や心配することなく、先生の行く所へついていく、恥ずかしいと思わず何でも質問できる、アッチャンには自分の意見が言える、同意や励ましをいただけたら、それこそ自信が持てる。先生は研究者であって、教育者、しかも若いコペル君だけでなく、退職者であり、同年代の私まで育てられる！アッチャン先生、心から感謝しています。

私に自信を持たせて下さった藤岡先生

長い研究・実践を経て確立されてきた近現代史の授業に対して「自虐史」であると攻撃し、教科書も改悪しようとする歴史修正主義の動きは、再び教育を政治に利用するものであり、こどもたちの未来を奪うことです。真実を隠して「自虐史」を「克服」し「国を愛する教育を」ではなく、真実を教えるからこそ自国の人々、さらに国を超えて人間への信頼、希望が生み出されるのだ、と確

信しています。三五年間の中学校の授業の中で生徒たちに私が教えられてきたことでした。藤岡先生はその私の教育実践を報告する場を与えてくださり、そのことから私の第二の人生の出発があります。今私は「歴史の事実を踏まえるからこそ、未来に希望があり、また偏狭なナショナリズムを超えて国際連帯ができる」という視点で近現代史の学習会をしたり、各地の平和運動に呼ばれて、お話をしたりしています。「もう一つの世界は可能だ」というテーマのもと開かれている世界社会フォーラム、それと連帯する大阪社会フォーラムの事務局のメンバーとして、アタックの方々と一緒に活動しています。昨年は「もう一つの世界は始まっている」とサブテーマを付けて、アメリカのウイスコンシン州のオキユパイ運動の中心になった先生方を招きました。

アッチャン先生、おもしろく豊かな第二の人生を、そしてやっぱり教えてくださいね。いつまでも、私たちの先生であって、同年代の何かやらかしそうなお友達であって、平和と人々のために働く研究者・実践者であってください。

夫のこと

私の友人たちは、私たち夫婦のことをこのように言います「妻（私のこと）は人の居る方へ、夫は人の居ない方へ行く」と。私は教育、平和運動、国際連帯などに走り回っていますが、夫は「エセ農民」、自然との共生に一生懸命。退職後は米作り、古代米の出荷までしていましたが、イノシシとの戦いに敗れて、農地は親戚に返却。現在は自給用の野菜、果物栽培をしながら森林インストラクター、森林セラピストの免許を取り、里山再生や人々を森林で楽しませる活動をしています。

藤岡先生の第二の人生「半農半？」のちよつと先輩かもしれません。

友人が言うように、夫と私は全然違ふ方へ歩いていると思つていましたが、最近、特に三・一一の震災以後「いや 実は同じ方向へ歩いている」と思えてきました。先生！ 夫の取り組みもなかなか興味深いですよ。仕事は大阪に求めながらも、山、水、田圃を大事にする奈良の小さな市、私の家へ是非ご夫婦で遊びに来てください。「なつかしい未来」——地球の自然と人間どうしが尊敬され大切にされる、そんな夢を語り合いたいです。

(中学校の元社会科教師、奈良在住)

藤岡さんとのミシシッピでの思い出

上杉 忍

思い起せば藤岡さんとは、ずいぶん長いつきあいです。最初にあつたのは今から四〇年も前、お茶の水の駅だつたと思います。初めて会つた「レーニン主義者（失礼！）藤岡さん」の姿がとても印象的でした。

その後いろいろなところでご一緒しましたが、何といつても一緒に真夏のミシシッピを訪ねた時のことが最も印象的です。ミシシッピ・デルタの黒人地帯で、公民権闘争を闘つた経験のあるとても貧しいごく普通の黒人家庭を訪ねた時のこと。外がとても明るかつたからでしょうか暗い家の中

には大きな古い黒い扇風機が置かれているくらいしか見えなかったような記憶があります。対応してくれた真つ黒な顔の年老いた「おふくろさん」は、私たちを中には入れてくれず、戸口に立って静かに答えてくれました。

正直に言つて、私には彼女が何を言っているのかほとんど聞き取れませんでした。それでも藤岡さんは、例の関西弁ふうの英語でどんどん質問していくのです。ずいぶん長かったような気がしました。私は、事前にアポもとらずに、この暑いで老婦人を立たせ続けるのは、少々、酷なんじゃないかと、藤岡さんにせっついたのでありますが、そんなことでは彼の探究心の火を消すことはできませんでした。結局、「また今度来た時にゆつくり話しては？」と言つて、ほとんど無理矢理、彼をその場から引き離したのですが、彼はとても不満そうでした。その迫力に打たれました。その次の年に彼はまた一人でデルタ地帯を訪ね、実にポイントをついた調査活動を行い、まもなく名著『アメリカ南部の変貌―地主制の構造変化と民衆』（青木書店、一九八五年）を出版されました。

彼との旅は、ノースカロライナから始まって、インディアナ、テネシー、ミシシッピ、そしてルイジアナまで、一週間以上にもわたるものでした。彼は、丁寧な京都人で、関東人の私とは違つてとても奥ゆかしいところがありました。ある時、走行中の車にリングゴが一つ残っていました。どうやら彼はそれが欲しかったようです。ところが、彼は「リングゴいかがですか」と聞いてくるのです。私は、ただ「欲しくない」といった意味の答えをしたと思います。すると彼はおもむろにそのリングゴを取り上げて、むしゃむしゃやり始めたのです。なるほどそれが京都風の奥ゆかしさなのかと感

心させられました。「なぜ、自分は欲しいので、食べていいですか、という聞き方をしないんだ！」と私は思ったものでした。

その後彼は、その実践の過程で、レーニン主義者から見事に脱皮して、極めて柔軟で大胆、かつ創造性に富む自然主義的な主張をするようになりました。私は彼のエッセイに痛く感動して、そのファイルを大学時代の活動家だった友人に配布したほどです。

どうやら藤岡さんは、まだまだ進化するつもりの方です。誰もそれは停めることはできないでしょう。でも藤岡さん、自然の法則には従わねばいけませんよ。

(北海学園大学)

「宇宙の平和」を求めて、英国と米国の地から祝福を

デエイブ・ウエツプ
ブルース・ギャグナン

藤岡惇教授は十年來の仲間であり、同じ目的のために協働する運動家であり、友人です。この間、彼はみじんも揺るぎませんでした。世界各地で開催されるGN（宇宙への兵器と核エネルギー配備に反対する地球ネットワーク）年次総会で、毎年のように私たちは再会しますが、その折に彼は、

深刻な問題に人間味豊かな感性を取り混ぜ、いつも前向きで役立つコメントを与え、その巧みなユーモアのセンスと他者への配慮を通じ友情の大切さを我々に思い起こしてくれました。

二〇〇七年八月に、藤岡さんとピーター・カズニック教授が共催する日米大学生のためのサマースクールと広島・長崎研修旅行に参加するため、私は妻のレズリーとともに来日しましたが、その際、藤岡さんから心を尽くした歓待を受けました。来日した米国の学生たちが先生としても友人としても、いかにすぐに彼を好きになるのかを見て、私は本当に示唆を得ましたが、加えてレズリーと私への細やかな気配りや、何度かの夕食への招待、京都での日本文化紹介など、私たちが旅行を楽しめるように取り計らってくれました。その親切は大変有難いものでした。

韓国ジェジュ（済州）島カンジョン村での韓国海軍基地建設を阻止し、故郷と自然環境を守ろうと非暴力の闘いを続ける村民たちを支援するためにGNは、二〇一一年の年次大会をジェジュ島で行いましたが、その会議での彼との再会を、私は忘れないでしょう。基地建設に抗議して立つ我々の間で、藤岡さんは孫娘から贈られたスヌーピーの小さなタオルを振っており、やや奇妙な印象でしたが、彼のスピーチを聴いて、事情が良く理解できました。暴力と戦争では我々は今



写真の左側はDave Web、英国リーズ・メトロポリタン大学教授、Cam-campaign for Nuclear Disarmament議長、GN議長。右側はBruce Gagnon、GNコーディネータ、米国メイン州在住

後の世代の平和と生存を確保できないとの認識から暴力と戦争に利用される基地の建設に、彼は抗議しようとしていること、スヌーピーのタオルは、感謝と愛情のしるしとして次世代のひとり（孫娘）から彼に与えられていたことを。

私其他の皆も、彼の「スヌーピータオル型の平和運動」に加わるつもりです！ アツシ、ありがとう、そして定年退職おめでとう！ 心からの祝福を
（デエイブ・ウエップ）

アツシ・フジオカは何年にもわたりすばらしい友人であると同時にグローバルネットワーク（GN）の理事のひとりです。GNとは、どんな団体であるかに興味をおもちの方は、私たちのホームページ（<http://www.space4peace.org>）を訪問してください。

アツシは、世界各地でGNの総会を開く際には、日本の友人たちを連れてきてくれましたし、私
が日本各地を講演旅行するのを手助けしてくれました。軍拡競争が宇宙へと拡大するのを阻止しようとする我々の運動を日本の人たちに広め、根付かせようと、アツシは、私たちの文書や声明をこれまで日本語に翻訳してくれました。

何より言いたいのは、アツシは人を愛し、人と分かち合う、親切で平和を好む人だということ
です。アツシの定年退職に際して、彼の前途に最良の幸福が訪れることを私たちは祈ります。私たち
は、アツシが大好きです。

（ブルース・ギャグナン）

（翻訳：佐藤真喜子）

藤岡さんの魅力

宇佐見義尚

私が藤岡さんを初めて知ったのは、一九九〇年代にICU（国際基督教大学）で開催された大学教育学会で、シンポジウムのパネラーとして壇上にいた藤岡さんでした。確か、その時の藤岡さんは経済学教育学会代表での参加だと記憶しています。藤岡さんの斬新で謙虚な発言内容に魅了された私は、シンポジウムが終り壇上を降りてきた藤岡さんに、さっそく経済学教育学会（二〇〇三年に経済教育学会と改称）への入会を申し出たのでした。それ以来、藤岡さんと私との付き合いは、主に経済教育学会を通じて二〇年にもなります。経済教育学会関連で、お会いするのは、お互いの出席事情にもよりますが多くて一年に数回（春の研究集会、秋の全国大会、その間に何回か開催される役員会）でしたが、そのたびに藤岡さんは、その時々のご自分の問題関心に関する論文の抜き刷り、新聞切り抜きのコピーなどを、惜しげもなくたくさん提供してくれました。

さて、藤岡さんについて、私の頭の中に浮かぶ人物像は、①常に穏やかに笑顔を絶やささない、京都男弁の優しくも独特な言葉使いの人。②素直でお茶目で、物事の本質を捉えて思わず本音を漏らすうっかりミスも、明るく詫びて一層の信頼感を得てしまう憎めない人。③教員・研究者として、常に学生と共にある人。④戦後民主主義の残渣を残しつつも、新時代に柔軟に対応できる国際派。⑤経済教育学会の民主的運営に人知れず貢献している人。⑥人一倍の努力と謙虚な姿勢を持

つ人。⑦権力に抗う自由な精神の持ち主。⑧言葉と行動を一致させる行動力を持つ人。⑨物事を世界的・地球的規模で考える人。⑩社会科学の目的を、戦争・紛争のない世界の実現とする明確なヴィジョンを持つ人。

人生には三つの出会いがあると云います。人との出会い、本との出会い、その二つの出会いの相乗効果の上に、究極な自分との出会いがつくられるのだと言います。究極な自分との出会いを果たすための人との出会い。私の人生にとっての藤岡さんは、そうした出会いの人であるに違いありません。藤岡さんとは、これまでの二〇年に加えて、さらに今後の二〇年に向かって、心温まる多くのエピソードに彩られた秀逸な出会いの創造を期待できる、私が兄とも慕う、私と同波長の貴重なお方なのです。

(板垣興一文庫代表・「アジアとの対話」編集主幹)

アッチちゃん先生と平和なエコ・エコノミーの創造

牛田 有香

藤岡先生、ご退職おめでとうございます。先生に初めてお会いしたのは大学一年時、どこのゼミに入ろうかと考えていた頃のことでした。先生のゼミの紹介を読み、「平和の経済学、エコ・エコノミー」という単語に惹きつけられた私は、早速藤岡教授室の扉を叩きました。その後大学二年時

のゼミでお世話になりましたし、三年時には他のゼミに転ゼミしたにも関わらず、論文にアドバイス頂いたり、研究テーマに関連する文献を貸して頂いたり、人生相談に乗って頂いたり、先生はいつでもオープンに温かく接してくださいました。先生の授業方法は、机上・教室だけで教えるのではなく、生徒に体感・共感させることで、何かを伝えていくスタイルを取られていたことを思い出します。ゼミの一環で大学の裏山に登り、皆で自然を感じたことは記憶に新しいです。プライベートでゼミ生を湖西の別荘に招いて頂いたことを今でも思い出します。

私自身は立命館大学で開発経済学を学ぶ中で、二年時に、モンゴルの国立養護施設の子ども達と、郊外で野菜の収穫をする国際ワークキャンプに参加しました。そこでは電気・水道はありません。日の出とともに起き、日の入りとともに寝ます。排泄物は土の肥料となり、土から草が生え、牧畜の餌となります。まさに食物連鎖を体感できます。私は日本では都心に住み、とても便利な暮らしをしています。しかしモンゴルで初めて、大きな太陽が大地に沈んでいくのを眺めながら、ただ生きていくことの素晴らしさを感じることができたのです。

一方でこのような貴重な経験をさせてくれたモンゴルには、市場経済化を契機とした、失業や貧困という深刻な問題がありました。そこで三年時には、伝統的な遊牧社会と市場経済化の折り合いを念頭に置きながら、「モンゴル国の市場経済化による弊害とその解決に向けて」というタイトルのもと、論文を作成いたしました。今でこそ感じているのは、この時の私の着眼点や思考回路は、憎越ながら藤岡先生の影響を多分に受けていたのではないかとことです。藤岡先生は「自然の

なかの社会と経済」という論文の中で、「自然の秩序のなかに社会を正しく位置づけ、社会のなかに経済を正しく位置づける課題、市場経済と国家をふたたび社会と自然のなかに埋めこんでいく課題に直面している」と述べられております。私の着眼点は、藤岡先生の研究課題の真似事であったように感じます。

今回寄稿の機会を頂いたことで大学時代を思い返すことができ、感謝しております。「平和なエコ・エコノミー」は、私にとって永遠の課題です。今パソコンに向かっていても、世界のどこかで貧困や紛争で亡くなっている人がいます。藤岡先生に教えていただいたことを活かしながら、今後「平和なエコ・エコノミー」の創造に対し何ができるのか考えさせて頂きたいと思えます。

最後になりましたが、藤岡先生、今までご指導頂き本当にありがとうございます。今後益々の藤岡先生のご活躍とご発展をお祈り申し上げます。

藤岡先生のように、あなたはなれますか

遠藤 雅彦

世界中の友達が、先生を助けてくれる。もちろん日本中に味方がある。君は一社会人として、先生のようになれますか？ 僕はゼミ生ではありません。

大学卒業後五年ぶりに先生に再会した僕は、東日本大震災で被災して津波で家を失い、原発事故から放出された放射能の情報を関係筋から得て関西に逃げこんだ被災者でした。僕は先生や学生たちに、あの当時何が起きていたのかとにかく伝えたくて母校を訪ねました。藤岡先生ならきつと話を聞いてくれるのではないだろうか？ 誰より社会に必要な他者を愛する心を説き示していた先生と話さなければと思っていました。

東日本大震災および原発事故は、単なる広域災害ではなくて、あまりにも人の命の尊厳を傷つけて続けている出来事です。僕の多くの友人、先輩、後輩、親戚、そして家族が、被災や放射能汚染を、どうしようもないとして、それまで普通だったものを諦めてしまった。普通に幸せを謳歌できたものを、諦めてしまった。人とのつながりが、それまでにあつた愛情も友情も、不健全に絶たれてしまった。この悲しみから故郷を助けたい。僕の愛した、家族、友達、先輩、後輩たちがあきらめたものや今なお見えない犠牲を増やしたくなかった。この思いを先生に伝えたかった。

二〇一一年の後期開始ごろ（僕は先生の授業予定を確認するために、すでに何度か、学校に来ていました）、急に立命館大学BK Cの研究室を訪ねた僕のことを先生は覚えていてくれました。そして、話を聞いてくれて、手を差し伸べて助けてくれました。ゼミ生でもない僕がなんで、覚えてもらったのでしょうか？ 僕はゼミだけではない関わりを学生時代、藤岡先生と持つことができました。そしてそれはきつと、みんなの知らない、藤岡先生の顔かもしれません。

四回生の時でした。僕はBK C自治会の事務局長としてBK Cの先生方が今の大学での授業のあ

り方について話し合う会合に、学生として参加していました。その中では経済学部の松本朗先生が「企業はどういう人材を求めているのか？」と学生を社会へ送り出すためにどういう指針が必要か、就職活動を終えた僕に聞いてくださったり、理工学部の池田研介先生が「自分自身は教壇に立つ限り、教員としてのあり方をずつと悩んでいる」と、よりよい授業をしていくにはどうしたらよいか、学生の僕が参加していてもお話ししてくださったことを今でも覚えています。

その真ん中に藤岡先生がいたと僕は感じていました。前期と後期の一五単位ずつしか、コミュニケーションをとる機会のない先生方が、学生の成長がどうあるべきで、それに対してどんな授業が展開できるのかアツく語り合うのを見て、そこには学生への愛があるのだと知りました。藤岡先生の授業の源には、君たち学生によく育ってほしいという想いがあります。それはBKCの先生たちと一緒に話し合う場も持たれて育まれていたのです。

学生時代先生と初めて関わらせて頂いたのは、三回生の時の授業のアシスタント(SA)、そして学友会の二〇〇五年度サークル連合委員長、二〇〇六年度のBKC自治会事務局長を勤めた時でした。僕は必死に大学が今よりよくなるにはどうしたらよいか考えて活動する、そんなアツい学生でした。

そのような中で、三回生の平和の経済学を選択して、先生が当時から募集していた授業アシスタントに志願したのがはじめて藤岡先生の授業を受けた経験でした。とにかく気合を入れてSA(ステューデントアシスタント)の役目をこなしました。当時一緒だった先輩とは今でもつながりがある。

ります。震災のあと心配して訪ねてきてくれました。

一五回の授業のはじめの一〇分間を授業アンケートの結果分析に加えて授業テーマにあわせてリサーチ発表などができるSAは、大講義という大人数の中でプレゼンテーションの練習ができるものすごく貴重な機会です。これは社会に出てからはなかなかない練習機会になります。

学生が主体的に授業に携わる仕組みを藤岡先生は作ってくださいっていました。授業の一〇分間を預けることは、とても思い切ったことです。先生は授業を信頼する相手、ゲストに譲って先生の伝えたいテーマを授業時間内に伝える、という手法を用いていると感じました。確かな人脈がないとそんなことは出来ません。

また、先生はたくさんの文章を資料として配られます。それら一つ一つの資料は、大事な授業のエッセンスが詰まっています。膨大な量の文章を学生に読んでもらうべく準備すること、それも時事や社会状況に合わせて変えていくこと、その手間ひとつひとつは大変なものです。先生の論じるグローバルゼーションによる経済の世界への影響の是非と危険性を伝えるうえで読んでおく必要のある文章を学生に示してくださいます。

三回生のとき一年間藤岡先生の授業に触れて授業作りに先生は手を抜かない人なんだなと思いました。藤岡先生のような方がいらっしやるのが僕はうれしかったです。学生にだって授業にだって可能性はある。よりよいものにしていけると学生として確信できました。

そして、四回生になり、前段にあった話し合いがBKCの先生方の間で行われていて、愛をもつ

て学生たちと向き合う藤岡先生たちの姿に出会いました。

加えて四回生の時に選んできた近江草津論が、BKC地域に密着したフィールドワーク中心の授業として新鮮だったのを覚えていきます。草津街明かりへ参加させていただき、地域が地道に街づくりをしていく大切さを学ぶことができました。菜の花プロジェクトでは海外の方がゲストに来るなど、語学以外では当時のBKCにはほとんどない経験をさせていただきました。震災後聞いてみると草津街明かりの反省交流が、授業を越えて日曜日を使って行われているようです。すばらしい出来事が進化していく、その種を藤岡先生はたくさん撒いてくださったと僕は思います。

震災後に先生を訪ねて、僕の話をつぶさに聞いてくださり、学生たちに僕の経験を話してほしいといっていたとき、何度か授業やゼミにゲストとして入らせていただきました。先生は僕が生きられるように支援をしてくださいました。そして僕が当時はじめた、当事者としての問題解決の取り組みは社会に必要なものだから何とか形にするようにと後押ししてくださいました。そして近江草津論の藤岡先生の次の担当講師である山口洋典先生を紹介いただき、大阪でも改めてお世話になっています。

平成二四年度福島県地域づくり総合支援事業の震災対応案件を取得して大阪に事務所を構えて活動することが出来るようになりました。先生の後押ししてくださいました、活動を形にするということが僕なりにまずは出来ました。この話を先生に報告にあがったとき、先生は本当に喜んでください

ました。

手を差し伸べて誰かを助けて、それに答えるのは難しいことかもしれません。しかし藤岡先生に出会い、先生が学生を愛して、教育を愛して向き合う姿を見てきて、命を救っていただいただけでなく、先生から「命を愛する仕方」も学んだと僕は思います。

ミヒヤエル・エンデの「モモ」は、時間が人を支配していく産業革命での人と経済のあり方の変化を描いており、先生の授業にも引用されていました。小さいころ僕は、今はなくなった家に初めてビデオが入った時、母が映画「モモ」を買ってきてくれて何十回も見ていました。その中でモモは（時間泥棒が時間を奪っていく世界で）「君に何が出来たのか？」と聞かれて、「私に出来ることは話を聞いてあげることだけ」と答えます。そのシーンをよく覚えています。耳を傾けてあげられること、それが出来れば、問題解決の糸口を見つけたり、平和に復することもできます。藤岡先生は耳を傾けてくださる先生です。

先生は定年という節目を迎えてもまだまだ若者や教え子と向き合うこともあるかと思えます。先生が彼らを愛するように、彼らがまた、誰かを愛してくれることを願います。そうして友達が困ったら助けてあげられる人になってほしいと思います。僕は先生と出会えてよかったです。

二〇〇九年の平和の旅でお会いして

大槻とも恵

藤岡先生に初めてお会いしたのは、二〇〇九年の夏でした。トロント大学からの参加者として、広島・長崎・京都のピース・ツアーに参加させて頂いたのがきっかけでしたよね。あの後も、ピーター・カズニック氏と木村朗教授共著の本を送って頂たりと、大変お世話になりました。あれからもう三年以上経ったんですね。その間に世界は大きく変わりました。日本では東北大震災が起こり、被災地の人々のこれからの生活や、原子力・放射能の問題などが浮き彫りとなりました。大きく変化する世界情勢・国内情勢のことを考えると、藤岡先生の退職はまだ早いのではと思ってしまうす。

私が共に過ごさせて頂いた二週間、藤岡先生は、素晴らしい研究者・教育者にも関わらず、いつも人々を和ませることに徹底されていました。なので、学生たちにもとても慕われていた姿が記憶に強く残っています。去年の冬、偶然滞在先のイタリアで、少し昔のイタリア映画をテレビで観ました。その主役が、コメディアン出身のイタリア人の役者だったのですが、どこか藤岡先生を彷彿させるものがありました。名前を思い出せないのが残念ですが、悲哀の中にもユーモアの味を効かせるその役者と藤岡先生が、私の意識の中で重なって見えました。

東北大震災に続き、原発の放射線問題が露呈した後、海外のメディアでは、日本人は原爆の歴史

からあまり学んでいないという論調が目立ちました。何年にもわたり、アメリカと日本からの若者たちに原爆について教えてきた藤岡先生は、どうこれらの言説に対して考えられますか？こんなことを考えると、まだまだ藤岡先生には現役を続けて頂きたいです。

最後になりますが、これからの人生を刻まれる時間も、素晴らしいものでありますよう心からお祈り申し上げます。長い間、本当にお疲れ様でした。

(トロント大学・博士課程在籍)

アツちゃん先生ありがとう

大橋 昂平

二〇一二年度藤岡ゼミナールのゼミ長を一年間務めました、立命館大学経済学部の大橋昂平です。藤岡先生には一回生時の基礎演習から三年間まるまるお世話になりました。私の大学生活は藤岡惇という人間なくしては語れないでしょう。基礎演習の一番最初にやったことは「人間知恵の輪」。みんな『なんだこれ？』と戸惑いながらも、それがきっかけでクラスのメンバーが仲良くなりました。私が一回生の終わりに藤岡先生のゼミを選択した理由は先生の人柄とゼミの雰囲気でした。先生の温かい人柄と自分たちから動いてゼミを作ることに魅力を感じ、藤岡ゼミを選択しました。

先生を一言で表すなら「アグレッシブなおじいちゃん」だと思います。二〇一一年の年末にゼミの男子でスノーボード旅行に梅池へ行ったのですが、とても六〇代とは思えないスキートの腕前で私たちを置いてどんどん滑っていました。二泊三日の予定でしたが、それでも滑り足りないのか先生は一人だけ残ってもう一泊するとおっしゃった時は旅行に行ったメンバー全員が驚いていました。

そんな先生のゼミでの研究内容は『平和なエコ・エコノミーの創造』。環境と経済を如何に両立させるか世界の政策を参考にしながら日本に適したものを研究しました。しかし東日本大震災が起こり、三回生のゼミからは震災のことが中心となっていました。先生が知人の記者や実際に被災した教え子をゼミに招いてくださり、体験談やメディアでは報道されなかつた被災者の声を話していただきました。他のゼミでは聞けない、藤岡ゼミならではの貴重なお話が聞けたことを有難く思います。そして夏休みには福島・宮城へとフィールドワークに行き、仮設住宅や津波の被害で人が住めない地域を見学、被災地の現状を目の当たりにし驚愕しました。夜には地元の大学生と討論を行い、互いの思いを話合いました。この東北へのフィールドワークは私のゼミ活動の一番の思い出です。このようななかなかできない体験をできたのも藤岡先生が企画してくれたおかげであり、たいへん感謝しています。この貴重な体験を生かし、この旅行での出会いに感謝して今後社会に貢献していこうと思います。

三年間という長きに渡りたいへんお世話になりました。今後もゼミを持つということではありませんがここで一区切りということで、節目の一年に藤岡ゼミのゼミ長をやらせていただいで嬉しく思

います。これからお身体には気を付けて、藤岡先生らしく元気で自由奔放に生徒を教え導いてくださいね。

(二〇二二年度藤岡ゼミ・ゼミ長)

一八年前に二〇〇名余の学生を引率して

ピーター・カズニツク

今から一八年前の一九九五年に立命館大学の藤岡 惇教授と私の呼びかけで、日米学生の「平和の旅」を始めました。この旅は、参加者のもとより、彼らにつながる無数の人々の人生を変えるパワーをもつことになるのですが、最初の頃は「そんなすごいことを始めた」という意識はありませんでした。第一回目の旅に際しては、幾多の忘れられない出会いがありました。三年前にオープンしたばかりの京都の平和ミュージアムを訪問したことには、鮮烈な印象が残っています。それまで私には、平和ミュージアムなるものを訪問したことがなかったからです。それ以来（中止した一九九七年を除いて）、京都と広島には合計一七回、長崎には一五回、学生たちと訪れました。合計すると二二〇名以上の学生を米国から平和の旅に引率してきました。藤岡先生も、ほぼ同数の学生を立命館大学と立命館アジア太平洋大学から募り、引率されてきました。私の教え子たちが、平和の旅を「人生を変える」経験だったと述べるとき、それは言葉の上のお愛想ではありません。

せん。この旅を体験するなかで、彼らの多くは実際に自分の人生を変えたからです。

反核・反戦の活動家として自らの人生を踏み出した者もいますし、この旅がきっかけとなって、核問題に関する学位論文を書いた者もいます。何人かは、高校や大学の教壇から、広島や長崎のことを学生たちに教えています。旅の経験を職業と結びつける道を選ばなかった者も、広島・長崎の心を体した人生を歩んでいるといっただけでしょう。

広島・長崎の心を学ぶ旅というのは、毎年、京都の平和ミュージアムが出发点となります。「平和」を展示するミュージアムがあるということに、まず私の教え子たちは驚きます。米国にもたくさんミュージアムがあります。無名に近いミュージアムのなかには、いくつかの例外があるのでしようが、ほとんどは「戦争」ミュージアムだといってもさしつかえありません。立命館のミュージアムを參觀したあとに、いつも「ふりかえりタイム」をもち、学生たちに、どんな印象をもったかを尋ねるのですが、米国の軍国主義だけでなく、日本軍国主義とその侵略の歴史にも、立命館のミュージアムが批判的なスタンスをとっていることを、学生たちは、ほぼ異口同音に称賛します。原爆の投下、冷戦と核軍拡競争、最近ではアフガニスタン・イラクへの侵攻に米国が責任を負っているというミュージアムの展示を見て、目を開かせられたと述べる学生も多くなります。帰国したら、日本で学んだ教訓を学生仲間や友人・家族と分かち合いたいと言ってくれます。

京都の次に、広島と長崎のミュージアムを訪問します。これらの被爆地では、谷本清牧師の娘の近藤絃子さん（彼女は一日間の全行程を同行してくれます）はじめ、多くの被爆者と会うのです

が、その体験を積み重ねるなかで、上で述べたメッセージは、ますます確固としたものとなつていきます。

この類いまれな「平和の巡礼」を一八年間続け、今日の姿に発展させることができたのは、近藤絃子さんをはじめ多くの被爆者の寄せられた絶大なご協力が第一ですが、バンクーバーで Peace Philosophy Centre を主宰する乗松聡子さんの卓抜な通訳力量と人間的魅力に加えて、参加者をなごませる藤岡さんのユーモアと組織力のおかげなのです。

(アメリカン大学教授・歴史学)

ソフトなパワーで世界を平和に

片岡 明

藤岡先生とはいつの間にか親しくさせていただいたように思います。なにかしら魅かれてしまう、不思議な力を持った方ですね。組合活動や平和の取り組みではなにかとお世話になりました。とくに核兵器廃絶の運動で、ヒロシマ・ナガサキだけでなくニューヨークでもがんばっておられる藤岡先生の姿に励まされました。ときには宇宙にまで世界を広げ、平和について熱く語られる姿には、おおいに感化させられたように思います。これからも知的な刺激を与えていただき、ソフトなパワーで世界中をやりわりと包んでいってほしいと思います。

(立命館大学職員)

「コスタリカ・コーヒー」と「平和友の会」二〇年

片山 一美

退任されても大学には残られるとのこと大変うれしく思います。平和友の会の会員としてもこれまで学習会の講師や会報「平和友の会だより」への寄稿など、大変ご協力いただき感謝しています。二〇一三年は、平和友の会結成二〇年になりますが、一九九八年に結成五年のとりくみとして映画「軍隊のない国コスタリカ」の上映、コスタリカの学習会などいろいろ知る機会がありました。

その中の一つに低農薬で栽培されたコスタリカのコーヒーを会員に広めようというのがありました。その時お世話になったのが藤岡先生でした。当時二五〇グラム六〇〇円のコーヒーは決して安いものではなかったのですが、フェアトレードのこと、コスタリカという国について場所や政治的事情などほとんど地球の裏側の国について本当に詳しくなりました。

それが今、国際平和ミュージアムのガイドで日本国憲法について話すときとても役に立っています。憲法九条の意味の大きさ、重さを伝える時、合わせてコスタリカのことも紹介しています。

今年は二〇年としてのとりくみもあります。色々とお世話になることも増えるかと思いますが、よろしく願います。

これからも、ご健康で活動されることを祈っています。

(平和友の会 会員)

ミミズから国際平和を！

桂 良太郎

藤岡先生はわたくしのモットーである「ゆめ・ゆとり・ゆうき」すべてにおおきなヒントを与えて下さった大恩人の先生です。まず「ゆめ」については、「国際里山塾構想」のヒントをくださいました。「ゆとり」については「平和学と福祉学の接点」の大切さをお教えくださいました。そしてなによりも「ゆうき」については、「もの言えぬものたちのために！」という信念の大切さをお教えくださいました。それらの原点は、すべて「ミミズから国際平和を」という先生の教えからです。

小生はいま生駒高山地区にて、将来の国際里山塾構想を練っております。毎月一回の割合で、外国人留学生たちと地元のごどもや里山を保全しようとしている市民の人たちと絶滅危惧種の「オオタカ」や「サンショウオ」を守るために、「生駒高山里山公園をつくる会（里山クラブ）」なるものをたちあげております。土（ミミズ）からもういちど私たちは平和の尊さを学び直さなければなりません。それらをお教えくださいました藤岡先生のご健勝と益々のご活躍、ご指導をお願い申し上げます。

（立命館大学国際平和ミュージアム元副館長）



「平和友の会」から見た先生

川畑 康郎

「平和友の会」は、立命館大学国際平和ミュージアムを拠点に自主的・自立的にボランティア活動をしている市民団体です。ガイド、学習、広報、交流などの部会があります。

一九九二年、国際平和ミュージアムが開設された翌九三年、常設展示のボランティアガイドの養成講座が開かれ（藤岡先生も講師陣の一人）、修了後に受講生の有志で平和友の会を結成。今年一月に二〇周年を迎えます。

会員の一人でもある先生と平和友の会とのかかわりについて三点ふれます。

①開かれた大学の構成員としての先生

毎年八月開かれる日米両国大学生の交流の場や公開授業などに会員の参加を呼びかけられます。また、子どもの平和像を作る過程や会員の個人的な国際交流での適切な助言など、教室での学生相手の講義だけにとどまらない視点の持ち主です。

②教育者としての先生

二〇一二年の秋に平和友の会に文学部の授業「リテラシー入門Ⅱ」でミュージアム見学のガイドの依頼がありました。指定の日時に担当者が待機していたのですが、日時の設定が適切でなかったためか姿を現した学生はまばらで、代わって、先生の講義でレポート作成を課せられたBKCから

の来訪の学生の姿が相次ぎました。

昨今の相つぐきびしい情勢を考えれば、ミュージアムの果たす役割はますます重要になってきます。それだけに平和への揺るぎない熱い想いが産みだされるに違いない見学者を増やす努力は喫緊の課題です。それへの挑戦の一つを垣間見た感じがします。

③研究者としての先生

平和友の会は、これまで学習会の講師はじめ、折にふれて貴重な助言を度々いただきました。

一例をあげます。平和友の会の広報紙「平和友の会だより」に三回にわたり先生の労作「米国はなぜ二発の原爆を投下したのか―ヒロシマ・ナガサキの悲劇の教訓」を掲載しました。(二〇一〇年九月〜十一月) 五万字を超える力作は、先生がこれまで長年かかわって来られたジャンルの集大成の一つともいえます。大変示唆に富むもので、ガイドの時に早速役立たせてもらっています。より多くの方に読んでほしいと思います。

この度退職されると聞きました。残念ですが、今後もご活躍される由、これまでのご厚情に感謝しつつ、これまで以上の親交を深めていただくようお願いする次第です。

ベルギーの地からの追憶

岸本 聡子

オリビエ・フリーデマン

藤岡先生、長年のお勤め、お疲れ様でした。この短い文章を書くにあたって私をはじめて藤岡先生とお会いしたのはいつだろうか、と思いつくのにしばし時間がかかりました。私は学生としてではなく環境活動家として、一九九七年気候変動枠組み条約会議（COP3、京都会議）が開かれたときに先生とお会いしたのです。私はA SEED JAPANという若者の環境NGOで京都会議に向けた活動や海外からの活動家の受け入れなどに奔走していました。縁あって立命館大学の学生さんたちと出会い、結果的には日本全国から集まる青年たちの宿泊などの受け入れを立命館大学が全面的に支援してください、さまざま活動を展開することができたのです。大学の枠を越えた社会的な活動に協力するという立命館大学の懐の深さに感激しましたが、とりもなおさず、藤岡先生をはじめオープンでプロGRESSな先生方が活躍されている大学だからこそと、二〇年たった今思っています。COP3京都会議は、その後の国際環境政治の大きな布石になりました。私個人にとってもCOP3はその後の活動、社会と自分との関わりにおいて大きな影響を与えました。当時大学を卒業したばかりの私は、ある意味がむしろに怖いもの知らずに、時に人生の大先輩たちの言うこ

とも聞かず、勢いだけで時に傲慢に突っ走っていました。藤岡先生はそんな私を温かくながい目で見てくださり、応援してくださいだったので。以後、つれあいのオリビエともども末永いお付き合いとなりました。藤岡先生が私どもの活動に関心をもってください、日本の学生さんたちに話をする機会を与えてくださるなど、変わりないオープンマインドで私たちを迎えてくださったからです。私は二〇〇〇年に渡欧し、トランスナショナル研究所というNGOのスタッフとして働いて早一年がたとうとしています。いろいろな分野の方々とつながっている先生のことですから、退職されても今まで以上に社会活動にお忙しく活躍されることと想像しています。どうぞお元気で活躍ください。世界のどこにいても先生と意見交換できる機会を楽しみにしております。

岸本聡子（ベルギー在住、トランスナショナル研究所 www.inlorg）

私が藤岡先生と最初にお会いしたのは、最初の息子が日本で生まれた時に、日本に滞在していたときでした。今から十数年前のことです。藤岡先生は立命館大学国際平和ミュージアムを案内する労をとってくれました。ミュージアムの展示から、一九三〇年代の軍国主義と国家主義の昂揚が、アジア各国と日本自身の破壊にまで至る真実のプロセスを私に教えてくれました。ミュージアムは、歴史の暗い一章の教訓を日本の市民に伝えつづけようとしていました。この担い手である藤岡先生に、そしてそれを世界中に伝える先生の情熱の高さと愛と努力に敬服しました。

藤岡先生は一度、立命館大学の経済学の講義をする機会を私にくださいました。彼はまた、人間

的な幸福と平和、環境の持続可能性を主眼においたオルタナティブな経済モデルについての彼の仕事を教えていただきました。新自由主義のグローバルバリゼーションの帰結である極度に競争的な浪費社会に陥るのではなく、本来の意味での富や幸福を実現しているアジア各地のコミュニティをリサーチし、記録するとう先生の仕事についてもうかがいました。二〇〇八年の金融危機は、その後ヨーロッパと世界的な経済危機へと展開していったわけですが、新自由主義が重大な欠陥を持ちかつ非持続的であることを知らしめました。新自由主義のドクトリンを越えるためには、知的な勇氣と才能を持つ藤岡先生のような経済学者が、私たちの社会にとってどれだけ大切なかを考えずにはいられません。

オリビエ・フーデマン (Olivier Hoedeman ベルギー在住、Corporate Europe Observatory 研究員
www.corporateeurope.org/ Olivier@corporateeurope.org)

アッチャン先生とゼミと私

木村千壽子

私は一九九九年入学の社会人学生。ほぼ、定年近くまで勤めてから入学。藤岡先生との出会いは友達と行ったゼミ見学から始まる。学生たちが和気藹々と楽しそうに語り合うその傍らで、にこやかに見守っておられる先生。やさしそうで、いろんなことが経験できそうというのが私達の印象。

その友達と一緒にゼミの願書を出すと見事パス。先生のお人柄のせいか、ゼミ生の三割ほどを社会人学生が占めていた。

ゼミでは難しい本読みばかりではなかった。校庭の桜の木の下で花見。デイベートやクイズ大会、スポーツ大会も行われた。クイズ大会では最後まで勝ち残り、商品をゲット。悦に入っていた私である。だが、そのゼミの中でとても心配した忘れられない出来事があった。二〇〇一年六月始めのスポーツ大会。運動場でみんなでバレーボールをした。先生も「円陣パス」の輪の中に入られ、一緒にプレーを楽しんだ。その二日後、先生は倒れられた。奥様の早い処置で一命をとりとめられ、現場復帰され、ほっとしたのを思い出す。後々、先生は「彼女のディーブ・キッス」が私を救ってくれたと、コメント。とっても熱い心温まるお話でした。

勿論、ゼミ本来の学習にも取り組んだ。ゼミナール大会では、社会人学生と現役の学生と三人で「自然エネルギー導入に遅れる日本」について論文作成。内容の深まりと発展のため、衣笠のW教授を紹介して下さり、ドイツの進んだエネルギー対策を学び、論文に取り入れた。おかげで、ゼミ大会では見事「賞」をいただくことができた。

先生からは「オランダモデル」という働き方も教えていただいた。「こんな働き方ができたらいいなあ」と家族の協力の下でやっと働き続けられたことを思い、羨ましく思ったこともあった。日本では非正規雇用に変え、仕事をなくす人たちも増えている悲しい現状も見える。今回、先生は一応退職される。が、引き続き教壇に立つて下さるとのこと。とってもうれしいことです。楽し

いゼミや講義に「アッチャン先生、身体に気をつけて、頑張つて下さい」と私は熱いエールを送ります。

(地元の保育園の元園長さん)

藤岡先生と過ごした二日間

久保 壽彦

昨年九月中旬から藤岡先生と先生のゼミ生、さらに安齋科学・平和事務所谷川佳子さんとともに福島県を訪問した。私は二〇〇七年四月から立命館大学経済学部に着任しているが、担当が金融法・会社法といった法律科目であり、さらにいうと研究室も藤岡先生が五階であるのに対して四階であるため、親しくお話をさせていただく機会もあまりなかった。今回の福島県訪問も九月初の教授会において、藤岡先生が福島県への訪問のお話をされていたのをたまたま先生の近くに着席した私が聞き及んで、強引にお願いをしたところ快くご了承をいただき、同行させていただくことになったものである。私は原子力損害賠償制度の課題について研究をしており、福島県への訪問を強く望んでいたため、私にとつては、まさに千歳一隅の機会でもあった。

福島県では、二日間行程を共にさせていただいた。JR福島駅で先生やゼミ生と待ち合わせをしてチャーターしたバスで目的地に向かった。バスのチャーターや行程については、面談者のアポイントメントから目的地でのスケジュールに至るまですべて藤岡先生の計画されたプラン通りに進め

られた。行程としては、まず、放射能汚染で全村避難している無人の飯館村を經由して南相馬市に向かい、桜井勝延市長にお会いした。桜井市長からは原発事故に立ち向かう強い決意をお聞きかせいただいた。その後、同市の小高区に向かい津波被害の現状や仮設住宅に避難されているご婦人方と懇談をした。夕刻には歴史ある温泉地として有名な飯坂温泉に向かい、宿泊施設で福島大学生と福島県立医科大学学生とのミーティングを行った。このミーティングでは、放射能汚染に対する風評被害克服の困難さについて、さらに放射能に伴う医療問題解決に向けた強い決意などについて夜遅くまで両大学生やゼミ生とともに語り合った。翌日は、福島大学を訪問し、うつくしまふくしま未来支援センターにおいて、震災復興に取り組む事業の紹介とそれを支援する大学の立ち位置について説明を受けた。

私はその後東京で研究会の予定があり別行動を取ったが、藤岡先生一行は宮城県方面に向かわれた由である。

私にとって、藤岡先生とご一緒した二日間、先生の教育に対する情熱・熱情というものの深さを体感し、先生の教育指導に触れることのできる学生は本当に幸せであると思った。一人一人の学生の意向を尊重し、自律的行動に結びつける先生の教育方針は、私の今後のそれを大きく左右するものであり、残された教員生活において少しでも先生に近づくことができるよう尽力していきたいと考える。

(立命館大学経済学部)

平和と希望の村―濟州島・カンジョン村

黒木 鞠子

コスモポリタンのこと

福岡市内在住で、三〇年以上自分の小さいスクールで英語を教え、また外国語スクール（韓国語・中国語・ドイツ語）とヨガとピアノの教室の経営もしています。

一九九四年七月一〇日、今から一九年前に友人一〇人ぐらいで、何か社会と私たちの結びつきのためになる会をつくろうとのことで「コスモポリタン」を立ち上げました。最初は「夫婦別姓論」とか「ペットの飼い方」「宮沢賢治の生涯」等々の身近な話題を取り上げていました。しばらくは何を重点に会を運営していくか迷い迷いしながら：

二〇〇一年の九月一日のニューヨークでの同時多発テロ以来、「同時多発テロの問題点」とか「イラク戦争とは」「パレスチナのことを知ろう」など、そして最近の「日本の福島原発爆発」「沖繩の基地問題」なども含めて世界の戦争と平和、私たちの環境問題を考える会としての方向性を見出ししています

二〇〇六年一二月にサロン・ド・ソフィア（約二八坪）が「平和の集まりができる場所」としてオープンいたしました。ソフィアの名前はギリシャ語の「知恵」に由来します。

二〜三か月に一度の集まりを不定期にしており、社会の小さい灯火になってほしいと思い、平和

と環境問題の会を開いています。いつもは一〇人ぐらいの集まりですが、二・三の団体と一緒に共催をするときは三五名〜四〇名ぐらいの人が参加してください。昨一月に第七七回目として京都出身の「豊田勇造 No! Nukes Live」を自由学校と共催してやりました。

藤岡先生との出会い

二〇一一年の夏「宇宙への兵器と原子力配備に反対するグローバルネットワーク」主催の会で、アメリカ大学で考古学の准教授のデイヴィット・ヴァイン氏 (David Vine) が「済州島にあるカンジョン村に中国を脅威として基地が建設されようとしており、それに対する多くの村人が基地の前に座り込み、次々に投獄されている」とリポートされました。

昨年二月二四日から二六日まで、グローバルネットワーク(ブルース・ギャグナン氏 Bruce Gagnon 米国・代表) がカンジョン村で「済州島国際平和会議」を開催するのを知りました。日本から六名(立命館大学の藤岡惇教授、沖縄から普天間騒音訴訟の事務局長の高橋年男さん達)、世界一三カ国から(米国、英国、カナダ、スウェーデン、インド、その他)約三〇名の人々が集まり、韓国内からも宗教家の方など多くの参加者がありました。この時初めて、藤岡先生にお会いしました。私は福岡でPネット(原発もミサイルもいらない九条を活かす会)に属していま



して以前この会で藤岡先生の講演会があったとのことですが、私が会に入る前だったようです。京都弁を話されますし、とても温和でユーモアのある方でお話しがしやすい方だと思いました。

この平和会議では、いろんな国の方々がカンジョン村の軍事基地の違法とか、いかにしたらこの地に平和をもたらすべさかなどのお話が、熱く語られました。基地が作られつつある場所に直接非暴力で、村人や平和活動家の方々の座り込み活動にも参加いたしました。

ここカンジョン村の海軍基地は非暴力で反対するひとびとを拘束・投獄しながら今も「サムソン」財閥の土建部門が工事を請負い、建設が日々続いています。二〇〇七年から始まり、今年で六年目にはいりますが、姜東均村会長を先頭に①自然破壊②基地建設が民主的方法でなかったこと③東アジアの軍事的緊張を高める事などの理由を挙げて、基地撤去の運動がおこなわれています。

平和を願う人々が自分たちの生命を投げ出して、日々創意工夫をしながら明るく前向きにカンジョン村の軍事基地防止が継続されています。先回の大統領選挙でパク・クネ氏が選ばれたことで、多くの基地反対者は無念に思ったことでしょう。でもそれを乗り越える強い意志があるようです。



筆者 Angie Zelter 藤岡惇さん
(カンジョン村にて、2012年2月25日)

この問題は日本の沖縄の軍事基地と重なること多しです。平和を作るには、基地は不必要であり、その巨大なお金は私たちが一生を豊かに暮らすために使われるべきであると強く思いたいものです。今やグローバル化の時代、多くの国の人々との連帯を通して平和をコツコツ作り上げるしかありません。

最後に

民主主義の大学として知られる立命館大学と立命館大学国際平和ミュージアム。この場所で、平和の使者としてますます貢献してくださることを、期待したいと思います。

参考資料：濟州島に関する資料：「Save Jeju Now」「濟州島を守ろう!!」

「Organizing Notes」：Bruce Gagnon氏の日々のブログにほとんどのついています。

P. S. 二〇一三年一月二九日に頂いた板倉弘美氏（長野在住）からのメールにカンジョン村がノーベル平和賞候補になっているという情報がありました。
(コスモポリタン主宰)

少年の心を持つ大学教授さん

黒澤 英昭

私は、立命館大学に通っていたわけではないのですが、藤岡先生とは何度か平和活動や講演会で

ご一緒させていただく機会があったため、今回文章を書かせていただきました。思い起こせば数年前、東京の明治学院大学で開催された、日本平和学会に参加した際にあるワークショップで先生とご一緒した記憶があります、平和と芸術といったテーマだったと思うのですが、先生は、本当に愉しそうに熱心に参加されていたことを思い出しました。

また、先生は市民の方を対象に様々な講師を招かれて、小さな規模ながらも講師や参加者と深く交流できる会を催されていて、大学の先生というだけでなく、市民社会にも積極的に関わっておられると感じました。二〇〇八年一月にはヘレナ・ノーバーク・ホッジさん、同年一二月にはジョアンナ・メーシーさんの会に参加させていただき、世界レベルで活動されている方のお話を間近でライブで聞けるという貴重な経験をさせていただきました。また、二〇〇九年一月には、当時日本で始まりだそうとしている「トランジションタウン」の京都説明会に参加させていただきました、これをきっかけに、僕はトランジションタウンの活動に関わりを持っています。

二〇〇九年一月のサティシユ・クマールさんのキャンパスプラザ京都での講演のときには、少しだけですが僕もお手伝いで関わりました。先生は実行委員会の中心メンバーとして活躍されていて、講演中のみならず、講演前後のサティシユさんと委員メンバーの交流の場でも細やかな気配りをされていたように記憶しています。日本酒好きな僕としては、お酒を交わしつつ、講師や参加者と交流できる場があるのはとても距離感が縮まるし、新たな人のつながりもできたりします。

確かヘレナさんの会の交流会の雑談で、ヘレナさんがおっしゃっていたかと思うのですが、先生

は少年のように素直な心を持っておられる、と。僕も同じように感じていて、先生がよく屈託のない笑顔でニコニコされていたのが印象に残っています。退官なされてからも、そのままの少年の心で持続可能な平和や経済に携わっていただければと思います。ありがとうございました。

若き日の藤岡さんとの出会い

伍賀 一道

私が藤岡さんに初めて会ったのは一九七六年六月、兵庫県の小規模私学X大学の採用面接の際である。同年七月に採用されて以降、七九年三月に一緒にこの大学を退職するまでの二年九か月の間、文字通り苦楽（艱難辛苦の方が圧倒的に多かったが）を共にした。

X大学はキリスト教系の経済学部単科大学であった。理事長のワンマン経営に対して、大学教授会は「民主化」をめざして闘いを繰り返していたが、その運動の進め方にたいしては教員内にも異論があり、きわめて複雑な問題を抱えていた。私たちは混乱の渦中に否応なく巻き込まれたが、大学院を出たばかりの未熟な若者にとっては背負うには重すぎる荷であったように思う。

理事長は、「民主化」陣営の一員とみなされた藤岡さんや私の採用に賛成ではなかったようだが、拒否はしなかった。その後、教授会は欠員補充のため、何人かの教員の新規採用を決定したのに対

し、理事会は発令を拒否したため、教授会と理事会との対立は深刻化した。教授会と歩調をそろえた教職員組合は、団体交渉拒否について労働委員会に不当労働行為の申し立てを行い、私は組合書記長として証言に立つ経験もした。

藤岡さんは理論家であるが、自分たちの正当性をたてに意見を異にする人たちを批判するのではなく、味方をいかに多くするかに意を用いた。自身の考えを率直に述べ、正論で押し通そうとする教授会の年長リーダーにも歯に衣着せぬ指摘をする勇気を示した。リーダーからは疎んじられることもあったが、意に介さない図太さがあった。

藤岡さんは楽道家である。理事長は学長を更迭し、意向になかった新学長および教員を相次いで送り込んだため、教授会のなかで私たちは次第に少数派となり、ついに教授会出席停止措置まで受けることになった。こうした時でも、藤岡さんはくじけることなく、私を励ましてくれた。あの時に彼と一緒にいなければ、私は別の道をたどったのではないかと思う。

しんどいことの多かった時期ではあったが、片道二時間ほどかかる電車のなかでの藤岡さんとの会話は楽しいひとときであった。彼は京都、私は茨木に住んでおり、大学からの帰りはいつも同じ電車を利用した。無類の読書家でもある藤岡さんは、電車のなかでたくさんのことを教えてくれた。今日の藤岡さんの問題提起のスケールの大きさは当時から育まれていたのであろう。一九七九年四月、藤岡さんは立命館大学に、私は金沢大学に新しい職を得て、X大学を去ることになった。以来、三四年が経過したが、藤岡さんという知己を得たことは私にとって生涯の宝である。（金沢大学教授）

ゼミと平和交流セミナーの経験

小嶋 緑

藤岡先生とのお付き合いは、私が立命館大学経済学部で先生のゼミを受講したところから始まりました。先生のゼミは人気で、二倍の倍率を勝ち抜いて何とか入ることができたのですが、その年なんと先生は心臓の病気で倒れられてしまいます。人工呼吸と電気ショックで奇跡の生還をとげられるも、しばらくはお休みをされていたので、その間は別の先生にご担当頂く形になりました。強烈なインパクトで始まったゼミですが、先生の復帰後はいつも興味深い文献をたくさんご紹介いただき、感心しながら読んで少しずつ視野を広げていったことを良く覚えています。

ゼミ以外でのつながりもたくさんありました。先生が長年取り組んでこられた、広島長崎平和学習プログラムへの参加はその一つです。プログラムでの学習と対話から、平和を改めて問い直せたことに加え、英語を操って外国の人と議論することの難しさと楽しさを知り、学びのモチベーションとなりました。また、インドでのボランティア活動からの帰国後、報告を聞いた先生から「海外経験は、その後の人生全てに影響を与える。若い時であれば影響の度合いが大きく、後ろの人生も長いので、特に貴重。なるべくたくさんさんの世界を見ておくのが良い」という旨のお言葉を頂きました。それが大きな後押しとなって、世界各国へ放浪の旅やボランティア、留学等に出て行くことになりました。

最も大きな御恩は、三回生終了後の英国留学です。英国の大学が実施する Junior Year Abroad Program への応募にあたって、先生に推薦状を書いて頂いたお陰で合格し、留学という何にも代えられない非常に貴重な経験をすることができました。大学卒業後、立命館大学の職員になって以降は、教職員組合などを通じて時々交流を重ねてきました。先生にお会いする度に、先生の造詣の深さに良い刺激を頂いています。こうして改めて振り返えると、私の人生は様々な形で先生から影響を受けているようです。これらが無ければ現在の自分はなかっただろうと、感謝の気持ちでいっぱいです。

私が現在の世界や社会に対して持っている問題意識は色々あるのですが、特に「社会の無縁化」と「若者の内向き志向」に大きな懸念を持っています。新自由主義や急激なグローバル化など、大きな背景と様々な要因が絡み合っている現状なのでしようが、複雑で答えの見えない混迷の時代に、一人の大学人としてどう向き合っていくべきかを常に考えさせられています。国家を支える人材育成という点に加えて、国家や信条の違いを超えて、世界の人々と協力・協調して平和な世界を築いていける地球市民の育成に携わっていきたいというのが今の思いです。

先生はご退職後、引き続き特任教授として立命館で教鞭をとられるとのこと。先生の心の「ときめき」の命ずるままに、私を含めた全ての学ぶ人の心を刺激してやまない授業と研究とを展開していつて頂ければと思っています。先生の益々のご活躍を心よりお祈り申し上げます。

(立命館大学学生部学生オフィス)

世界に羽ばたいた折鶴

小谷美智子

先生、無事、円満、退職の日を迎えられ、なによりとお喜び申し上げます。

私が藤岡先生とお出会いしたのは立命館大学国際平和ミュージアムでのいろんな催しを通してです。

なかでも一番印象に残っているのは、一九九八年に第三回世界平和博物館会議が大阪と京都を会場に開催されたことでした。ミュージアムでの会議が終わった最終日、ホテルに移動して、交流会が持たれていました。その会場で、平和友の会の有志の方が折られた千羽鶴をもって行かせていただき、各国から京都に連れて来た参加者のお一人お一人に贈呈させていただいた時のことです。藤岡先生が、そのチャンスをお私たちに与えてくださいました。お一人お一人をもちろん英語でこやかに紹介しながらです。会員の皆様が折ってくださいました鶴たちは、参加者の皆さんに喜ばれ、彼や彼女の肩に晴れやかに乗って、世界各国の平和博物館に飛び立ちました。あのときは、世界から集まられるお客様に折鶴をプレゼントしようと呼びかけた交流部会の一人として、夢を実現できた喜びで、一杯でした。

一九九八年八月四日、国際学術交流研究会が、アカデミア立命の会議室でもたれた時のことです。アメリカン大学歴史学教授のピーター・カズニック先生が「米国は核を捨てられるか―核の文

化史をめぐって」という報告をされ、通訳は藤岡先生でした。このような企画にも、平和友の会のメンバーにも参加を呼び掛けてくださいました。午後からはこの「国際交流セミナー・広島長崎プログラム」で、平和学習旅行に参加されているアメリカン大学の学生さん、立命館大学の学生さんたち二八名と「平和友の会」の交流が実現しました。このころは私たちの友の会にも若い世代が在籍していました。毎年、ミュージアムを会場に開かれる「平和のための戦争展」会場では、この前後に何年間か、アメリカン大学から参加された学生さんたちが、広島、長崎に向かわれる姿をみかけたものです。立命の学生さんたちがてきぱきと動いておられた姿は、さすがしく前途に希望を見る思いでした。このような場合にも、藤岡先生が「友の会」のことを心にかけてくださっていたのですね。ありがとうございます。

「友の会」が誕生してから二〇年、最近はあまりミュージアムにも行けていませんが、楽しい日々だったと思います。これからもお元気でお過ごしくださることを、そしてまたいつかどこかで、藤岡先生から学ぶ機会が与えられますようにと願っています。

(平和友の会会員)

藤岡先生の退職を祝って

ロバート・コワルチエツク

金 明妃

藤岡先生とのお付き合いが始まったのは、一九九九年のことでした。私たちは「グループ21」という組織を立ち上げ、立命館大学国際平和ミュージアムを会場に「新たな千年紀を迎える若者たち」というシンポジウムのイベントを開催したのですが、その時に藤岡先生が協力をしてくれたのがきっかけだったと思います。

京都や日本各地に住む二一か国の学生たちを集めて、環境・平和・人権方面で活躍中の活動家と引き合わせ、地球的規模の問題を考え、交流してもらおうというのが、このイベントの目的だったのですが、（安斎育郎先生とともに）藤岡先生は、イベント準備の過程で専門家的な力を発揮され、私たちグループ21に惜しみない援助をしていただきました。

おかげでアルン・ガンデイ、サティシユ・クマール、ヨハン・ガルトウングといったすばらしい活動家と若者たちは出会うこととなり、交流することができたのです。それだけでなくイベントのなかで多種多様な話し合いの場を組織し、ワークショップ、講演などを調整し、充実したものにするうえで、中心的な役割を果たされました。いくつかの基調講演の際には、通訳の役も果たしていただきました。

その後二〇〇〇年、二〇〇二年に、私たちは同様のイベントを開催したのですが、その際にも協力を惜しまれませんでした。グループ21との協力活動以外にも、二〇〇八年の第六回国際平和博物館会議の際に、「平和のマスク・プロジェクト」が展示と実演の集いを行ったのですが、藤岡先生はこの活動にも積極的に協力してくださいました。ミュージアムの中央ロビーで、ピースマスクの展示会を開催できましたので、会議の参加者の多くがこのイベントに注目し、参加してくれました。この中央ロビーという晴れ舞台で、個々人の顔を白い紙型にとって、「平和のマスク」を製作し、(一本の樹木を飾る多様な葉っぱとして展示するという)「平和のマスク」づくりの実演と講演をすることができたのです。これら一連の企画を実行するにあたって、(安斎育郎先生はもちろんのこと)藤岡先生は中心的な役割を果たされ、貴重な貢献をしていただきました。

その後、立命館大学とワシントン特別区のアメリカン大学の共催する広島長崎への研修の旅にも、藤岡先生は私を招いてくれました。おかげでアメリカン大学からやってきた教授諸氏や平和活動家、被害者たる多数の被爆者、広島市長とお会いすることができ、広島と長崎の両市への原爆投下が何をもたらしたのかを詳しく知ることができたのです。

この研修の旅がきっかけとなって、「影から生まれた光——広島・長崎と日本国憲法第九条」という短編の記録映画を私は製作しました。そしてこの記録映画を携えて、日本・韓国・米国・欧州の各地に出かけ、これら諸国で映画上映を果たすことができたのです。藤岡先生からの真摯な援助がなければ、この映画を製作することができなかつたのは明らかです。藤岡先生の立命館大学から

のご退職を私たち両名は祝福し、こんごのご清栄を願うしだいです。

(グループ21&ピーススマスクプロジェクト)

(翻訳：藤岡 惇)

世界の若者に好かれるProfessor

近藤 絃子

「藤岡先生、定年退職、おめでとうございます」と申し上げるべきでしょうが、それを私は言いたくありません。一九九五年八月から毎年、立命館大学とアメリカン大学とで「国際平和交流セミナー(広島・長崎)」が行われていますが、このセミナーに無くてはならない人が、立命館大学の藤岡教授とアメリカン大学のピーター・カズニック教授だからです。このお二人がおられなければ、機能しないセミナーと言ってもよいでしょう。

初期の数年間は二〇―三〇人の所帯で、もったこぢんまりとしていましたが、今では大所帯となり、お二人に加えてカナダから乗松聡子さん、立命館大学の山根和代先生とそれぞれが率いる学生さん達、それに近年では立命館大学の職員も加わり、本当に素晴らしいグループとなりました。被爆者以外にも他大学の先生方の講義も加わり、魅力ある学びの旅となっています。

私はアメリカン大学の卒業生です。母校の教授が学生さん達を連れて、立命館大学の学生さん達

と共に広島に来られるということを一九九五年の新聞記事で知りました。大学を卒業して数十年が過ぎ、母校の若者が広島に来て下さるとは、被爆者の私にとつて、これほどの喜びはありません。自分たちの目で見、自分たちの耳で被爆者の話しを聞いてもらえることは、私の願っていたことですから。

次の一九九六年から藤岡先生とカズニツク先生の率いるセミナーに私も加えて下さり、良き交わりが始まり、現在に至っております。優しく、心広く、バイタリティとユーモア溢れる暖かいお人柄にふれ、私も藤岡先生のファンになるにはさほど時間は必要ありませんでした。

来広するアメリカン大学の学生達は日本語がまったく分からず、被爆者の証言等の全てを英語に通訳しなくてはなりません。ハイ、Atsushi (藤岡先生) と Koko (私) の共同 (?) 通訳となり、これが良き弥次喜多通訳コンビでした。藤岡先生の英語は、先生には失礼ですが、発音は「いまいち」ですが、原爆関係、平和教育関係の専門語はずば抜けて素晴らしく、いつも圧倒され、敬服しておりました。多くの学生さん達を連れての旅で、藤岡先生は傘に(後に棒に)スヌーピーが描かれていたタオルをくくり付けて先頭を歩く姿(ツアーガイドのように)は、微笑ましく先生らしい発想です。

その旅の中で時には、「大人の会議」という名目を作つて、夜の街に三人で出かけたことがあります。丁度、大人の目を逃れて「悪さ」をする子供のようにです。これもまた今では良い思い出となりました。

お二人の教授よりも私の方が数年年上なので、良き弟が二人出来たようなもの。お二人の講演や出版本を誇らしく、鼻高々に思っています。国内外を問わず、お二人の交友関係は広く、おかげで私の交友関係も広がりました。藤岡先生と出会った多くの若い人達は、学んだことをしっかりと受け止め、世界に羽ばたいていますし、私も、次の時代を担う者達のために語り続けていきたいと思っています。

(広島流川教会の谷本 清牧師の長女、日本基督教団三木志築教会)

爆睡と田んぼ―藤岡さんの思い出

酒井 重喜

藤岡さんは京大経済の学部と大学院そして尾崎ゼミの一年先輩で、六〇七年にわたっておつきあいいただきました。人に悪意を持つことがまったく優しくない先輩でした。

大学院時代のある夏の日、大学院研究室(通称イチケン)に入ろうとした時、私が不注意にもドアを乱暴に閉め「バーン」という響くような大きな音を立ててしまったことがありました。研究室では藤岡さんが長いので昼寝をされてきました。「アッ、しまった」と思ったものの、「バーン」という大きな音なんの反応もすることなくスヤスヤと昼寝を続けられていました。「この人は大物だ」と、謝罪の気持ちも忘れて感心したものでした。

私が熊本に就職して数年たったころ、熊本で立命館大学の保護者懇談会が市内ホテルであつて、藤岡さんが熊本に來られ、拙宅にも一泊していただいたことがあります。拙宅でのおしゃべりの中で、「熊本の保護者はみんな、ビシツときれいな服を着て良い車に乗つてホテルに來られたのでびっくりした。田んぼから出てきたような人が來ると思つていたのに」と藤岡さんが言われた。熊本に居るものにとつては少々苦しい思いがしましたが、「田んぼから出てきた」という表現がいかに藤岡さんらしいおかしみがあつて、苦みも中和されてしまいました。

藤岡さんは何と言つても体力があつて、がむしゃらなところが持ち前です。研究・教育の他に平和活動や啓蒙活動に熱心に取り組まれ、私など到底まねのできない眩しい存在です。眩しい存在ではあつても、人に悪意を持つことができず、轟音の中でも熟睡し、それこそ「田んぼから出てきた」ような力強さと親しみやすさをもつておられます。ご退職後も一層お元氣でご活躍下さい。

(熊本学園大学)

「藤岡」学の提唱に向けて

阪本 将英

専修大学の阪本です。最近、随分とごぶさたしておりますが、基礎経済科学研究所で初めにお世

話になったのが「人間発達ゼミ」でした。はじめて先生にお会いしたときに、とても親切に接していただいたうえに、私の話を頷きながら聞いていただいたこと、人間発達の重要性を説いてくださったこと、今でも懐かしく思います。

当時から現在に至るまでの、人間発達論、人類が平和に暮らすための経済システム理論、さらにはその集大成としての平和なエコ・エコノミー思想にもとづく先生の首尾一貫した教育・研究視点は、「藤岡」学（決して、人の名前ではございません）と呼べるものではないでしょうか。

いずれにせよ、立命館大学での長きにわたる教育・研究活動、ご苦労様でした。と言いつつも、これからは先生の独自の藤岡学を提唱しつづけていただければ幸いです。

（専修大学教員）

遠く福島よりアツちゃん先生の御退官をお祝いします

相樂 航

この文集を手取る方のはほとんどは私のことを「誰？」「藤岡先生とどんな関わりが？」とお思いでしょうから、まずは私がどのような経緯でお世話になることになったかを説明したいと思えます。とは言っても、あまりカタイお話をするつもりはないのですが：

ズバリ、藤岡先生にお世話になりましたのは、二〇一一年夏の広島・長崎平和セミナーです。藤

岡先生の「被災地の学生にも参加してもらいたい」とのご一存により、藤岡先生とお知り合いでいらした我々の大学の経済学の先生を通してこのお話をいただいたわけです。好奇心旺盛な私は二つ返事でそのセミナーに参加しました。

実際に京都まで出向いて藤岡先生に初めてお会いしたわけですが、小柄な体に大きなパワーを秘めているのはすぐにわかりました。また、肩書きや実績に似つかわしくない、いい意味でのかわいらしさやお茶目さには思わず笑みがこぼれました。特に、引率に用いたスヌーピーのタオルは印象に残っていて、今でも自分の中で「スヌーピー＝藤岡先生」と考えてしまうほどです。ちなみにそのセミナー、最後は長崎で流れ解散となったので、帰るのには苦労しました。バスやフェリーなどを乗りついで京都まで帰ってきて、まだ半分なんですから！

藤岡先生とは、昨年九月に今度は福島市内にて再会しました。ゼミ生を率いて被災地をめぐるツアーの一環で、現地の大学生との座談会が設けられており、その席で再会したのでした。やはり、スヌーピーは健在でした。

御退官されたのちは晴耕雨読の生活を営みつつ特任教授としてご活動されるとのことでしたが、福島との交流は続けてほしいと思います。私たちはいつでもお待ちしておりますし、フットワークは軽いのでお声かけしていただければいつでもそちらに向かいたいと思います。

(福島県立医科大学医学部医学科三年)

藤岡さんとの出会い

櫻井 善行

私と藤岡さんとの最初の出会いは、かれこれ一〇年以上前にもなる。私が基礎研との関わりを持つようになった時期とほぼ一致する。私は当時も現在も生活基盤は愛知であり、もう一歩知的な刺激を求め、なおかつ通常の学会活動にも満足せず、社会人研究者として自分の行き先を模索していた時期であった。私が「経済科学通信」の読者になった時は一九九〇年代末、まさに世紀末の頃であった気がする。当時の私は研究者との人脈もなく、ただ必要と感じた場合は、ところかまわずいろいろな研究会には参加していた。愛知ではほとんど接点を求めるのは不可能であったが、「経済科学通信」の読者であったことから、地元といっても岐阜での研究会の案内があり、それに何回か参加し、そのうち研究会に参加するようになった。その過程で当時の基礎研理事長の藤岡さんと知り合ったという記憶である。

こういうことだけなら、藤岡さん以外にも基礎研関係者で何人もの高名な研究者と知り合っているのであり、なぜ私がこうして拙文を書いているのかという理由は読み手からは理解できないであろう。藤岡さんが研究活動してきた立命館大学とも関係はないし、基礎研自由大学院のゼミ生でもない。にもかかわらず私が藤岡惇という人間にこだわるのは、おそらく藤岡さんが、研究者として高いところから語るのではなく、同じ目線で私たちに語ってきた姿勢と、従来の進歩的研究者の

一部に見られたドグマから解放された自由な発想があったこと、加えて様々な場所でお会いしたとかなあと今では思っている。

私はある時期から、日本の左翼的学問には古い保守的な権威主義がはびこり、それが学問の発展にも、体制変革の運動にも害悪をばらまいてきたという考えを持っている。もちろん当事者からすれば、真剣で、相手を論破するためには様々な手法が用いられた。しかもその定説が突然どこでどう変わったのかもわからないまま、ひっくり返ることがままあった。そんな若い頃の愚痴をこぼしても仕方ないが、まあ基礎研には異論も含めて自由闊達に論議できる作風があったということである。藤岡さんはその「基礎研の風土」を体現した人物であったということである。

いつもにこにこ笑顔で接する彼の姿勢も好感が持てた。そんな藤岡さんが「もう一つの世界は可能だ」という「世界社会フォーラム」にも参加し、私どもが拒否反応を持つような団体にも正当な評価を与えてきた。この寛容さは、大いに学ばなければならない。そんな彼も、還暦を過ぎ、大学も定年退官する時を迎えた。彼の今までの遺産はこれで終焉するのでなく、これからも継続していくことで一層輝きを増すことを願ってやまない。

(愛知県在住、高校教員)

大地との絆を保持するクラーク（篤農家）を撲滅したスターリン

佐々木 洋

藤岡惇先生ご退職記念『文集』へのお誘いを受け光栄です。

私の在職中、経済教育学会の研修会で先生とご一緒したことがあります。先生は、どんな演者のどんなテーマでも、「ねーえ」という節まわしの、絶妙な間をはさみながら、議論の脈絡が「クリア」となり、あるいは、埋もれた論点が浮かび上がる発言をなさいます。

出たとこ勝負の論議でも要点を外さない、臨機応変な芸当ができるのは、藤岡先生が、ことの多様さと奥深さに通じた全天候型のプレイヤーであられる所以です。ご自身は、「問題の本質をクリアにとらえる上で大切なこと―それは、トータルに総合的にとらえること」、「森を見つつ木も見る」こと。米国資本主義を現実分析する際、「経済と軍事を切り離し、軍事や政治の動きを軽視」すれば、「真実の姿が浮かびあがってこない」と仰います。

私の現職最後の年度の担当科目に外国書購読がありました。教科の担当は前から決まっていますので、そのテキストには、「グローバル化」の世界史をクリアに描き、政治・経済・社会・文化の総合的な把握の大切さを説き、古典としても長く読み継がれそうな英文原著を使いたいと思い、アマゾンの新刊予約に目を凝らしました。出会ったのが Nelson Lichtenstein の Retail Revolution です。宣伝を兼ねて言いますと、本書は、米国南部アーカンソー州の片田舎の町ベントンヴィルに

本拠を置くスーパーマーケットのウォルマート社が、米国内の「発展途上国」である南部の劣悪な労働条件をバネに、米国最大の、さらには世界最大の小売サプライチェーンへのしががるプロセスを、グローバル資本主義の創造過程として描いた、破格に面白いビジネス書・歴史書・啓蒙書・教科書です。

著者リクテンスタインは、米国でなにか労働問題が持ち上がると、メディアが必ず論評を欲しがる労働史担当の有名教授です。近く同書日本語版を『週刊金曜日』社から出す準備をしていますが、私の非力もあって、翻訳作業が随所で難儀に難儀を重ねました。

それは、元学生運動闘士の著者が、まさに米国の自然・社会・政治・経済全体の関わりで、ウォルマート社による、藤岡先生が仰る際限のない下向き競争としてのグローバル化を説いているからです。例えばプアーホワイトや公民権運動が分らないと先に進めません。

そこで大変勉強になったのが藤岡惇著の『サンベルト米国南部』と『アメリカ南部の変貌』です。『小売革命』と先生のご労作を読むと、レーガンとクリントンとブッシュ父子を胎動させた南部社会を視野に入れない、「グローバル化」研究は皮相なものに写ります。

藤岡先生の南部研究は、南北戦争と奴隷解放令を発端とし、第二次大戦を転機とする、北部や西部とは異なる資本主義的な開発史の研究でした。即ち米国内の「発展途上」地域あるいは「内国植民」地域ともいえる、南部における周回遅れの農業革命と工業化、そして核Ⅱ産軍複合体の南下の歴史・構造分析です。米国民本主義は、こうして核Ⅱ産軍複合体の地域基盤を伝統的な五大湖周

辺から南部に移し（西部にも）、さらには、米国内部の「第三世界」的な農業・工業革命の成功モデルを、非欧米世界に輸出していきました。

藤岡先生の米国南部研究には、二つの新展開がありました。一つは、新自由主義革命に伴う全球的の下向き競争と、軍産複合体の生き残り賭けた宇宙覇権戦略を考察する労作『グローバリゼーションと戦争』の刊行とその続編『平和の経済学』の予告です。そこには原子力産業分析を含む軍産複合体に関する一連の緻密なご研究の蓄積が生かされています。

もう一つは、これも藤岡先生ならではの、旧ソ連とはいったい何であったのか、あるいは社会主義とは何であるのかという研究です。藤岡先生にとって、黒人問題を抱える米国南部の内国植民地的な資本主義展開と、農業問題をアキレス腱とした旧ソ連のスターリンによる「上からの革命」と「兵営社会主義」の実験過程とは、核軍拡で凌ぎを削る両超大国の、社会と政治の病巣を解剖するのに不可欠な一対の、歴史・現状分析の対象でした。

藤岡先生の最新論文の一つが、『歴史の教訓と社会主義』（ロゴス社）に収められた「大地・生産手段への高次回帰と自由時間の拡大」です。この論考は、人類社会のトータルな歴史・現状分析の諸結果を踏まえた、人間生活と大地（自然）との再結合、および農村と都市との再結合とを核心とする、未来社会観の今日的あり方に関する試論ですが、それに資すべく、私たちが共有すべき最も惨めで深刻な反面教師の歴史・現状認識として示されたのが、「大都市の形成・農業の工業化」の結果、米ソ両国で「表土流出と風食、大地の荒廃に見舞われ、地域社会を支えるエコロジーと文化」

が危機に瀕したことです（論文二六四―二六五頁）。藤岡先生は旧ソ連の病巣の根本は、シューマツハーと共に、「生き物を扱う農業」と「死に物を扱う工業」の区別をあいまいにし、人間主体による自然の改造能力を過大に評価し、「原発先進国」となる方向に突き進んだことだと指摘なさいます。実際、ソ連は一九五七年にウラル核惨事を、一九八六年にチェルノブリ原発事故を起こし崩壊しました。

藤岡先生のご指摘は極めて重要です。私はジョレス・メドヴェージェフ著『ソヴィエト農業』の邦訳者ですが、ジョレスはこのご指摘に関連しますと、旧ソ連史最大の悲劇は、クラーク＝富農（実は篤農家）の撲滅を口実に、「大地（自然）との有機的、個人的かつ感覚的な絆を保持した農民」を根絶やしにしたことだと観ています。藤岡先生のご指摘とピツタリ重なります。藤岡惇先生の『平和の経済学』の刊行を心待ちにしております。（ジョレス&ロイ・メドヴェージェフ研究者、札幌市在住）

藤岡流・肩に優しい平和運動

佐藤真喜子

藤岡さんと知り合ったのは二〇〇九年四月中旬の「アジア・太平洋ミサイル防衛に反対し軍拡競争の終わりを求める国際会議」の折でした。藤岡さんはその数年前に五十代半ばで亡くなった反核・



スノーピーの旗と藤岡さん(カンジョン村の軍港建設現場の前で)

反原発の著名な女性活動家の大庭里美さんと共にかなり以前からその会議の主催団体である「宇宙への兵器と核エネルギー配備に反対するグローバルネットワーク」(以下GN)の日本人理事でした。

二〇〇九年は私にとってさらにご縁を深めた年となりました。GNのオーガナイザーであるブルース・ギャグナンさんの日本各地での講演会、さらに世界規模の市民連帯運動「平和と非暴力のワールドマーチ」がその年に行われたからです。ワールドマーチとは、主に核兵器廃絶をスローガンに世界各地の市民の連帯を訴えて、志願市民三〇名ほどの一行が九〇日間で世界七〇か国ほどを駆け足でまわった、ヴェジュアルなデモンストレーション運動で、世界各国のNGOや個人がそれをボランティアで支え、各界著名人も支持しました。日本では残念ながらこの運動への理解と協力はあまり広がりませんでした。藤岡さん、同じく京都の藤井悦子さんには当初から協力して頂けました。来日したマーチャーたちの一行を温かく迎え、もてなしの天ぷらをふるまわれながらの核廃絶談義や、権威や地位で人を区別せず誰に対しても同じように接する、その明るく気さくで肩の力が抜けた藤岡さんのお人柄は、日本の思い出の一端と

してマーチャーたちの心に残っていることでしょう。

他にも藤岡さんは米国のピーター・カズニック教授、カナダの乗松聡子さんと共に行っている日米学生交流夏休み研修や、各地市民によるミサイル防衛反対運動など、平和運動で地道な活動をされています。藤岡さんは山歩きの愛好家ですが、きつと「踏破」や「征服」という言葉からは程遠い、里山に抱かれるようなご趣味だと想像します。

京都と山歩きを愛し、宇宙軍拡に反対するコスモポリタンの経済学者。とても魅力的な響きですが、GNのウェップ議長によれば、昨年は米国ミサイル防衛の一翼となるといわれる韓国海軍基地建設地で藤岡さんはスヌーピーのタオルを使って抗議されたそうですから、失礼ながら古今東西稀な、肩の力が抜けた、誰にも愛される「ゆるキャラ」系平和活動家で研究者と言えるでしょう。これからもGNの日本人理事として「宇宙の平和」に貢献し続けてください。感謝と敬愛を込めて、定年退職のお祝いを申し上げます。

〔宇宙への兵器と核エネルギーの配備に反対するグローバルネットワーク〕諮問委員

藤岡先生との出会い

佐中 忠司

藤岡先生とわたくしとの最初の出会いはたしか基礎研であったかのように思うのですが、いまでははっきりとした記憶がありません。数十年にもわたって、いろいろな機会に心安くご好誼をいただいてまいりました。とくに経済教育学会では、毎回のようにお世話になり、ありがとうございました。学生目線でものごとを見つめつつ進める教育実践、多くの資料の入念な準備をいとわずつねに能動的に働きかけるスタイル、いつも穏やかで、分け隔てなく、だれとでもすぐ打ち解けて親しく交流できるお人柄が印象的で、学生や教育研究者仲間をいつの間にかひきつける素晴らしい魅力の持ち主と敬服しております。

ご専門のアメリカ研究だけでなく、多彩な平和研究や国際交流の分野でも着実な実績を重ねてこられ、得意なコミュニケーション能力を存分に駆使され、その影響は国境を越えたもので文字通り国際的活動と申し上げて差し支えありません。そうしたなかでも平和研究の分野では、広島は先生の得意なランチャイズのひとつであったかと思われまます。多くの情熱を注いでの広島や長崎をふまえた先生と学生を含む仲間たちとの長年のフィールドワークの成果、広島に暮らす市民の一人として、ときおり地元でもその足跡を実感することがあります。

核問題（原水爆、原発）をはじめ地球環境、国際平和、貧困や格差、人種問題などの人類史的な

諸課題に関して、集団的な研究や調査、情報の交流活動の必要性が私たちの面前には山積しております。こうした分野での多年にわたる先生の研究と教育、公私を分かたぬ貴重な業績と活動の経験を、折に触れてご教示をいただければと念じております。

長年の活動拠点であった立命館大学との関係もこのたびで一区切りとの由、大変ご苦勞さまでした。こんごはくれぐれもいっそうのご自愛に留意され、よりフリーな立場で存分のご活躍をされますよう期待いたします。

(広島大学名誉教授)

私の先生

澤井 隆彰

藤岡先生、御退職おめでとうございます。先生にお会いしたのは私が立命館に入ったばかりの一回生の時でした。先生の基礎演習のクラスに入り、私にとっての初めての教授になるわけですが、最初の印象は子供のようなおじいさんだなということでした(笑)。最初の授業で裏山に上ったり、立命館の屋上に行ったり、「人間知恵の輪」という遊びをしたりと、大学生のクラスでこの内容でいいのかと思いました。しかも「人間知恵の輪」を遊んでいる先生は私たちに対してロクにルール説明もせずに開始してしまい、自分が一番楽しんでいました(笑)。授業では「プランB」を用い

てエコ・エコノミーを学びました。形式はというと各グループに分かれて担当の章を調べて発表するのですが、実に自由な授業で今までやってきた板書をノートに写すといったものとは大きく違ったものでした。このあたりにも藤岡先生らしさが表れていたと思います。

一回生の終わりにゼミ選びがありました。続けてエコ・エコノミーを学んでいきたいと思い、藤岡ゼミを選択しました。私はポランティア団体に所属していたり、中学生のころから地球温暖化に興味があつて発表してきていて、ゼミのテーマもそうですが、ゼミの精神的な雰囲気、他のゼミよりもマツチしていたのだと思います。そして先生の自由奔放ぶりも知っていたのでゼミ長をやらせて頂きました。二回生から先生のもとで学ぶ他の学生では先生の自由ぶりに圧倒されてしまうと考えたからです（笑）。そういえばゼミ長選びの時も先生の言葉に従って皆で円になり、なぜか全員が「自分がゼミ長になったらどんなゼミにするか」という公約を話すことになりました。その時にはもう他の学生は先生に圧倒されていたような気がします（笑）。

ゼミで一番の思い出は三回生の夏休みに行った東北見学です。福島原発事故を含めた被災地の様子を実際に見てみることで沢山の経験をしました。福島に実際に住んでいる大学生の言葉は関西にいる間は想像していないような話ばかりで、フィールドワークの大切さを感じるとともに、今回の事故について何かしたいと思えるようになりました。今までは決して仲良しゼミとは言えない関係であった私たち学生も、この合宿を通してお互いの関係をより深めることができました。それらの結果として、学祭で東北への募金を目的とした模擬店を開くことができたのは本当に大きいと思

います。おでんを買ってくださった方に東北見学の思いを綴った文集を配布したのも、微々たるものですが、東北の人の思いをより沢山の人に伝えることができたと思います。先生がこれまでに行ってきたゼミ生の自主性を重んじる授業が、この活動につながったのだと思います。これからも福島のことや原発のことを考えながら、社会に貢献できる人間になっていきたいと思っています。

三年間の長い間に渡りお世話になりました。先生は子供の無邪気さを忘れない面をもっています。その分無茶をされることがあるので、お体に気を付けてお過ごしくださいね。本当にありがとうございます。ありがとうございました。

(二〇一二年度ゼミ長)

卒業後二〇年、ベトナム・中国の無錫から日本を考える

澤本 和也

一九八九年（平成元年）四月から翌年三月まで海外渡航の為休学、一九九〇年四月の復学時に、藤岡ゼミを希望、快く受け入れて頂きました。休学上がり、海外帰りで、当時は希少であったソフトカーリー長髪が目立つが、とても勉強熱心には見えない小生が、なぜか三回生→四回生と二年連続でゼミ長に任命され、一九九二年に卒業しました。

卒業前には恒例（？）のゼミのスキー旅行を楽しみ、無事卒業。当時の藤岡ゼミでは米国経済に

ついでの研究で、同じ共和党ではあるもののレーガンからブッシュへの過渡期でレーガノミックス、双子・三つ子の赤字：（よく覚えていません、済みません）。日米経済摩擦で大規模小売店舗法改正でトイザラスが奈良の橿原に（なぜこのような田舎へ？）日本第一号店舗を出店、ブッシュ大統領も確か訪問していたと記憶しています。

卒業後、約一五年間商社勤務、せっかく米国経済専攻ではありませんでしたが、米国の絡む仕事は担当職務の一〇%あるかどうか。ほとんどは東南アジアでの仕事でした。

しかし、九〇年代半ばから米国のベトナムに対する禁輸解除がうわさされ、この時期にベトナムに転勤、米国産（その他近隣諸国産も含めてですが）の商品をベトナムで売る、という仕事でした。実際に禁輸解除が行われ、時代の中で仕事をしている事を正に実感しました。

しかしながら一九九七年の通貨危機でベトナムへの投資も急減、一九九八年には大きな商売をしていたインドネシアでも暴動発生、多くの外国人は本国或いはシンガポールへ避難するなど、大変な時期に大変な所を目の当たりにしました。結局ホーチミン市（旧サイゴン）には二〇〇二年末まで約五年間駐在していましたが、仕事面では非常に厳しいものとなりました。

二〇〇七年、縁あって、畑違いの住宅メーカーへ転職。同年から二度目のベトナム駐在（今度は首都ハノイ）、しかしながら二〇〇八年のリーマンショックで二〇〇九年春にあえなく一旦撤収。不動産開発を主たる目的としての駐在でしたが、バブルと汚職、コンプライアンスなどという言葉は全く聞こえない社会でした。国の所有物である土地が絡むと工業団地など、公共インフラに寄与

するものであっても外国勢による獲得は正規なルートではまずうまくいかないものでした。今は小生に代わりに他のものがベトナムに駐在、不動産開発ではない分野で事業を開始しています。二度居住したベトナムは私のみならず家族も皆、第二の故郷になってしまいました。

二年間の大阪勤務を経て、二〇一〇年末、二〇年間逃げ回っていた中国に転勤命令が：

現在は江蘇省無錫市勤務（居住は隣町の蘇州にしています）。逃げ回っていたのはゲテモノと、白酒、そして言葉、しかしながら住めば都で楽しみ始めています。

一方で、昨年九月の領土問題が発端でデモ・暴動が発生。居住地の蘇州も青島に次いで大きなデモ・暴動がありました。いつも休日に行くイズミヤの一部は崩壊／略奪にあり、アパート一階のラーメン屋さんも破壊され、昨年九月の後半はとてもアウェーな空気を堪能させてもらえませんでした。但し、現在も蘇州に居住、無錫で仕事をしています。いたって平穏です。

今回は日本の報道と現地の状況を直接比較できたのが良い経験で、NHKも日経新聞も結構偏っていました。中国全土がデモ化しているような報道でしたが、同じ市に住んでいてもデモがあった事すら知らない外国人は多分半数以上だと思います。これは中央と地方の立ち位置の相違が大きな原因だと思います。全国民の不満を日本に向けておきたい中央と、外資導入で地元活性化を図りたい地方政府とは今回のデモへの対応も大きく変わったのではないかと思えます。実際、勤務している無錫市では日本商工会の代表（現在無錫日商倶楽部の副会長をさせてもらっています）として無錫市高官と協議した際には、在無錫日本企業・日本人の安全は何としても守るとの説明を受けまし

た。実際、デモはありましたが公安の出動もあり、平和なデモで終わり大きな被害は一切ありませんでした。自分の目で見える事の重要性を改めて実感しました。

現在四五歳、初めてお会いした頃の藤岡先生とほぼ同年齢かと思います。子会社の代表の立場で中国勤務ですが、当時の先生を思い浮かべると、自分の頼りなさ、知識のなさを痛感させられます。先生の年まであと二〇年、勉強する事ばかりです。

(大和ハウス工業株式会社 無錫勤務)

藤岡さんの三〇年前の出来事

塩見 全一

今から三〇年前、藤岡先生は自分の授業を休講にし、京都市上京区にある室町小学校の門前で、学童保育所を開設するためのビラをまいておられたのです。

私たちは、学童保育所「虹の子クラブ」保護者会の者です。当時、京都西陣の地には、小学生たちが豊かな放課後を過ごすことができる公設の児童館・学童保育所がありませんでした。そのため、かぎっ子の親たちが力を合わせ「虹の子クラブ」という私設



30周年記念誌「虹」と内容の一部

の学童保育所を開設しました。そのけん引役として藤岡先生は活動されていきました。

いろいろな職種の保護者たちが、手の抜けない運営に一喜一憂し、試行錯誤の一〇年が過ぎました。この間の実践をまとめて後世に残し、活動を世に問おうと、藤岡先生を編集委員の代表にして『ぼくら遊びのプロなんや』という記念誌を発行しました。

設立から三〇年が過ぎ、私の孫も小学一年生となり、すっかり代替わりしてしまいました。また、公設の児童館・学童保育所も出来ました。しかし、「虹の子クラブ」は現在も小学校一年生から六年生に豊かな放課後を提供し続けており、昨年開設三〇周年の記念誌「虹」を発行しました。

ここまで到達した原動力は①「子供をダイナミックな遊びのプロ・子ども共和国の主催者」に育てるために力を尽くしたこと、②そのために保護者会が運営の中心に座り、子育て協同組合として運営してきたこと、③この運営を理解し、熱意を持って取り組む指導員に恵まれたこと、にあると思います。



10周年記念誌「ぼくら遊びのプロなんや」と内容の一部

これから学生のみなさんは卒業して働かれるわけですが、結婚しても共働きでやっていこうとする、必ず子供のための保育所とか学童保育所の問題が生じてきます。私たちの発行した記念誌には、学童保育所のことろがぎっしり書かれています。藤岡先生も子育て協同組合のことを熱く書かれています。ぜひ読んでいただきたい本です。

〔虹の子クラブ〕二代目の保護者会長

第三回世界平和博物館会議と藤岡先生のこと

島野由利子

国際会議コーディネーターだった私が初めて藤岡先生にお会いしたのは一九九八年、「第三回世界平和博物館会議」事務局の設置された国際平和ミュージアムで、でした。藤岡先生は同会議の事務局長。会議の準備・運営の責任者で、私は事務局秘書として四月から一月の会議終了まで、藤岡先生と二人三脚で（と私は思っています）国際会議の準備にあたりました。事務局の細かいことは、あのニコニコ顔で「いいいいいよ」とお任せ下さり、とてもやり易い事務局でした。事務局長によっては会議のバランスシートを片手に事務局を運営するタイプの先生もおられますが、藤岡先生は運営資金のことは横に置いて、日本で初めて開催する世界平和博物館会議へのロマンを片手に、否、それを両手に、資金と時間の壁にぶつかりながらも、日々、会議への思いを熱く語られていました。



第3回世界平和博物館会議にて。左から2人目が島野さん

平和への思いは私も同じくするところがあるので、藤岡先生の熱い思いに突き動かされて一生懸命会議準備をしました（よね、先生？）。おかげでAtsushi Fujiokaというサインは私の方が先生より手早かったかも。会議が始まると、先生は会議全体への気配りは勿論、移動のバスでは観光ガイドよろしく京都案内をして下さり、独特のゼスチャーを交えてで、笑いの渦。大好評でした。会議プログラムも盛りだくさんで、日本の参加者を対象に「日本の

平和博物館をめぐる現状と課題について」という集会を開催。この集りはその後、「平和のための博物館・市民ネットワークの集い」として、毎年、開催されるようになりました。海外からの参加者にはポストツアーとして広島平和記念資料館、長崎原爆資料館、沖縄県立平和祈念資料館のいずれかを見学いただきました。会議プログラムだけではあき足らず、なんとホテルに戻ってからも集会が開かれました。「二〇時半@ホテルロビー」という集まりです。仕切りはもちろん藤岡先生。五日間の会議が終わるころには、各国の参加者から「Hi, Professor Fujioka」と親しみをもって呼びかけられる存在でした。事務局はてんでこ舞いでしたが、終わってみれば、参加者の満足感と笑顔に囲まれ、藤岡先生も充実感に

あふれておられ、実にみのり多い国際会議でした。先生の人柄が反映した「藤岡事務局長」のなせる国際会議でした。私の一四年に及ぶ国際会議の仕事の中で（現在は安齋科学・平和事務所で仕事しております）ピカイチと思える事務局でした。

あれから一五年。先生は、現在も夏に学生さんたちを広島、長崎に連れておいでのようですが、そんな先生をお見かけすると九八年の国際会議の頃を思い出します。きっとあの時のように楽しくやっておられるのだろうなあ、藤岡スマイル、藤岡パワー、藤岡ペースで。

藤岡先生、楽しい時間を有難うございました。どうぞ健康にご留意の上、これからも楽しくご活躍ください。

福島の地から広島・長崎を訪ねて

白石裕紀子

この度はご退官おめでとうございます。二〇一一・二〇一二年広島・長崎平和スタディーツアーでお世話になりました。福島県立医科大学医学部医学科二年の白石裕紀子です。

私がスタディーツアーに参加出来たのは本当に幸運でした。経済学の後藤宣代先生に福島の学生が二名参加できると伺ったとき、是非行きたいと思いました。原爆について学べ、放射能・原発に

ついで話し合え、英語能力も高められるという最高のプランでした。

藤岡先生はお孫さんからもらったスヌーピーの旗を持って、いつも私たちを引率して下さいました。藤岡先生は初めてお会いした時からお茶目で楽しくて、全然初めてお会いした気がしませんでした。経済学の先生はもつと厳つい感じなのではと想像していたのに、アイスクリームが好きで恋愛話もするユーモアたっぷりな方でした。

私は経済学をたった一年しか学んでいない身ですが、経済学を切っ掛けとして出会った方々は人や人の営みを大切にし、地球の大きな流れに目を向けていました。福島県で起きたことをツアー参加者に伝え、議論したのは私にとって大変大きなことでした。平和について議論することが平和なものではと思われました。

藤岡先生はご退官後も立命館大学特別任用教授として教育現場で活躍されると伺いました。私はまだまだ未熟者ですが藤岡先生からもつと沢山のことを学ばせていただきましたので、これからもどうぞよろしくお願い致します！

(福島県立医科大学学生)

見ず知らずの私を支援してくださいだった、懐の深い先生

神 直子

藤岡先生、まずは定年退職おめでとうございます。私は先生が立命館大学でお勤めを始められた前年に生まれていますので、ちょうどこれまでの自分の歩みの分だけ、お仕事をされてこられたのだと思うと感慨深いものがあります。この三四年間、本当にさまざまなことがあったことでしょう。その最後の数年にあたる時期に出会う機会を頂けただけの私が、このように寄稿させて頂くのはおこがましい気も致しますが、生徒としてではない私と藤岡先生との関係を通じて、また先生の魅力を多くの方々にお知らせしたく、拙文を書かせて頂く事に致しました。

先生との出会いを説明するために、簡単に自己紹介させて頂きます。二〇〇〇年、大学生の時に私は初めてフィリピンを訪れました。その際、戦時中に夫を日本兵に連行されてしまったという未亡人女性から「日本人なんか見たくなかったのに、なんで来たんだい！」と泣きながら訴えられたことがあります。この時の衝撃がきっかけとなり、私は元日本兵の方々の証言を集め、フィリピンへ届ける活動を行う「ブリッジ・フォー・ピース」を二〇〇四年に始めました。

そして二〇一〇年にNPO法人化する際、藤岡先生との出会いがあったのです。法人化をお知らせするため、そして会員を募るために私は、とあるマーケティングリストに活動内容及び会員の呼びかけを致しました。それに応えてくださったのが、藤岡先生でした。

「会員になって応援したい」という主旨のメールをくださったのです。私は会ったこともない、見ず知らずの大学の先生からの連絡に驚くと同時に、本当に嬉しく思いました。私がかもし逆の立場だったら、知らない人がやっている活動に支援をしようと果たして思えるかは疑問です。メールの文章等だけでご判断くださり、支援を申し出てくださったその姿勢に本当に驚きました。実際、当時の会員さんは法人として始まったばかりだということもあり、顔見知りの方がほとんどでした。

そして後日お会いする機会が訪れ、その後も大変よくして頂いています。具体的には、先生が担当されていた「平和学入門（立命館で平和を学ぶ）」という授業に数年にわたりお招き頂き、学生の皆さんに活動のお話をする機会を与えてくださいました。

お忙しい方にも拘らず、その準備を含めて私のために多くの時間を割いてくださいました。その間、藤岡先生から色々なお話を伺い、それらを独り占めできるので、楽しくも有意義な時間でした。先生の幅広い分野における研究やお考えなどをじっくり伺うことができ、私自身エンパワーされてきたのを感じます。藤岡先生の世界にどっぷり浸かせて頂きました。出来うれば、私も先生の「教え子」の一人として末席に名前を連ねさせて頂けたらと思っています。

ご支援くださったこと、一生忘れません！ 本当にありがとうございます。

（ブリッジ・フォー・ピース代表理事）

体育会系尾崎ゼミ生

菅野 光公

藤岡先生は、京都大学経済学部尾崎ゼミ第四期生で、筆者は同ゼミ第二期生。即ち筆者が二年先輩である。よって、ここからは藤岡クン呼びわりさせてもらう。

京大のゼミは、三回生と四回生とで構成されるので、通常は二年違うと一緒にゼミ活動することはないのだが、私と藤岡クンとはゼミでも大学紛争（一九六九年）の場でも一緒だった。私が五回生として残ったからだ。尾崎ゼミは、先生の寛容さのおかげで実に多様なタイプの学生が集まっていた。特筆すべきは、体育会系の学生の多さである。私はボート部、藤岡クンは陸上部で、他にサッカー部・カヌー部・フェンシング部・水泳部等がいた。陸上部に至っては、尾崎ゼミの一期生から四期生まで各学年に一人ずつ部員がいた。

時は流れて二〇一二年一〇月、恩師尾崎先生の傘寿記念講演会で、筆者は「火事場泥棒 vs 市井の人々」と題する、反原発講演を行った。福島原発事故のあと多くの老ゼミ仲間達が、原発を学び直し集会・デモ・署名活動に参加したのだが、この時に体育会系尾崎ゼミ生が大活躍したのである。この活躍の要因は何かと、今考えている。一途さ・単純さ・信念の強さ・身体の丈夫さ……一言では説明出来ない。藤岡クンはどう考えているのだろうか。尾崎センセの見方もお聞きしたいと思っている。



一番左が尾崎芳治先生。真中が菅野さん（「月の出」にて、1998年10月）

ではなく、おたがいの息遣いを確認しあいながら、未知のゴールに向かって一緒に走り続けることにしよう。藤岡（クン・先生）、これからもよろしく。

話は変わって、私は三〇年のビジネスマン生活後、大学教員になり現在も続けている。転職する時、藤岡クンから多くのアドバイスをもらった。写真は、一五年前私が室蘭工業大学に採用された時のもので、中央が筆者、藤岡クンは右端にいる。この後私は、高知大学・多摩大学へと異動した。高知大学では学長選挙をめぐる内紛に巻き込まれたが、藤岡先生は遠くに居ながら実に正確にこの内紛劇を把握しておられた。多摩大学において担当したゼミで「核廃絶」を学んだ時、ゼミ生を立命館大学平和ミュージアムに連れて行ったが、ここでも藤岡先生にお世話になった。

二年後輩の藤岡クンだが、今や私にとっては藤岡先生である。ともに人生のラストスパート期に入っているが、どちらのスパートが優っているだろうか。いや、ここは競争

京都と立命館そして藤岡ゼミ

杉岡 知裕

一九八四年、私は故郷岡山県を離れ、憧れの地京都へ、そして立命館大学へ入学しました。歴史好きな私にとって、史跡の宝庫とも言える京都で生活できることに大いに期待を膨らませていたことを、今、昨日のように思い出します。

入学当時は、全学部が衣笠で、学生数の多さや校内の活気に圧倒されましたが、基礎ゼミクラスやサークルを通じて多くの人との繋がりが、その後の大学生活の糧となりました。新歓夜祭や学園祭での模擬店の出店や市内の大学を回ってのチケット販売など、楽しい思い出がいっぱいです。

その大学生活の中でも、人との繋がりがより深まったのが、三回生からのゼミでした。藤岡先生との出会いもこの時で、熱意とともにフレッシュ感を感じました。その感じと思いは現在も変わって

いません。ゼミでは、レーガン大統領の財政政策などを通じ、アメリカ経済について二年間学びました。先生の講義やゼミ生との意見交換など、現在の業務の基礎知識として大いに役立っています。

現在では、立命館の校風も当時とは大きく変わっていますが、その流れの中で先生は、多くの人に指導をされてこられたことに深く敬意を表し、感謝を申し上げます。今後は、お体を御自愛いただき、





「カンジョンを生命平和の村へ」世界会議にて

可能な限り、さらに多くの人への御指導を続けていただければと思います。

私の息子が、この四月より京都の大学に進学いたしました。再び京都との繋がりができ大変うれしく思っています。昨年、衣笠へも二〇年ぶりに参りましたが、当時の学部棟の以学館がとても懐かしく感じ、懐古するとともに、今、再び学生に戻りたい気分になっています。

（倉敷市役所 企画財政局企画財政部企画経営室、一九八八年卒）

東アジア民衆交流と連帯の架け橋

高橋 年男

二〇一二年二月、私は藤岡先生の招きにより韓国の濟州島国際平和会議に参加させていただきました。そのタイトルは「江汀（カンジョン）を生命平和の村に！ 濟州を世界平和の島に！」というものでした。



濟州島平和資料館を参観する藤岡さん

海軍基地建設で揺れる江汀村の、辛く苦しくも時には楽しく豊かな闘いを、グローバルな視点からスポットライトを当てて国際世論を喚起すること、藤岡先生たち主催したGlobal Network against Weapon & Nuclear Power in Spaceと濟州島江汀住民の思いが結実した国際シンポジウムでした。

ところでシンポジウムは、濟州の悲しみの詰まった開館間もない「四・三平和公園大講堂」でもたれましたが、始まる前に同じ建物の中にある平和資料館を一巡する時間がありました。一つひとつの展示を丁寧に見つめておられた藤岡先生の姿がとても印象に残っています。

東アジアの国家（軍事）的緊張が醸し出される今ほど、濟州と沖繩をはじめ国境を超える民衆同士の生活者としての交流と連帯、ネットワークが必要な時はありません。濟州と沖繩のつながりを切実に思う私たちにとって、平和・環境・国際協力に尽力してこられた藤岡先生は、戦争に反対する東アジア民衆連帯の架け橋としてかけがえのない方です。

これからも、ご指導、ご鞭撻、よろしくお願いいたします。

（普天間米軍基地から爆音をなくす訴訟団／事務局長）

『アメリカ経済と軍拡——産業荒廃の構図』の出版に関わって

高橋邦太郎

先生から Robert W. DeGrasse Jr. 執筆の Military Expansion Economic Decline : the Impact of Military Spending on U. S. Economic Performance, 1983. 翻訳のお話をいただいたのは一九八六年夏のことでした。

時宜に適した翻訳出版のこともあってプレゼンも無事にとおり、私の記録によれば、九月一七日一六時に先生のお宅に伺って原稿をいただくことが出来ました。翌年三月出版の計画を立てました。一月七日にわざわざ社にお越しくださいました先生に初校をお渡しし二度の校正を経て、三校は三月一〇日に責了となりました。予定より若干遅れて、四月四日に入庫したと記録にあります。

当時のアメリカは、レーガンが大統領に選出されて以後、いわゆるレーガノミックスによる軍事経済化の道を進んだ結果、財政赤字の巨大化や国内産業の空洞化が進み、ドル安への誘導もあって大きい矛盾に陥っていましたし、それは世界経済にも計り知れない影響を与えていました。

著者ディグラスは、本書の中で、冷戦を続けてソ連と覇権を争う道はアメリカ衰退をさらにすすめ生活水準の低下した二流の工業国になると警告し、国内産業を民需のために研究開発する努力を主張しました。

先生の流暢な翻訳によって、読者は外国書の翻訳という感じでなく受け入れられたと思われま

す。好意的な書評もいただいて、本書は好調な売れ行きを示しました。

さらに一九八八年には、先生は、『SDI スターウォーズの経済学』の翻訳を計画され、八年二月に出版されました。この本の「訳者あとがき」で先生は、原著名の副題Economic FalloutのFalloutには「副産物と放射能降下物という二つの意味がある」とされ、「スターウォーズの経済的副産物と経済的灰」の両義を指摘されました。

先生は、「三六億年前から続いてきた原始生命体の共同作業のおかげで、オゾン層と大気圏が形成され、地球生命圏を支える豊穡の大地と海とが生み出されてきた。これに対して『核の時代』とは、突如として『天上の火』核の天龍』が強引に地球生命圏の降下し、暴龍（原爆）あるいは妖龍（原発）という姿に変化しながら、とぐろを巻く時代」（『経済科学通信』No.126、所収）と指摘され、いま強い政治的・学問的意識のもとにご活躍です。今日のご活躍の出発点が、上記二著の出版にあったのかと考えてみますと、私も僅かながらそれに関わらせていただけたことに喜びを感じています。

どうぞ健康に留意されて、更なるご活躍を期待しております。有難うございました。

（ミネルヴァ書房・元編集者）

軍事化との闘いと、スヌーピーと

高原 孝生

藤岡先生に初めてお目にかかったのは、二〇〇〇年の春、米国の華府ワシントンにあるアメリカン大学のキャンパスでした。デニス・クシニツチやヘレン・カルディコットらが登壇した、宇宙の軍事化に警告を発する集会で、関心を同じくする日本の先輩格の研究者に出会えて、たいへん心強く感じたことでした。

その後は平和学会等を通じてご教示をいただき参りました。とりわけ近年は、立命館・アメリカン大学がタイアップした広島・長崎の研修旅行で、アメリカの学生たちを実に親切にリードしておられるお姿に、学ばされております。失礼な言い方になるのを許していただければ、トレードマークのスヌーピーのタオルが、とてもお似合でいらして、印象に残っているのは、私だけではないでしょう。

これからも研究・教育に、どうぞ益々お元気にご活躍くださり、私どもを励ましてくださいますよう、心よりお願い申し上げます。

(明治学院大学国際平和研究所)

近江草津論から見た「アツちゃん先生」の三つの顔

竹谷 利子

私は今、草津コミュニティ支援センター運営会に助っ人のような感じで事務局員の一人としてボランティアをしています。また草津市子育て支援センターの委託事業の「子育てサイトほかほかタウン」の子育てサロン情報の取材と原稿、サイトアップの担当と、草津市まちづくり協働課との協働提案事業である市民活動情報紙「いいことないかな?でんごんばん」の編集もしています。おかげで、毎日毎日、バタバタとしています。

さて藤岡先生との関係ですが、私は、自分の学生時代の思い出をとおして、大学教授たるもの、専門分野以外のことは耳を貸さず、学生に接する時は常に上から目線、自分中心に物事を進めていく人物だと思っていました。ところが藤岡先生にお会いした時、私のその考えは一掃されました。藤岡先生は、私が思っていた教授像とは、真逆に近いタイプだったからです。それはもう十年以上前のことでした。

私はその時、先生の三つの顔を見せていただきました。

一つ目の顔は、特定非営利活動法人おうみNPO政策ネットワーク(二〇一〇年解散)の理事をされていた時の顔でした。私は、その団体の事務局長をしていて先生に大変お世話になりました。

先生は、ご多用にも関わらず理事会には可能な限り出席されました。やむを得ない場合は、必ず理由を添えた欠席届の通知をいただきました。事務方としては、几帳面な理事さんでありがたかった思いをしました。理事としてご尽力もいただき、団体は発展的に活動することができました。とても感謝しています。

二つ目の顔は、「近江草津論」のコーディネーターとしての顔でした。学外にも目を向けられ、どんな分野の、どんな講義であれば学生たちが興味を示すのか、机上では決して学べないものを学生たちに提供するには、どういう人物のどういう話を聞かせればいいのか、常に考えておられました。そして先生自ら、経済人、行政関係者、市民組織などの代表者と連絡をとっておられました。私は、ボランティアワーク・フィールドワークのコーディネーターをしていましたが、ずい分と教えられたことができました。

三つ目の顔は、教授としての顔ではなく、「近江草津論」を受講している学生の一人としての顔でした。講義中は、ゲストスピーカーの話の一言一言を領いて聞かれ、細かくメモをとっておられました。その時の先生の目は、どの学生の目よりもキラキラと輝いた好奇心の旺盛な生徒でした。そしてもう一つ私の心に残っているのは、その当時の先生の、「学生たちは、褒めてあげないとね。褒めることでいくらでも伸びてくれるからね」という口癖でした。学生一人ひとりとしっかり向き合い、認めることができるのでそういうセリフが言えるのだとその時感じました。

先生との思い出をあれこれ心に思い浮かべていて、もし私の大学時代に藤岡先生のような指導者

に出会うことができているならば、私の人生観もずい分と変わっていただろう…と、取り留めのない想像をしてしまいました。

先生、これからもいつまでもお元気でご活躍ください。（おうみNPO政策ネットワーク・元事務局長）

基礎研人間発達ゼミの三八年

田中 幸世

基礎経済科学研究所自由大学院は働きつつ学ぶ社会人のために開設されている市民大学院である。現在一〇余りのゼミを開講している。藤岡先生はこの中の人間発達ゼミ（名称は時期によって変化している）の指導を全く手弁当で三八年間続けてこられた。先生二八歳からである。大変なご努力を傾けてこられたことと思う。なにが先生を突き動かしてきた原動力だろうかと考えてみると、「勤労者≡民衆こそが社会の変革主体である」という先生の強い信念に思い至った。

わたしが、人間発達ゼミに参加したのは十数年前からである。アメリカの軍事戦略を分析し、日本の社会を問う先生の生き生きとした鋭い指摘に感動していた。しかし、参加して間もない二〇〇一年六月、先生は心肺停止で生死の境をさまよわれ、奥様の適切な緊急手当で幸い一命を取り留められるという事態が起きた。その時でさえ、先生は二―三か月休まれただけで基礎研ゼミは再開さ

れている。ただ、このことを機に、基礎研ゼミで話される先生のお考えにスピリチュアルなものも含めた未来志向が強くなったように思う。

半分は理解できないままに、先生の世界の大きさに魅かれて、なんとなくゼミに参加しているが、それは、研究そのものというよりも、芝居作りの大きな刺激になっている。演劇によって先生のお考えを少しでも社会に発信できるように努力しなければならぬと思っている。

ちなみに基礎研のゼミには、人間発達ゼミより長く続いているものもあるが、指導教員が一貫しており、毎回休むことなくゼミに出席されて指導されているのは、人間発達ゼミ（藤岡ゼミ）が最長である。このゼミから多くの社会人ゼミ生が羽ばたき、社会の様々な分野で活躍している。

（基礎研・人間発達ゼミ／演劇）

信念の歴史家、藤岡さん

田中 宏

ご退職おめでとうございます。同じ職場の同僚であることを大変感謝しております。

藤岡さんとは大学院の尾崎芳治先生の経済史ゼミで一緒に過ごさせていただきました。その時ゼミ全体を公私にわたってリードされていたのは本多三郎さんと藤岡さんであった。しかし、藤岡さんが就職

され、私もポーランドに留学し、その後高知大学に着任したので、基礎研などの細かいルート以外ではほとんど交流することがなかった。

ところが、二〇〇〇年にその状況が大きく変わった。立命館大学経済学部に赴任し、同じ社会経済学領域の同僚教員となったからである。その時の藤岡さんは大学院時代の藤岡さんとは大きく変身されていた。ご存じのように、藤岡さんの追究されるテーマと人的ネットワークの広がりはこちらのマネができるものではない。またユニークな教育実践も学ばせていただいた。

その藤岡さんがより信念の人になられたと感じたのは、心肺停止の大病から現場復帰されたときからである。教授会等で、藤岡さんは人間の在り方を哲学する教養教育の改革の上に大学改革を方向づける必要性和その原則を幾度も幾度も繰り返し主張される。そして営利主義的傾向を強める立命館大学の運営の将来に警鐘を鳴らしつつづけられている。実際の改革の歩みの議論は決してそこに立ち返って行われることはないが、その対極として意識せざるを得ないのではないか。

もうひとつ感じている点は歴史家としての藤岡さんである。立命館大学は学園ガバナンスのあり方や大阪茨木キャンパスの創設をめぐって揺れている。その動きのなかで過去の判断、意思決定と行動がどうであったのかを常にふり返られている。そこに私心がない。いつもなるほどと思う。

藤岡さんの研究業績と関連する感想は別途されるので、ここでは藤岡さんとの間には学術的な論争があることだけを触れておこう。二〇一〇年一〇月に基礎研第三三回研究大会の分科会「ソ連型社会の崩壊二〇周年を考える分科会」で、藤岡さんは「国家産業主義」と主張され、私は伝統的解

積とは異なるが「国家社会主義」を唱えた。強大化し所有権と暴力を集中した国家が労働者にたいして過酷な収奪をしたとしても（これは国家主義である）、その上からのシステムが個々の労働者をして自己労働に対する指揮権を部分的に回復させたと私は観察している。これがこの経済社会の非弾力性を生み、自己崩壊へと導いた。それは藤岡さんが言う「職工の組織的怠業」とは明らかに性質が異なるとみなしている。

（立命館大学教授）

Atsushi : a friend of Goddesses and Gods

神々の友達…アツシ

谷川 佳子

世界中から呼ぶ声がする

Atsushi!

ふじおかせんせー！

古くからの友達、新しい友達

年老いた友達、若い友達

女友達、男友達

たくさんの人たちが

一度会った時から決して

他の誰ともまちがうことなく

Atsushi:

ふじおかせんせ〜！

と彼を呼ぶ

いつも小旗を振ってフィールドワークの列の先頭を歩き

いつもマイクを持って大講義室の通路を小走る彼が

どんな食べ物やお酒が好物なのかはよくわからない

しかし

一度でも一緒にご飯をした者ならわかる

人をもてなし、ご馳走すること

知らない人同士を友達にしてしまうのが大の好物だということ
まるで天才のお仲間

命と平和を紡ぐプロジェクトのために

いくつの企画書が書かれ修正版が重ねられ

どれほど彼の想いのシャワーが

見えない鬼火が飛び交う大地にふりそそいだかはよくわからない
しかし

一度でもその雨に打たれた者ならわかる

いつも修正版が丑三つ時に送られてくること

濡れてびしょびしょになっても

なんだかこちよく

あたたかく

みんなの笑顔　なによりも彼の笑声が

粛々と大地にしみこんでいつていること

まるで屈強な腕で大地を慈しみ抱きしめる農夫

あるときは講師の意図を一二〇%つたえるインタープリターとして

あるときはマルクスの代弁者

宇宙戦略研究者、宮沢賢治の後継者として

いつも素直で正直で

ちからに満ち溢れ

みんなを出会いへと導いていく

湧き起こる熱情やよろこび

笑声をつつみかくすことができないのは

彼が

a friend of Goddesses and Gods

神々の友達だから

みんな神々と会いたい

近付きたい

だからその友達である彼を呼ぶ

Atsushi

ふじおかせんせ〜！

今も

世界中から呼ぶ声がする

ほら、今も……

（安斎科学平和事務所研究員）

ゼミナールで「平和なエコ・エコノミー」を学んで

辻本 成実

私は、藤岡先生のゼミで平和なエコ・エコノミーについて学んでいます。立命館大学は、ゼミに入るために学生側から願書を出し、そこから先生に選んで頂くシステムになっています。私は、先生のゼミは第二志望だったのですが、二年を一緒に過ごさせていただいた現在では、選んでいただけに本当に良かったと感じています。

それというのも、ゼミを選んでいた一回生後期、私は経済学部に残るかももう一度試験を受けて転

学するのか悩んでいたからです。経済学部として学んだ事柄が、性に合わなかったのが理由でした。人の動きを数字で計測していく事に、どうしても違和感を覚えてしまったのです。しかし、先生のゼミに入って自由な学びに触れ、経済学の可能性、そして自分なりの経済学の道を感じる事が出来ました。

—実を言うと、最初は先生の意図を掴み切れず、困惑する事もありました。突然大学の屋上へ行って、「人間知恵の輪」なる遊びが始まった時は、何事かと思ったものです。二年の間ゼミで学んでいる内、藤岡先生の人となりが分かり、同時に先生のやろうとしている事が、おぼろげながら分かるようになっていきました。

ゼミ活動の中で、先生は怒る事はありませんでした。それどころか、声を荒げる事すらありません。どんな時も、笑顔を絶やさない方です。中にはそれを甘っちょろいという人も居るでしょう。先生自身、講義の中で「私の評価は甘い事で有名だ」と仰っていました。しかし、対人関係において怒りを感じ、それを表面に出すというのは、平和を目指すうえで最もあつてはならない事ではないか、と気づいてからは、先生のような対応をとれる人こそ、平和について語り、研究出来るのではないかと考えるようになりました。

—残念な事に、交流において笑顔による許容を、自身の優越に繋げてしまう人も居ます。何でも笑って許してくれるから、テキストで良いだろうと考えてしまう人が、いないとは言い切れない世の中です。きっと、先生はそういった対応を取る学生を何人も見てきたのだろうと思います。私自身も、

そう言った態度が無かったとは言えません。それでも笑顔で講義を続ける先生を見ていて、こういう人の姿が平和の形になるのだろうと感じました。

私は、歴史に残る偉人は、人に出来ない事をやっつてのける力を持つ人であると考えています。だから、藤岡先生は偉人になつてはいけません。先生のような人が普通で、特別取り上げられることのない、そんな社会こそが、藤岡先生の目指すものであるように感じました。

だから今、私は経済学を学ぶ上で、人が人を思いやる事を助長するような経済政策の在り方を学ぶことにしています。もしかすると、藤岡先生はそんなつもりがなかったのかもしれませんが、先生の在り方が私の経済学の原点となつたのです。

藤岡先生、長い間お疲れ様でした。これから笑顔の絶えない、優しい先生でいて下さい。

(立命館大学経済学部 藤岡惇ゼミ生)

藤岡先生との思い出

TERRY

藤岡先生に初めてお会いしたのは、二〇〇九年、イギリスの哲学者、サティシユ・クマール氏来日を歓迎する準備委員会だった。常に笑顔を絶やさず、個性豊かな方々のまとめ役に徹していらっ

しゃったのが印象的だった。その後もクマール氏来日の度に、先生とご一緒させていただき、その柔らかな物腰と優しいお人柄に接し、回を重ねる毎に先生の人間性に魅力を感じるようになった。また、アメリカの経済学者アン・マークセン氏の講演の際は通訳をされ、「補足ですが」と出席者に理解しやすく、内容に若干の説明を加え、的確に解説してくださったので、門外漢の私も取り残される事なく話を聞くことができた。会場にいる皆が講演の内容を充分理解して、「いい講演だったなあ」と満たされた気持ちで帰れる様にとの、先生の配慮が感じられた。

いただいた論文を拝読し、経済学者として滋賀県で晴耕雨読の、土に根ざした生活を実践しておられることを知り、益々尊敬の念を抱くようになった。

先生のお姿をみると、ナナオサカキの詩を思い出す。「足に土、手に斧、目に花、耳に鳥、鼻にきのこ、口にほほえみ、胸に歌、肌には汗、心に風、これで十分」。これから私が歩んでいく道のお手本は藤岡先生お一人で「十分」。

(二葉見文 龍谷大学)

ますます社会が必要とする研究者、藤岡さん

豊島 耕一

佐賀大学で物理学を教えて来た豊島耕一と申します。私自身もこの三月で定年で、藤岡さんとは

同世代ということになります。

藤岡さんとは核廃絶運動の集会などで時折お会いすることがあり、また私が日本に紹介した二〇〇六年から二〇〇七年にかけてのイギリスの反核行動「ファスレーン365」には、賛同人として支援して頂きました。また、二〇〇七年に福岡を中心にミサイル防衛と称する宇宙軍拡の動きに反対する運動「Pネット」を設立した際には、その結成第一回の講師を引き受けてもらいました。同時に同会の賛同人にもなつていただき、おかげで講演会シリーズも様々な講師を迎えてすでに一回を数えます。

その後二〇〇九年春のグローバルネットワークのソウルでの年次総会などでも一緒にする機会がありました。藤岡さんの論文に接したのは実はつい最近のことです。核開発の歴史についての一般市民向け文章の準備で調べ物をしていたとき、『立命館経済学』第四五巻に収められた「アメリカ原子力産業の形成」という論文に行き当たりました。読むと、アメリカの核開発、とりわけ「抑止力」の美名のもとに行われた核軍拡の醜悪な実態がつぶさに明らかにされています。もうだいたい前の論文なので、今まで知らなかったのが残念です。

藤岡さんの分野の研究は平和の追求においてこれからますます重要性を増すと思われるので、今後のご活躍と、さらなるご教示とをお願いしたいと思います。

(佐賀大学理工学部教授)

藤岡先生へ、感謝のことは

鳥井 真木

私は、一九八二年立命館大学図書館での勤務を皮切りに、現在、立命館大学国際平和ミュージアムで働く鳥井真木と申します。

藤岡先生は、三四年間にわたって立命館大学経済学部の教員としてお勤めになられ、定年退職をお迎えになられたとのこと、誠におめでとうございます。先生とは、直接業務での接点はなかったのですが、組合活動や同僚を介して、先生のお名前は存じ上げておりました。二〇〇九年にミュージアムに異動してから、先生がBKC（びわこ・くさつキャンパス）にある経済学部におられながらも、ミュージアムの利活用について積極的に学生たちに働きかけてくださっていることを知りました。また一九九二年の開設以来、先生は立命館大学国際平和ミュージアムのメディア・資料セクター長として、また経済学部の運営委員として、お務めいただきました。学部教育、教養教育の正課や課外活動においても、本当にさまざまな場面でミュージアムをご利用いただいた先生のお一人です。

二〇一二年は、「平和と民主主義」を教学理念とする立命館大学が国際平和ミュージアムを開設して二〇年となり、通算して八三万人（二〇一一・一二）の見学者を迎えることができました。世界初の大学立平和博物館として、「平和と民主主義」（教学理念）、「人類的課題に取り組む地球市民

の育成」(立命館憲章)といった理念を体現しつつ、多数の学生・市民の参加を得ながら、ミュージアムは市民の社会教育、小中高校生の平和教育、大学の平和学講義を支援する役割を果たしてきたのではないかと自負しております。開設二〇周年を記念してこの二〇年の活動を振り返り、未来を目指すミュージアムの活動記録として、『立命館大学国際平和ミュージアム二〇年の歩み 一九九二～二〇一二』(二〇一二・五)を作成しましたが、藤岡先生には、その記念誌編集委員長としてもご活躍いただきました。

今、日本は東日本大震災の被災、福島原子力発電所の重大な事故以降、また国際関係においても、「アラブの春」に始まる中東における政情不安、日本と中国・韓国との関係など、平和な国際社会の実現にとって重大で困難な問題が生じています。世界ははまだ戦争・紛争・暴力が絶えず、その解決には多大な人類の努力が必要とされています。そうした世界の状況を、ともに学び、理解しあい、解決のため実践するという学生の成長を大切にされる先生の教えは貴重な経験だったと思います。

いつもミュージアムには、地球に優しいエコな自転車で軽快に、颯爽と現れる藤岡先生……。これから過ごされる比良山麓で晴耕雨読の生活など、とてもうらやましくあこがれてしまいます。なんとどうか……。先生の独特の世界観に引き込まれてしまうファンの一人でした。

引き続き、ミュージアムを創りあげてきた信念、パワーを継続させる取り組みに、お力をお貸しください。

(立命館大学職員、国際平和ミュージアム勤務)

平和学に生きる

中嶋 大輔

奈良先端大で毎日見る科学技術の未来像に危機と嫌悪感を抱いて新しい道を模索していたある日、平和学に出会いました。詳しく知ろうと参加したセミナーで司会をされていたのが藤岡先生で、私にはない柔らかい口調と理解しやすい話の構成が印象に残りました。奈良先端大を退学、立命館大学に入学した私は、藤岡先生のもとで平和学を学ばせていただきました。日本に生きる私たちが如何に世界を搾取しているのか、資本至上主義がどれほどの環境破壊や紛争を引き起こしているのか、そして、どう転換するのか、その方途を、講義で、書籍で、案内してくださいました。また、「偉大なる魂」の令孫アルン・ガンデイ氏の平和の旅に随行させていただく機会を与えていただき、対話とは、肺腑を抉る言説とは何たるかを眼前で見させていただくことができました。さらに、平和学の父ヨハン・ガルトウングのNGOトランSENDへと導いてくださり、現在はトランSEND研究会の事務局長をさせていただいております。貴重な学びの機会を次々とくださった藤岡先生には、どれほど感謝してもきれません。

卒業後は、平和の経済学を体で学び、生き様にせねばならないと決意し、ネパールで五年を過ごしました。カースト、貧富の差、一万五千人が亡くなった内戦、その終結、王制崩壊、何人もの死者が出た制憲議会選挙、一日一二時間以上電気が来ない首都カトマンズ、雲を貫いて聳え立つヒマ

ラヤ。その麓で、いかに生きるかを教えてくださった人々。感謝の思いで、ネパールでもに学んだ友人たちと「NGOとも」を結成し、ネパール語を教えたり、ネパールスタディツアーをコーディネートしてあります。

帰国後、京都山科に「とも塾」を開き、小・中・高・浪人生と学び合っていますが、根本には藤岡先生から教えていただいた平和学があります。一人でも多くの人が「平和学に生きる」ことを選択する人生を送ってほしいと願い、学生と接する日々です。机上の「知識」ではなく、平和を創る「知恵」を求める時を持つとうと、昨年はパレスチナ人を、今年には写真家桃井和馬氏を招いて講演会を開きました。ということ、次回は藤岡先生、よろしくお願いいたします！

今、再び浪費大国日本に帰国して暮らす私は、先生の教え子として以下の言葉を肝に銘じて生きていきます。

L. トルストイ曰く、

「私は人の背中に腰を下ろし、彼を息苦しくさせ、私を運ばせながら、それでも自分と他の人々に、私は彼に非常に申し訳ないと思っており、いかなる手段を使っても、彼の境涯を楽にさせたいと願っていると確言する。彼の背中から下りる以外は。」
(トランセンンド研究会事務局長)

健康第一でのご活躍ください

中谷 武雄

このたびは無事に定年退職を迎えられることになり、心よりお喜びを申し上げます。これからも、奥様の温かい見守りのもとで、健康には十分にご留意されて、ご活躍されることをお祈り申し上げます。

藤岡さんには、最近では基礎研と経済教育学会の二つの場面で、何かとお世話になっています。大所高所からの、目配りの利いたご支援に深く感謝しています。

基礎研では、機関誌『経済科学通信』の編集局会議や理事会で一緒にさせていただいています。編集局会議には、忙しいスケジュールに合間を作って、駆けつけていただきました。新刊本を常に五〜六冊持参して、コメントを加えながら、誌面構成に積極的なご提案をいただきました。社会全般に広く関心を持って旺盛に生活を振り返ろうとするエネルギーに感心をしています。

自由大学院「人間発達ゼミ」を三八年も続けてこられたことに、心より敬意を表したいと思えます。ゼミ参加者からこのような立派な文集の企画が出てくることは、何の不思議もないことです。ご自分自身のご研究のうえに、大学の学生、院生諸君の教育に力を注がれてこられたうえに、平和運動にも力を割かれているうえに、働きつつ学ぶ労働者とともに社会人ゼミを長きにわたって続けてこられたことは、ご家族や奥様との積極的なパートナーシップのうえに立つ、大きな成果である

と思います。人間発達ゼミも、他のゼミに負けないように、ゼミ学習の成果を研究業績としておまとめになって、世に問うていただけるものと確信しています。

基礎研の皆さんはあまりご存じないかもしれませんが、じつは藤岡さんは、基礎研設立と同じ時期に経済教育学会を起ち上げ、この学会を三〇年の長きにわたって、今日に至るまでずっと支えてこられた立役者です。毎年のように開催される、春と夏（ないし秋）の研究大会にはほぼ毎回出席し、様々な局面で学会の進むべき道を切り開いてきました。

そして来年の秋の大会を三〇周年記念大会として、その実行委員長として準備中です。記念大会に向けて三〇年の歴史を総括する報告を、各大会のテーマ一覧表を準備して、昨年の春に行いました。まさに学会の「生き字引」と評価されています。教育の経験交流を図り、学生が興味を持って経済学の勉強ができる条件整備を目指して、努力を継続されている姿に、頭が下がります。

最近では、とくに三・一一の原発事故、災害の悲惨な状況を目の当たりにして、「原発Ⅱゆつくり爆発する原爆」というテーマを振りかざして、平和運動、反原発、社会システムの転換などと、様々な領域で国際的にも広く奮闘されています。誠実な人柄、率直な話しぶりに引かれて、多くの皆さんがその周りに集まり始めていることは、大変に心強い限りです。皆さんとともに、皆さんに、奥様に支えられて、ご健康で、ますますご活躍されることを期待しております。

（基礎経済科学研究所理事長・経済教育学会長）

リレー形式の講義を分担して

中野 克彦

藤岡惇先生とは、立命館大学のリレー講義「立命館で平和を学ぶ」で一緒にさせていただく機会を得ました。この講義では藤岡先生のもと、藤田明史先生、神田浩史先生とともに平和学の講義を進めさせていただいたのでした。ここ数年は、年度末のさいごの講義の回に担当者四名があつまり、シンポジウム形式でディスカッションをするのが恒例です。テーマは東アジアを中心に、平和の世界をどうつくっていくか、というもので、各担当者の分野は違えど時に熱い議論が展開します。これも「平和」という問題設定がいかに普遍的にそれぞれの人びとの問題にかかわっているか、ということを反映していると思います。このなかで実に様々なことを学ぶことができました。藤岡先生に感謝を申し上げます。そして、今後ともよろしくお願い申し上げます。
(立命館大学非常勤講師)

ネーミングの天才

仲野 優子

私は、藤岡先生と一緒に、立命館大学の「近江草津論」の授業を、数年にわたり受け持たせてい

ただきました。ゲストスピーカーをつなぎ、多く人と出会い、多くのことを学んだ授業なのですが、その中の先生からの数々のご指示やご示唆、本当に勉強になりました。

藤岡先生を私なりに表すと、「ネーミングの天才」です。この講義ではいくつかのレポートを課題として、WebCT（講義のホームページ）に提出するのですが、学生さんが迷わないように、提出先にすべて名前がつけてありました。まず提出先は「レポートの部屋」、各レポートはそれぞれ「そもそもレポート」「伝承レポート」「F・W（フィールドワーク）レポート」、「V・W（ボランティアワーク）レポート」「課題発見レポート」などとなっていました。特に「そもそもレポート」は、「『イノチ』とは何か。『私』（脳・自我）が『イノチ』を持っているのか、それとも『イノチ』が『私』を生きているのか」という魅力的な課題で、先生と分担しても二〇〇枚以上もあるレポートを採点するのも楽しかったことを思い出しています。

講義という限られた時間でしか、おつきあいできませんでしたが、どうもありがとうございました。
（しがNPOセンター専務理事 草津在住）

一回生・基礎演習の思い出

中山 麻美

立命館大学経済学部に入學して間もない頃に、基礎演習クラスを担当していただいたのが、藤岡先生との最初の出会いでした。まだ学校生活に慣れない私にとって、いつもニコニコと笑顔で相談ののってくださる先生は、大変心強い存在でした。その姿勢は個人に向けられるだけでなく、二〇

〇人以上が受講している講義でも変わることがなく、常にニコニコと学生に語りかける対話的な講義スタイルに表れていました。当時は、受講生が多いと一方的に進める講義が大半を占めるなか、先生のスタイルはとても画期的に思えました。

その当時は超氷河期と呼ばれる就職難の時代であったため、立命館大学経済学部の女子学生を活気づけるプロジェクトが始動しました。それが、企業が求める人材像と学生とのミスマッチを探る、「女子就職プロジェクト」でした。この新しい試みへの参加を私に強く勧めてくれたのも藤岡先生でした。この活動を通して、様々な企業



前列中央がアン。左端が中山さん

の人事部の方々にインタビューやアンケート調査を行い報告書にまとめ、人に伝えるという楽しみを見出すことができました。このプロジェクトのお陰で、上級生の先輩とも知り合うことができました。現在の私の人間関係を豊かにしてくれていると感じています。

経済学部を卒業後、一般企業での語学カウンセラーなどの仕事を経て、ご縁があり立命館大学経済学部で英語を教えることとなり、藤岡先生と驚きの再会を果たすことができました。久しぶりにお会いした藤岡先生は、私が学生だった頃と同じニコニコの笑顔でした。そして、大学の時と同様に、素敵な機会を与えてくださったのです。それはクリントン元大統領の手に深く愛した女性として紹介され、現在は経済地理学者として活躍されるアン・マークセンさんのお食事会でした。どんな質問にも実直に答える姿勢や冗談を交えた彼女の話は、とても楽しく刺激を受けました。先生の国を越えたネットワークに感銘を受けました。

藤岡先生の周りには、素敵な人たちとの出会いがあります。それはひとえに先生のお人柄によるものであると推察しております。ご退職されたあとも、人と人とを結びつけていただけることと期待しております。そのためにも先生のご健康を祈念しております。

(立命館大学 非常勤講師 (英語))

藤岡先生と双頭の天龍

西岡 由香

長崎在住のマンガ家で西岡由香と申します。立命館大学名誉教授の安斎育郎先生から藤岡先生を紹介していただいてから、もう何年になるでしょう。毎年八月九日の長崎原爆忌が近づくと、長崎の爆心地公園近くでゼミ生を連れた藤岡先生とすれちがうのを心待ちにする私がいまいます。

福島第一原発事故後、藤岡先生が発表された論文「福島で進行中の核の大惨事をどう見るか」に圧倒されました。地球の誕生からの壮大な流れの中で放射線をとらえ、地球生命圏に降り立った「核の暴龍（核爆弾）」と「核の妖龍（原発）」という双頭の龍がとぐろを巻く「核時代」を撃つ——同じ時期、私も「制御できない核エネルギーIIアトミック・ドラゴン」という位置づけでマンガを描いていましたので、先生の論文に勇気づけられたのを覚えています。（『さよならア



トミック・ドラゴン―核と原発のお話』二〇一二年凱風社刊)

双頭の天龍は、誰かのいのちを人身御供にすることで地上にとどまり続けています。それぞれが天龍の時代の当事者として行動することですが、龍を天に戻す術はないのでしょうか。藤岡先生、やりいっそう私たちをご指導くださいますよう、お願いいたします。

藤岡先生のこれからの活躍をお祈りしつつ、夏の長崎での再会を楽しみにしています。

「藤岡先生と双頭の天龍」のイラスト描いてみました（ハリー・ポッター風？）

（漫画家・長崎市在住）

千度の逆風と

西口 清勝

藤岡惇教授が、二〇一三年度末をもって定年退職されることになった。大学をめぐる―とりわけ立命館大学が直面している―状況が厳しさを増す中で、勤務を全うされ無事定年退職の日を迎えられるのは実におめでたいことであり、まず最初に心よりお祝い申し上げたい。

藤岡惇教授というやや堅苦しい呼称は止めて、いつもそうしているように、以下藤岡さんと呼びせていただきたい。振り返って見ると、藤岡さんのお付き合いは、①大学院経済学研究科での五

年間と②立命館大学経済学部の同僚としての二二年間（それに私が特任教授になってからの三年間）の合計三〇年間にも及ぶものであり、楽しかったことも苦しかったことも含めて多くの忘れ難い事柄がある。

大学教員の仕事は、①教育、②研究、③管理運営（行政）、および④社会活動、の四分野があるが、なかでも教育と研究が中心になる。藤岡さんや私たちの世代が経験してきた大学での教育と研究を中心とする生活は、正直申して平穏で順調な時期は短くて、多くの困難と逆風に立ち向かうものであった。私たちは少なくとも四度は激しい逆風に晒されることになった。

第一の逆風は、大学院時代を送った時の「大学紛争」（それは一九六〇年代後半には始まっており七〇年代に受け継がれていった）であった。「大学紛争」の本質は、政府・財界の右からのそれに呼応した全共闘の「左」からの大学攻撃にあり、私たちは学問研究の自由と大学の民主化を守り発展させる立場からこの逆風に立ち向かい、その中でお互いの信頼感を深めて行った。第二の逆風は、一九九〇年代初めから始まり二一世紀に入った今日までも続いている「大学改革」である。真の意味での大学改革が必要であることは言うまでもないことだが、政府・財界が求めている「大学改革」は新自由主義のイデオロギーを背景にして大学に競争原理を導入して効率化を図るという短期的で功利的なものであり、大学での教育と研究には本来馴染まず適用してはならないものである。しかし、大変残念なことに、この新自由主義のイデオロギーを受け入れ—場合によっては先取りして—「大学改革のデパート・立命館」を売り物にする経営陣が現れ、平和と民主主義並びに全

構成員自治という学園の根本原理から逸脱する事態が発生した。これが、第三の逆風である。第四の逆風は、一九八九―一九一年のソ連・東欧における「社会主義体制」の崩壊である。その体制が社会主義から程遠いものであったにも拘わらず、社会経済学の研究者にとっては強い逆風となったことは否めない。

藤岡さんと私たちはこれらの逆風に臆することなく勇気を持って立ち向かってきたと思う。藤岡さんは京都で生まれ育った男性であり、ソフトで爽やかなお人柄だが、内面は芯が強い頑張り屋さんだ。その持前の陽性で誠実な性格で、これまでにどれだけ多くの人が励まされたか分からないほどである。何時の頃からか私たちの間では「困った時には藤岡さん」と相談するようになってきている。

定年退職後は、「晴耕雨読」の生活を送り「ライフワークを完成する」という目標を持っておられると聞く。これまでの教育と研究の集大成としてきつと美しい大輪の花を咲かせられるに違いないと思うし期待は大きい。

(立命館大学経済学部教員)

植物のように育ててくれたアッチちゃん先生

乗松 聡子

私は、カナダ西海岸に拠点を置く平和教育団体「ピース・フィロソフィー・センター」代表として、地元での平和や人権のための教育活動、ウェブサイト (www.peacephilosophy.com) を通じた発信、オンライン英語誌 *The Asia-Pacific Journal: Japan Focus* (www.japanfocus.org) のライター、編集をしております。昨年オーストラリア国立大学のガバン・マコーマックさんと共著で *Resistant Islands: Okinawa Confronts Japan and the United States* (Rowman & Littlefield, 2012) を出し、日本語版は、今年春、法律文化社から『沖縄の〈怒〉―日米への抵抗』という題で出します。今の私があるのはアッチちゃん先生のおかげです。二〇〇六年六月下旬、バンクーバーで「世界平和フォーラム」が開かれ、全世界から一万人以上の参加がありました。日本からはピースボート、国際法律家協会、被団協などたくさんの方々が参加していましたが、藤岡さんは宇宙の軍事化を止めるための「グローバル・ネットワーク」の代表として来ていました。フォーラムも終わりに近づいた日、私は「バンクーバー九条の会」のメンバーとして、中華街のレストランで日本から来た参加者のための交流会を企画しました。当日は二〇〇人以上の参加があり、右往左往していたところ、藤岡さんが飛び入りで共同司会をしてくださったのです。当時八歳の息子と五歳の娘も連れてきており、私が忙しいとき、子どもたちをトイレにまで連れていってくれました。腰が低くて



広島・長崎を回る平和学習の旅のスタッフ
左からピータ・カズニックさん、近藤紘子さん、藤岡
惇さん、筆者（2010年8月2日 京都にて）

ひょうきんな藤岡さんは私にとって、「大学の先生」というイメージを打ち破る親しみ易い方でした。このフォーラムではたくさんの出合いがありました。被団協代表で来ていた被爆者の岩佐幹三さん、大野禮子さん、寺沢茂さん、三宅信雄さんとは今でも毎年のように東京で「バンクーバー同窓会」を開いています。フォーラムの分科会で劣化ウラン問題を扱っていた嘉指信雄さん、豊田直巳さんの勧めでその年の八月頭に広島で開催された「ウラン兵器禁止を求める国際連合（ICBUW）の世界会議に参加することになりました。藤岡さんにその話をしたところ、「日米の学生との旅でそ

の時期広島にいたので、被爆者の山岡ミチコさんの通訳をしませんか」と言われたのが私のこの旅とのかかわりのきっかけでした。

この平和学習の旅は、アメリカン大学の歴史学教授、ピーター・カズニックさんと立命館の藤岡さんがそれぞれの大学の学生約二〇人を広島と長崎に連れていくプログラムです。八月一―四日は立命館大学の平和ミュージアム等で原爆投下の歴史や平和博物館運動について学び、八月四―七日は広島、七―一〇日は長崎で、原爆資料館や原爆にまつわる場所を見学、八月六日と九日の記念日は広島、長崎それぞれの式典に参加します。期間中を通して、被爆者の証言をきき、核軍

縮・廃絶運動に関わる国内外の人たちと交流します。二〇〇六年に通訳でお手伝いした私は、翌年からは全期間参加しませんが、と藤岡さんに誘われ、二〇〇七年から現在にいたるまで毎年参加しています。通訳だけでなく、自分もときには講師を務め、二〇〇八年からはカナダ人学生のゲスト参加も許してもらい、近年はプログラムの内容作りにも関わってきています。二〇一〇年には、この旅の仲間で本を出しました。『広島長崎原爆投下再考―日米の視点』（法律文化社）は、カズニツクさんと、この旅でいつも講演いただく鹿児島大学の木村朗さんが共著で、私は翻訳を担当し、藤岡さんと私がコラムを提供しました。

このように、私は直接の教え子ではなくとも、広島長崎平和の旅という「現場」で藤岡さんに育ててもらったと思っています。藤岡さんの教育方法は決して上から人を「教え育てる」ものではなく、その人のいいところを見出し、植物を愛でるように、自然に成長するような導き方をしてくれます。また、きつとご自分がわざととぼけることによって、相手にとっては、自分がすっかりやらないとだめだと思わせることで育てる人なのではないかと思っています（笑）。藤岡さんは、数年前、まだ私が出会う前に心臓発作で倒れられ、危うく命を落とすところだったということを知っており、ます。きつとその時の体験もあるのでしょうか、一緒にいると、生きていることのありがたさ、人と人、人と自然とのつながりを感じることが出来ます。広島長崎の旅に参加するアメリカの学生たちも、スヌーピー柄のタオルを傘に巻きつけて引率用の旗とし、午前の講座が終わると「ハッピー・ランチ??」と呼びかける藤岡さんが大好きです。しかし一方、藤岡さんの著書を読みますと、普

段のお姿からは想像のつかない厳格でピュアな学者・活動家であり、その落差がまた私にとっては最高の魅力です。

アツちゃん先生——私にとつては最初から「大学」や「学界」の外でのお付き合いということもあり、「退職」されるといふ実感がありません。これからも末永く、一緒に楽しく活動させていただけたら、とお願ひします。

(ピース・フィロソフィー・センター代表)

虹の子クラブの活動から見えてきたアツちゃん先生

萩原 暢子

簡単に自己紹介しますと、京都在住、五〇代女性です。現在、京都ノートルダム女子大学で教鞭を執っています。産婦人科の医師でもあります。

高校時代、医学部受験のため早弁をして昼休みに図書館で勉強していると、前の席に座っていた男子生徒が、「女のくせに勉強なんかしている」と隣の男子とヒソヒソと話していたことがありました。医学部に入学してからも、「女は結婚したら医者をやめて家に入るべき」と男子の同級生に直接言われたこともありました。「私がそんなに怖かったのかしら」と今更ながら思ってしまう。あの頃に比べたら女医さんも増え、婦人科では「女医希望」が罷り通っています。日本でも女

医さんが働きやすくなりつつあるのは、大変良い傾向だと思っています。

藤岡先生とは、息子が小学一年生になって学童保育所「虹の子クラブ」に入れていただいたときに初めてお目にかかりました。会長をされていたのでしょうか、記憶が定かではありませんが、親子キャンプでは夜に親の会があり、ビールを飲みながら色々と話していただき、少しずつクラブにも慣れました。キャンプの川遊びの時は、藤岡先生の周りに子どもたちが群がっていたことを思い出します。息子が小学校を卒業してからも、学童保育所のお祭りなど色々な行事でお目にかかれて、その都度あのやわらかいタッチで話していただき、いつも癒されています。

藤岡先生のお仕事を知るために、先生のホームページへおじゃまし、論文を読ませていただきました。私は経済学とは全く疎遠で、世の中の仕組みも表面的なところで理解している部分がほとんどです。そんな私にも理解できるような分かりやすい文面で、大変ありがたく読ませていただきました。その中で、「徳が得になる経済システム」ということばを見つけ、すごく納得しました。また、非暴力の社会改造を目指されている先生の本質を垣間見た気がしました。ブータンとまではいなくても、豊かな心の余裕がもてるような社会になればと思っています。

定年退職された後、先生に望むのは、お身体の健康管理をしていただきたいと言うことです。先生が倒れられて心肺停止だったと言うことを聞きました。その後蘇生されて、またお会いできたことを、ほんとうに嬉しく思っています。神様から授かった命には、きつと何かメッセージが含まれていると思います。どうか大切に命を育ててください。

(京都ノートルダム女子大学教授)

大地に根ざした生活への転換を

長谷川義和

二〇一三年一月一九日、私が勤める大月短期大学の「地域実習（エコビレッジ）」の終講式。この「地域実習」は、大月市で農地・農業の再生、都市農村交流などに取り組む「NPO法人おつきエコビレッジ」の活動に学生が参加するものです。当日は、もち米と黒米（古代米）で餅をつき、エコビレッジで収穫した野菜で味噌汁をつくり食べました。このもち米と黒米は、学生が、種蒔きから始まり田植え、草取り、刈り取り、脱穀という一連の過程に携わってきたもので、最後に食べることで生産から消費まで一貫した過程を経験したことになります。この地域実習について、参加した学生たちは農業を体験するのは初めてという学生も少なくなく、「朝が早く大変だった、夏の暑さ・冬の寒さが堪えた、けれどやっているうちに次第に面白くなり、二週間に一回の地域実習が楽しみになった」、「直接農業に携わるわけではないが、この体験は今後の人生に生きるのではないか」、「この体験は自分にとって宝物だ」、などの感想を次々に述べました。学生にとって、土・自然と格闘して農産物を育てるという経験は他では得られない貴重な体験で、自分たちの生活がどのようなにして成り立っているのかを考えるきっかけとなるものです。また、年齢の離れた人たちから直接農作業について指導を受けながら、様々な話しを聞くことも貴重な機会です。

大月短期大学では、一年後期から始まる「地域実習」の前に、一年前期に「大月学入門」という

講義で大月の現状と、地域で行なわれている活動を、地域の方に講師になってもらい学生に紹介しています。「大月学入門」「地域実習」を合わせた、「地域をフィールドにした教育」という科目群は、二〇〇七年度のカリキュラム改革で開始されました。このカリキュラムを構想する過程では、藤岡さんの「近江・草津論」や「平和なエコ・エコノミー」論にいたる経済教育学会での報告や実践などから強い刺激を受けました。

「イノチが私を生きている」ので「私がイノチを所有しているのではない」として、「大地・自然が人間を生み出す」ところから出発して経済学の転換を主張する「学んでほしい『経済良識』、一のエッセンス」は、リーマンショックと三・一一以後の日本と世界を考える際に十分に吟味されるべきであると思います。「マルクス学者といえども、大地から切り離され、空調の効いた高層マンションの一室に住み、頭でっかちの生活を送っていると、近代産業主義特有の天動説的な人間観に染まっていくのだろう（！）。藤岡さんのように、「半農半X」の生活はなかなか実践できないにせよ、大地に根ざした生活への転換を進めつつ、「平和なエコ・エコノミーの創造」に向けて、協働し合えることをねがっています。

（大月短期大学教員）

藤岡先生とネットと私

服部 寿子

藤岡先生と私の出会いは二〇世紀の終わり近くのところ、憲法九条の会・関西のメンバーと立命館大学の平和ミュージアムを見学したときだった。案内してくださった藤岡先生は物腰が柔らかく、その話しぶりから同行の友人とさすが京都の人、お公家さんみたいな人やねとささやきあっていた。それから数年して仕事のプラスチック以外の「何か」をしたくて会社を辞め、退職金が残っているうちにと一九九八年、立命館大学に社会人入学した。そして藤岡先生の「アメリカ経済論」の講義を受けた。私は仕事以外ではあまりインターネットを使いたくなかったのだが、先生が講義でいくつかのウェブサイトを示してどれかを開いて読むようにと言われた。その時に開いてみたのは世界経済フォーラムやWTOに対抗して世紀の変わり目にシアトルで行われていた運動や世界社会フォーラムの報告だった。それは全国紙では片隅の記事で報道されていた集会の模様がリアルで詳細に報告されていた。当局の干渉への対抗策から安全対策、救護体制や後始末の方法までが書かれていて、それは私にとってネットへの開眼ともいえるだろうか。シアトルのフォーラムは今日の九〇%のウォール街オキュパイ運動につながっているのだろう。

基礎研に加入して約十年になるが、ゼミでご指導していただくという関係から藤岡先生を外形的に私なりに分析してみた。まずいえるのは専門の経済学に留まらずあらゆる科学、自然科学、社会

科学等、分野を問わず宇宙から地球の歴史、土壌の中にいる細菌にいたるまで全方位への関心の広がりである。それに新しい物事への興味と現場主義と実践主義がことばの端々に感じられる。

それってアダム・スミスそっくりではないか——ここ一〇年近くA・スミスの著作を読み始めて自分なりのスミス像を描き始めた私の心にスミスに似た学者像が浮かんできた。スミスはふつう経済学の父とされているが、イギリスにおいて一八世紀後半から進行していた産業革命を観察して、古典的な学問と同時に新しい科学的知識や技術にいち早く関心を抱き、それらが産業に取り入れられている実態を『国富論』やそれに先立つ『法学講義』の叙述に反映させている。彼はまた化学や数学、物理学、天文学等の自然科学を含む、いわゆるリベラルアーツの基礎の上に倫理学、哲学やと経済学を論じ、芸術にも深い関心を示していた。やっぱり藤岡先生とそっくりに見える。

経済学者と呼ばれる人たちは様々な学派に分類されるであろうが、今日地球上で起っている問題は教科書的経済学理論や数学的分析で解決できるものではなくなってきた。全方位への関心と、自然と人間のかかわりを論じ、人類への愛情こそが地球が直面している困難な諸問題にアプローチすることができるのであろう。

基礎研でも藤岡先生の間人発達ゼミでこれからも成長していけたらと思う。しかし私はいまもネットは嫌いで、よほどの必要がなければインターネットにアクセスしたくない。藤岡先生のご指導にもかかわらず、この点で私は人間発達していないようである。

(基礎研・人間発達ゼミ)

藤岡せんせえー

花垣 ルミ

藤岡せんせえ

取りあえずご苦労様でした。でもまだまだ人生最終章に入ったわけではなく、もしかして「やり残したかな？」と思われることが有ればこれからチャンスですね。心おきなくゆつくり忘れものを探して下さいませ。(お仕事は完全に終わったのではないので、未だかなりお忙しいでしょうが)。

先生から沢山の出会いを頂きました。

去年のアメリカン大学生との交流会立命の学食で、韓国と中国の学生さんに、「韓国や中国へ行って見たい気持ちがあるんだけど戦争の加害のことが申し訳なくて…もし許して下さいなら行っても良いですか?」。「もう許しますよ。ぜひ来て下さい!」と二人口を揃えて言ってくれました。「本当にごめんなさい ありがとう」…涙ポロポロ…

アメリカの写真家 ポーレ・サビアノさんとの出会いも感動でした。広島・長崎・ビキニ、東京・ドレスデンの大空襲。「あの日を生きた」人々と向き合い、五十人の肖像と証言を記録。私もその中の一人として立派な写真集を頂きました。

大震災・原発事故

私は東京より北へ行ったことがなく「喜びも哀しみも」でした。被災地を見てオロオロしている私をつかず離れずのたち位置で気づかって下さっているのを背中に感じていました。

ナイシヨのツイート

東北の宿での朝出かける前。「花垣さんお化粧しなくて良いんですか?」「エッ?」いや、僕は若い頃妻に「貴女はお化粧が上手ですね」といってすごく怒られましたねえ(当たり前前です!)。ずうっと奥さんに頭上げずに優しくしてあげてくださいね。

(五歳の時広島で被爆。京都被爆者懇談会世話人)

米国南部の慣れない土地での生活を楽しむ

樋口 映美

藤岡先生に最初にお目にかかったのは、一九八九年の九月、米国南部のノースキャロライナ州の大学町チャペルヒルに先生が初めて到着されたときです。先生は、そのころ私の勤務していた大学

(University of North Carolina) に客員教授として半年の予定で滞在されることになっていました。南部における軍需産業の展開を研究されるのが目的であったと記憶しています。

到着後の最初の仕事は、毎日の生活に必要な日用品をそろえることですが、慣れない土地では面倒なことです。私は先生に、何かお手伝いできることがあればご連絡くださいと申し上げました。ところが何の連絡もなく何日か経ちました。二度目にお会いしたときのことです。藤岡先生は、「知らない土地で生活を始めるというのは、楽しいですね」と、笑顔満面で元気一杯でした。先生は、すでにレンタカーを借りて、日用品の買い物にあちこちに出かけ、初めての土地で生活を始める「苦勞」を実に楽しんでいらしたわけです。先生からは、エネルギーが漲っていました。

(専修大学文学部教授)

楽しかったオン・デマンド講座

平野 慶次

藤岡先生に初めてお会いしたのは、インドのムンバイで開催された第三回世界社会フォーラムの報告会の折でした。藤岡先生は、自ら大量の配布する関連資料を沢山持ってこられました。その後幾度となくご一緒した集まりでも同様でした。この報告会の報告者であった藤岡先生は、いきなり

「今日はオン・デマンド方式で進めたいと考えています」と。

世界社会フォーラムの動き自体が、まだそれほど広く共有されているわけでもなく、参加している日本人がいたということにむしろ驚いたりしていたのですから、いきなり質問をと問われ少々慌てましたが、なぜその場に来たのか、という素朴な動機に照らし、ホリスティックな観点から如何に社会アプローチの道が開けるでしょうか？ と質問をしてみました。会場に集まった参加者にそれぞれに質問してもらい、それらを整理し、順に話題を提供するという何とも守備範囲の広さに感銘を受けました。

終始とてもにこやかにされながら、話される態度に親近感を覚え、報告会終了後には、学生さんらに混じって打ち上げも一緒にさせていただき、個人的な交流がスタートしたように思います。

その後もサティッシュ・クマール師の招聘プログラムで一緒にしたり、平和ミュージアムの企画展等に参加させていただいたり、と少なからぬご縁を今現在も楽しませていただいています。お陰様でわたし自身のネットワークにも拡がりや厚み、深みも一段と増したように思います。

定年退官されることになり、寂しくも感じますが、この寂しさは、明日は我が身と感じるほどにすぐ後ろを歩いているとの自覚からくるようです。早すぎる引退に、ますますのご活躍を期待したいと考えているのは、わたしだけではないと思います。穿った言い方ですが、大いなる社会資源として活用されるべきでしょう。とは言え、いったん区切りをつけることにも社会的な意味はあるでしょうし、新たなステージへと歩を進める切り替えの時間を大切に楽しんでいただきたいと思います。

す。平和というテーマは、人類にとって永遠不滅のテーマですからね。

(ホーリスティック教育研究会、京都市在住)

情熱家の粘りに脱帽

廣末 良子

「やっぱり、だめですかねー」と藤岡先生。「藤岡先生、この企画は前回の企画委員会です没になりましたよねー」と私。この会議中のやり取りは藤岡先生が立命館国際平和ミュージアムの企画局長で、私がミュージアムの担当課長の時だったと記憶している。

企画案については、予算・開催時期・人員等に鑑み、「没」になることも多い。しかし、藤岡先生の場合は懲りることなく、他の企画に織り交ぜて何度も提案をされる。前々から「この粘り強さはなんだ？」と私は思ってきた。

昨年、二〇一二年に立命館国際平和ミュージアムは開設二〇周年を迎えた。開設には学園内外の多くの人々から平和への礎として大きな期待と、支援・協力が寄せられ、大学も全学を挙げて取り組んだ。そしてミュージアムの企画運営には教員は各学部から、また有識者と職員も構成員として参画した。それは平和への願いを具現化する為に最善を尽くしたいとする、熱き人々の集まりで

あった。記念として刊行された「二〇年の歩み」資料編」をいただき、当時を思い返して企画委員会（途中、企画運営委員会に改称）メンバーの一覧を見て驚いた。何と、藤岡先生は一九九三年度から二〇一二年度までの二〇年間、一度も欠けることなく経済学部から選出されてミュージアムの企画運営に携わっていらっしやった（途中に突然の大病で静養を余儀なくされましたが）。もちろんこの間に企画局長として就任され国際会議等にも活躍された。立命館国際平和ミュージアムに関わった二〇年間は名誉館長の安齋育郎先生と同じ記録なのだ。

企画運営委員の二〇年は藤岡先生の平和への希求の証。他の人の追隨を許さないほどの粘り強さに脱帽です。そう云えば藤岡先生は「コスタリカは銃を捨てて、コーヒーで平和な国創りを始めています。支援しましょう！ コーヒーを買ってください」と出会う人ごとにコーヒーを勧めていた。あの当時、コーヒー行商の先生の自宅はコーヒーの山で、先生はコーヒーに埋もれて生活をしているらしいと噂で聞いた。

藤岡先生をはじめとして「平和学」担当の先生方の中には、夏休み中の八月にも、広島・長崎へ学生を引率して実地教育を行っている人が何人かおられた。ある年のある夜、授業に参加したA君は広島・長崎の日程を終えて郷里に向かう途中、京都で電車を降りてしまった。そしてミュージアムの灯りをたよりに私が仕事をしている事務室に立ち寄った。彼は「原爆の実態に触れ被爆者の方々の証言を聞かせてもらった。みんなと戦争と平和について考え議論もした。自分の中に湧き立つ思いがあまりにも強くて、真直ぐ実家に帰れない。今の自分の思いのたけを誰かに聴いて欲しく

てミュージアムを訪ねてきた」のだった。話し終えたA君は宮島のしゃもじを、おみやげだと差し出した。このとき私は、教育の力はずごい、学生・青年は真実に触れ普遍的な価値を見出したとき、ここまで輝くのだとあらためて実感し、教育の現場の片隅にいることに喜びと誇りを感じた。

仕事の上で藤岡先生とご一緒させていただいたのは七年間ほどだが、組合活動、集会・フォーラム等々で同席することが多かった。司会者に「藤岡先生、短めに発言してください」と釘を刺されながらも発言することを自らに課しているように必ず挙手……

私は退職して一二年になるが、この間の立命館大学の行く末を案じて先日開催されたフォーラムに参加した。ここでも「ちよつといいですか……」と挙手する藤岡先生がいた。

この一〇年間、立命館大学の教学理念である「平和と民主主義」が大きく揺らごうとしている学園内外にあつて、どんな会議・会場でも発言し主張する藤岡先生を見ると、ここに民主主義の原点を見た。

藤岡先生、本当ありがとうございます。これからも、ますます熱き藤岡先生でいてください。お体には十分お労り下さい。また退職者の「考える会」でお目にかかりましょう。

(元立命館国際平和ミュージアム 担当課長)

藤岡先生と私

深澤 竜人

藤岡先生のご高名はかねてより聞いておりましたが、先生のことを深く知るきっかけとなったものは、雑誌『経済』に書かれた「ミミズと地球と経済学」というエッセイであります。一読しまして、当方と考え方が非常に近接しているのを、この時感じたものです。

その「ミミズと地球と経済学」には、次のような一文があります。

「持続可能で平和な社会経済を築いていくためには、どのような質の哲学と経済学が必要なのだろうか。」

「近代の経済学は、「中略」『自分だけ、今だけ、お金だけ』というレベルで行動する『経済人モデル』が実際に成立するかのように仮定して、経済理論を組み立ててしまった。」

「私（自我・脳）が、いのちをもっているという観念論的観点から、いのち（客観的な自然のなかのいのちの流れ）が私として存在している（いのちが私を生きている）という唯物論的観点に転換することが必要なのだ。」（以上、『経済』第二五四巻、二〇〇八年七月号、一五八～一五九ページ）
これらの言明は、当方も以前より考えていたことであり、それを文字・文章にしてくれたものですから、新鮮でかつ誠にそのとおりだと感銘したものです。

それから先生とは、文章や電子メールで連絡を取り合うようになりまして、当方の書いたものな

どを見ていただき、また先生の報告を学会で伺ったり、そこで質問させていただいたり、気さくに交誼してくださったのはありがたいかぎりであります。

その後の先生のご報告や著作物を拝読いたしますと、やはり上記三者のご見解が折に触れて繰り返されており、その見解は著作物他様々なものに通底され、さらにそれらを発展させられているのを、そこに見たものです。例えば、「エコ社会経済学」の創造、「半農半X家族」の形成、等々がその一部であり、これらの訴えがまた当方の意向と実践活動にまさに一致しているものであったのは驚きです。

かように問題意識とともに実践活動が非常に近接している、とは言え、当方としてはさらに具体的な一市民・一消費者のレベルでできることは何か、それを探求し、またそれを学術的にまた実際の生活の中で実行実践していく姿勢を取っておりました。おりしもそれを、立教大学で開かれました経済理論学会第五九回大会（二〇一一年一〇月）の「環境の部」の分科会で報告することになり、その時先生にはコメントーターを引き受けていただいたのです。事前の打ち合わせなど一切なく報告に臨み、こちらからの報告としては上手くいったかなと思つて報告を終えた瞬間、先生から割れんばかりの大きな拍手をいただきましたことは、驚いたとともに、今はうれしい思い出となっております。

先生とはこれからまさに、上で取り上げた共通の論題そして実践活動としての「エコ社会経済学」の創造、「半農半X家族」の形成、等々で、ご意見を承り、また当方の活動報告・執筆物にて議論

を交わすこととなると思います。どうぞ先生、これからも今までと同じく、よろしくお願い致します。

(明治大学兼任講師・山梨学院大学非常勤講師、「半農半X」実践・研究者)

定年退職後に学んで

福田俊一郎

私は工業高校機械科を卒業して京都の繊維機械メーカーに就職しました。主に設計課で約四〇年間働いた後、その会社を定年退職し、その後草津の鉄工所で第二の職場として現役時代の経験を生かして再び働く機会に恵まれました。そこで三年間働いて退職し、翌一九九九年立命館大学に社会人学生として入学しました。大学ではゼミ及び卒業論文で藤岡先生に三年間お世話になっていきます。

ゼミで先生は、学生に自ら本を読み、調査し考えて自分の意見を述べる力を付ける事を主にした指導をされましたが、ともすれば現役生はこれらを社会人の我々に頼ろうとするところもありました。学生も忙しい、一方社会人はこれらの事について実社会で一定の経験があつて、頼りがいがあると思われていたのでしょうか。

今振り返ると、当時の先生のテーマはこれから先の世界を考えたものであつたなあと改めて思い



天橋立へのゼミ旅行で、後列右端が福田さん

ます。二回生で最初のゼミで与えられたテーマは「グローバル経済という怪物」と「それでも新資本主義についていくか」という二つの本を読んで考えることをレポートにするものでした。当時私は読んだ後、感想、意見を書いたままでしたが、今のアメリカを見ると世の中全ての物やシステムがビジネス即ち金儲けの対象で、徹底した競争社会は国民の間で1%の勝者と99%の敗者を作り出し、TPPでその思想を世界中に広めようとしている。一方日本は同じ資本主義でも例えば東北地震で被災した企業を

同業者が設備や人を全く無償で提供して再建に協力している。これらの現実をどう考えるか、その事について課題を与えておられたのだと思っています。

翌年(二〇〇一年)三回生の時アメリカで同時多発テロが発生しました。先生は平和学も担当されており、ゼミで急遽テロについて討議がなされました。テロは憎悪が激しい中で力関係が対等でない(圧倒的に不利な)状況で生まれる、日本でも過去にあった、忠臣蔵などは完全なテロであると述べられました。日本人の多くは心情的に仇討ちを果たした四十七士に同情的であるのに対して極めて冷静な見方をされておられるものだと思います。その後アメリカはテロ撲滅を大

義名分にしてアフガニスタンのみならずイラクまでも攻撃しましたが、それは全く根拠の無いもので後味の悪い結果で終わっています。更に専門家の分析によれば航空機の衝突による火災ではビルはあの様な崩れ方は絶対に起こらない、人為的な他の何者かの関わりが感じ取れる。現にあのビルの崩れ落ちる映像はその後どのマスコミも一切放映していない、放映させない圧力があると推定出来る。不可解な事がいっぱいあり、真相究明が絶対に必要であるとのことでした（この件については最近、先生の授業の一部を一般公開されたので、聴きに行ってみました）。こうして見てみると藤岡先生の授業は、その内容が今の社会を真剣に考えさせられるテーマだったと思っています。四回生で卒業論文も藤岡先生にご指導いただきました。私は「グローバル時代における知的所有権のありかた」について書きました。いい評価をいただけて光栄に思います。

これからも世界の人々とともに活動を

藤井 悦子

京都市中京区在住の藤井悦子と申します。季刊雑誌『アジェンダ―未来への課題』を発行しております。雑誌ではいろんな社会問題を発信しているのですが、なかでも、多くの人間の命や生活を破壊する「戦争」や「原発」の問題に強い関心を持っています。そして、富のために戦争をしたり、

企業の維持のためにあれほどの被害を出す原発を再稼動したり、労働者を生活できないような低賃金で働かせたりする社会のあり方を、何とかできないものかと思うのですが、何をしたらいいか思案する毎日です。

藤岡先生から「ぜひ一文を」とのお声をかけていただき、「はて、先生に初めてお目にかかったのはいつだったかな?」と思い返してみたのですが、よく考えてみると、私が藤岡先生のことを初めて知ったのは、直接お会いするずっと前、一九九三年に先生が青木書店から出された『サンベルト 米国南部 分極化の構図』という本を読んだ時でした。九二年に黒人差別を告発する「ロス暴動」が起きて、さらに全米の多くの大都市に非常事態宣言が出され、いまだ黒人の失業率が非常に高いことを知って、「なぜこういう事件が起きるのだろうか? 米国の経済構造はどうなっているんだろう?」という疑問から、読んでみようと思ったのでした。もはや詳しい感想はとも書けませんが、米国の巨大な軍産複合体のあり方が印象的だったことをおぼえています。

その先生と実際にお話したのは、自衛隊が米国と一体になってミサイル防衛導入を進め、実戦配備しつつあった二〇〇九年春、名古屋での先生の講演会でした。そこで先生から「韓国で核兵器や宇宙軍拡に反対する世界の活動家たちがあつまる会議があるから行きませんか」とのお誘いがあり、日本各地から集まった一〇数人の人々とともに、四月にソウルで行われた国際会議と、巨大な軍事基地が集中されようとしている平澤（ピョンテク）でのフィールドワークに参加したのです。

私は海外で国際会議に参加するのは初めてで、それ自体も印象深かったのですが、それ以上にイ

ンパクトがあつたのは、藤岡先生のキャラクターだったように思います。交流会はもちろん、会議やシンポジウムで難しい説明をする際でさえも、常に独特の明るくひょうきなトーンでジョークが飛び出す。先生の著書のトーンとはちよつとしたギャップがありますよね？ いろんな国の活動家の皆さんも藤岡先生にすごく親しみを感じている様子で、皆さん、にこにこ。世界の多くの人々と一緒に活動できる方なんだと、強い印象を受けました。

その後何度か声をかけていただいて日本での企画をご一緒したり、寄稿をお願いしたりしてきました。先生の行動範囲はグローバルで、企画も多彩で、あまり考えたことのないことを考える機会が多かったと感じます。これからもそのお人柄で、世界の多くの人々とともに活動を続けてくださることを期待しております。

（季刊雑誌「アジェンダ―未来への課題」編集部員）

「平和」への熱い想いを抱く人

藤本 博

藤岡先生とは研究の対象地域が同じアメリカ合衆国であつたこともあり、ご著書などで多くを学ばせていただきましたが、先生が平和創造に係わる社会貢献活動をされていることに係わつて、二つの想い出がございます。

一つは、確か一五年ほど前のことでしたが、一九九〇代の末近くに前任校の愛知教育大学に勤務しておりました時に、ゼミの学生とともに立命館の「国際平和ミュージアム」訪問を計画した折に、事前に藤岡先生にご依頼し、ご案内いただくと同時に講演をお願いしたことがございます。藤岡先生のお話は、経済学の立場から軍縮と平和の関係について論ずるものでした。興味深く、大変参考になりました。ご多忙にもかかわらず、無理なお願いを聞き入れていただき、この折に藤岡先生の温かいお人柄に接することができました。

もう一つは、藤岡先生も開催にあたっての中心メンバーとして活躍され、二〇〇八年一〇月に開催された「第六回国際平和博物館会議」でお世話になりました。私は、ベトナム戦争を象徴する一九六八年の「ソンミ虐殺」とその遺産について研究しておりますが、この研究の過程で知り、現在もこの虐殺の地で貧困女性や枯れ葉剤被害者救済を中心とするベトナム民衆への人道支援活動をしているベトナム帰還米兵の「ミライ平和公園プロジェクト」(My Lai Peace Park Project)をベトナムの現地で支えているPhan Van DoさんとVuさんを、藤岡先生が窓口となり、「第六回国際平和



「第六回国際平和博物館会議」の会場 [立命館大学] でベトナムからの参加者と一緒にのスナップ。藤岡先生の右隣がDoさん。中央の女性はHuynh Ngoc Vanさん [当時、ホーチミン市にある戦争証跡博物館長]

博物館会議」に招聘いただきました。藤岡先生の御尽力で、同会議の記念シンポジウム「過去の克服と和解の空間としての平和博物館」にてパネリストとしてDoさんと私に発言の機会を設定いただき、大変感謝しております。

温かいお人柄と平和への熱い想いをもとに、平和創造に係わる社会貢献活動に携わってこられた藤岡先生に敬意を表し、今後のご活躍をご期待申し上げます。(南山大学外国語学部英米学科教員)

アメリカ人エコノミストからの期待

アン・マークセン

この二〇余年の間、藤岡 惇教授は私にとって大切な同僚でした。アメリカの南部地域を調べるために藤岡さんが米国に滞在されていた一九九一年にお会いしたことが、彼との出会いの最初でした。恐らく私を書いた『地域——地域空間の経済学と政治学』に関心を持たれたのでしょう。藤岡さんは、ラトガーズ大学の私の研究室のドアをノックされました。以来、私たちは親密な同僚となりました。米国南部といえは、重要だが研究の余りされていない分野なのですが、この地域の諸問題に強い関心をもつ日本の経済学者がおられることに私は驚いたものです。

藤岡先生は関心の焦点は、南部のなかでも最貧地帯のミシシッピデルタ(シエアクロッパー制に

よる綿作りの最後の保塁でありブルース音楽の発祥の地）であり、このような南部の貧困が、南部各地に広がる軍産複合体の活動、とくに核兵器産業の部品作りとどのような関係があるのか、という問題でした。当時私は、アメリカの軍産複合体についての一連の研究に着手しており、この仕事は拙編著の『ガンベルトの興隆』や『冷戦経済をどう解体するか』に結実することになりました。

これまで私は日本各地を訪れ、地域の経済開発を調査したり、各種のテーマで講演したり、日本文化を体験する活動をしてきました。訪日のたびに、藤岡さんは、私を立命館大学に招かれました。京都で公開講演会を開いていただいたこともあります。京都では立命館大学国際平和ミュージアムを見学し、多くのことを学びました。一五年戦争の複雑な真実を大学生たちに探求させるうえで、幾多の努力をなさってきたことに敬意を表します。

平和ミュージアムのことは米国でもかなり知られるようになりました。二〇一〇年には私の友人の平和活動家が、仏教徒平和基金の援助をうけて、米国原住民などの仲間とともに、京都を訪ねたことがあります。MITの都市計画論の講師であるわが友人のルイーズ・ダンロップもその一員だったので、彼女は帰国後にこう語ってくれました。「米国の最良の平和活動家のほとんどについて藤岡さんが熟知していることを知って、私はビックリしてしまいました」と。藤岡さんのような該博な知識をもった研究者が、経済学の方法を用いて若者を指導し、より良い世界を創る一助とされること、立命館の若き研究者を育てられ、藤岡さんたちの偉業を受け継ぐ人材が育つことを衷心より望むものです。

最後に付け加えたいことは、藤岡さんはじつに愉快な方で、時に「お茶目」な役をされることです。ユーモアのセンスに富むことは平和の人である証拠です。二〇年余り前にアメリカ南部のことを議論するために私のところに来られ、以来、ミュージアムや町づくりの技についての知見を私とわが家族に分ち合っていたいただいたことに感謝の意を表します。

(ミネソタ大学ハンフリー公共政策大学院、地域産業経済プロジェクト 教授)

基礎研の思い出など

増田 晃一

私はかつて税務の職場に勤務し、定年になって退職しましたが、それからすでに二十数年を経過しています。藤岡先生との交流も現役時代のことなので記憶もかなりあやしくなってきました。はないかと思っています。

私が基礎経済科学研究所（略称基礎研）と関わりを持つようになったのは一九八七年に友人に誘われて研究集会に出席して以来のことです。当時は京都近辺の関西大学や立命館大学の教室やゼミ室などで行われていたように記憶しています。当時の私は香川以外へはほとんど行ったことがなかったため会場近辺でうろろすることも多かったのですが、先生はそのような時に親切に場所を教え

て下さったり、案内して下さったりし、会議の席では発言しやすい環境を作ってくださいましたように覚えています。

私は、基礎研とかかわってから数年後に定年退職し、税経新人会の役員を引き受けたり、東京の税財政研究センターと関わりが出来たりして忙しくなり、基礎研の集会から足が遠ざかってしまったため先生とお会いする機会も殆どなくなり、現在では賀状を交換する位の交流になってしまいました。

現在の私は退職後二〇年以上経過していて、高齢者になってしまっていますので、機械の方も不得手で、パソコンもメールくらいしか利用することが出来ません。しかしメールは殆ど毎日、少なくとも数日に一回は見ることにしていますが、色々な人たちのメールに交じって、先生とその周辺の方々のやり取りや海外の方々との交流などが記録されており、大変興味深く読ませて頂いています。また、メールには中谷先生や高田さんなど基礎研の研究集会でお会いした方やかつて四国で居られた方のものもあって、懐かしく思いながら拝見するのが日課のようになっています。

恐らく先生はご退職の後も基礎研その他でのご活躍なさるものと思います。向後は健康に留意され、ご奮闘、ご指導下さいますようお願いいたします。

超越的方法と内在的方法

松井 暁

藤岡さんにお付き合いいただいたのは、私が立命館に在職した二〇〇〇年から二〇〇六年までの七年間である。特に社会経済学研究会で角田修一編『社会経済学入門』のあり方をめぐって議論したことが最も印象に残っている。

いうまでもなく藤岡さんと私は、現代の資本主義社会を批判し、それに代替する社会主義社会を指向する点では共通する。しかし、社会変革の方法という点では大きな相違を感じた。藤岡さんの方法は超越的であり、私の方法は内在的である。

最近出版した拙書『自由主義と社会主義の規範理論…価値理念のマルクスの分析』（大月書店、二〇一二年）で述べたように、K・マルクスの社会主義規範理論の特長は内在的方法にある。具体例をあげよう。彼の資本主義批判の中心は搾取論である。それは自分の身体と労働を駆使して生産したものは自分のものであるという自己所有権原理を前提にしている。しかし、これは必要に応じた分配という共産主義社会の観点からすれば、ブルジョアの原理である。マルクスはブルジョアの原理に立脚して資本主義を批判したのである。つまり、マルクスは共産主義社会の観点から超越的に資本主義社会を批判するのではなく、資本主義社会の観点から内在的にこの社会を批判したのである。そしてこの方法こそがマルクスの社会主義を他の社会主義諸派と区別する最大の特長であ

り、私自身もこの方法がもつとも有効であると考えている。

これに対して藤岡さんの社会変革論は超越的である。「社会経済学入門」をめぐる研究会で彼が力説したのは、人間と自然の一体性、人間本性の利他性、絶対平和主義であった。それ自体は共産主義社会の理念として妥当である。しかし、超越的方法では、資本主義社会の諸個人の意識がこの社会の経済構造に制約されていることが重視されず、この社会に生きる人々の意識を一挙に変革することが追求される。

超越的方法の一つの動機は、マルクス主義の内在的方法への反省にある。これは現在ではコミュニケーションアンとして著名なC・テイラーが新左翼として活動していたときに強調していた論点である。彼によれば、今日のマルクス主義者は目的と手段を分離した結果、自らが手段の追求に耽溺しまい、最終的には「目的のためには手段を選ばず」という権謀術数主義に陥ってしまった。

私も内在的方法の欠陥については、十分注意を払うべきであると考えている。しかし、唯物論の立場からすれば、われわれの意識がブルジョア的であることは必然であり、それをコミュニケーションのように道德教育によって改造しようとしても無理である。むしろ内在的方法がどのような場面で否定的な現象をもたらすのかを絶えず点検していくことこそが、今日の社会主義者の課題である。

このように社会変革の方法について、藤岡さんと私の考えは大きく異なるが、内在的方法の陥りがちな失敗に対する警鐘を鳴らし続けている点については、絶えず参照されるべき思想であると思

う。今後とも藤岡さんのご活躍を祈念いたします。

(専修大学教員)

期待にお応えできなくて (笑)

松尾 匡

前任校の久留米大学経済学部は、ずいぶん地域貢献に熱心で、NPOや協同組合などのまちづくりの取り組みを応援する仕事にかり出されました。自分自身、新しい社会システムは草の根から育っていくしかないと思っていましたから、こき使われているような顔をして、実はかなり楽しんでやってきましたのが真相です。

おカネにしても権力にしても、一人一人の生身の人間の暮らしの事情を離れて一人歩きしてしまうことが諸悪の根源です。こんなことのない新しい社会システムは、各自が生身の人間の暮らしの事情に基づいてコントロールできる、手の届くところから作っていくしかありません。

こうして、市民による参加型の草の根経済を作り上げていくお手伝いをしてきたのですが、さすがに手を広げすぎて、大学でも最盛期は二ヶ月に一回くらいシンポジウムが続いたりして、あんまり本来の理論経済学の研究から遠ざかりすぎたと感じていた頃に、立命館大学のスタッフから引きがあって移籍しました。

その移籍を直前にひかえた三月に、藤岡先生と学会で顔を合わせました。先生は私を見つけるや、草津近辺ではあんなこともこんなこともやっている、地元のみちづくりの取組みについて一通りおっしゃって、「期待してます」って。また沢山仕事が降ってきたらかえりませんから、「いやあ、長距離通勤で、当分慣れるまで大変ですから…」と笑ってごまかしました。

結局立命館ではなんとか逃げ切っている感じで、期待にお応えできなくてすみません(笑)。もっとも、移籍したとたん出版社から目をつけられて、やっぱり理論経済学の研究をする暇なんてあまりなくて、結局時間に追われる暮らしになってしまいましたけど。

それにしても、移籍したのがちょうどリーマンショック直前で、とんと地元のみちから足が遠ざかってしまいました。その後の状況は本当に大変です。十年以上にわたる地方経済の苦境のなかで、頑張って頑張っている取り組んで、やっと光明が見えてきたかというときにまたどん底に叩き込まれて…。

NPOも労働者自主管理企業もコミュニティビジネスも、全体が不況では困難があまりに多いです。百円マックで宿をとる若者たちについての新聞記事が話題になりましたが、現在の貧困の広がりには、想像を絶するものがあります。どんなに多くの人が不況で苦しんでいるかを読み損なったことが、民主党や革新系の敗北の原因だったと思います。

私は以前から、デフレ不況では、穏やかなインフレ目標を定めて無からおカネを作って使うのが

有効な景気対策と言ってきました。そうすれば、民主党政権は、財源を気にせず増税もなしに、子ども手当も高校無償も公約をみんな実現でき、福祉も充実でき、しかも景気が好くなつて雇用が増えたのに。チャンスを棒に振つて、この方法を安倍さんにゼネコンのために使わせて、しかも好況になる手柄を独占させるなんて。

戦前ドイツの社民党が均衡財政にこだわって大不況を悪化させ、それを批判してできたヒトラー政権が、大規模な公共事業で完全雇用を実現して、国民から絶大な支持を得た歴史を思い出すこのごろです。

(立命館大学経済学部教授)

シカクい頭をマルくする

松田 文雄

シカクい頭をマルくする。どこかの教育ソフトのキャチフレーズのような体験を、人間発達ゼミに参加するとしばしば経験します。

私が人間発達ゼミに参加し始めてはや一〇年ぐらいになりますが、最初に私の四角い頭を丸くさせられたのは、藤岡先生がアメリカ、日本、ヨーロッパの社会の特徴を三つの円が重なった図で説明されたときでした。

この三つの円とは、一つは社会（コミュニティ、家族）、二つ目は政治（国家・自治体）、三つ目は経済（市場、企業）を現している、それがお互いに少しずつ重なり合っています。これが現代の人間社会のあり方をしめしているということです。

アメリカ社会はこのなかで経済という円のパワーが大きく、社会や政治などの円に影響を及ぼしている。日本の場合、政治という円のパワーが大きい。そして、ヨーロッパでは社会という円のパワーが大きいという説明でした。

たしかにアメリカでは多国籍企業のトップの要求がストレートに政治や軍事に影響しているし、日本では「官僚主導」という言葉があるように「官」の指導力が強い。もちろん、多くの場合、「官」といっても財界の要求を政策化するわけですが、「官」の立場として財界の方ばかりをむいているわけにもいかず、社会政策的なこともとりくまざるをえない側面があります。

そして、ヨーロッパ。まだまだなじみが少ないのですが、協同組合や労働組合、NPO、地域コミュニティの影響が大きく、それが国の政策にも大きく反映していると聞きます。アメリカも、日本も、ヨーロッパも一律に「資本主義社会だ」と断じてきたわたしには、今まで見ていなかった分析の眼を持つことができたように思います。

最近の藤岡先生の論文では、この三つの円を取り囲んでもう一つ大きな円が描かれています。それは、「大地・自然」の円です。社会、政治、経済に分かれている円ももとは一つの円であり、それは大地と自然に根差しているという考え方です。しかし現代は、この三つの円がいびつな関係

となり、どんどん経済の力ばかりが強くなっています。この現状を打開していくために、大地に根ざしてこの三つの円をもっと高い次元で統合していこうというのが最近の藤岡先生の主張です。

また、「空想的〇〇主義か」と思う方もいるかもしれませんが、最近の地方での様々な街づくりの動き、市民によるエネルギーの地産地消の動き、農業の六次産業化の動きなどをみてみると、地域で静かに新たな高次元の統合がはじまっているような気がしてなりません。中央の政治の動きを見てみると目を覆いたくなるような絶望的気分になります。こうした地域の動きを見ていると、未来に希望がもてるような気がします。

シカクい頭をマルクする。四角いマルクスが、丸いマルクスになる。

お後がよろしいようで。

(基礎研・人間発達ゼミ)

藤岡經典の確立を

松本 朗

一九九〇年の愛媛大学赴任後、思うところもあって基礎研の活動に参加した。一九九四年の『経済科学通信』七五号に初めて寄稿しているので、その前後あたりから基礎研の研究集会に出席していたはずで、その時期にはすでに藤岡先生と面識はあったと思う。お名前、お人柄はわかっていた

と思うので、ほぼ間違いないと思う。ただ、藤岡先生と直接親しく接したと明確に言えるのは、基礎経済科学研究所の春の研究集会が愛媛大学で行われた時（二〇〇二年三月）だったのではないだろうか。特に、南予明浜の無茶々園へのエクスカージョンを含めて、エコロジカルを希求する京都の公家さんのような先生を知る良い機会であった。

先生の研究の紹介や評価は、それにふさわしい方が行っておられると思う。ここで、私なりの独断と偏見に満ち満ちた思いのようなものを書いておこう。藤岡先生のご専門はアメリカ経済論であり、アメリカ独占資本の歴史的研究が出発点であった。ただ、少なくとも私が知己を得た段階では、平和の経済学とエコロジカルな経済学を壮大に展開する研究者になっていた。一方で、原子力規制委員会が安全基準にテロ対策を入れざるを得なくなった状況を見ると、藤岡理論がただ壮大なものではなく、極めて現実性を持っていることをまざまざと見せつけられるのではあるが……。

しかし、総じて言えば、あまりにもスケールの大きいためか、はたまた博覧強記の故か、聴衆としての私はしばしばフォロー困難に陥る。その結果、空想論か観念論を疑いたくなることもある。禅問答のような深淵さを突きつけられるとき、藤岡理論が一種の宗教理論のようにも思える時があるのである。そこで、退職を迎えられるこの時に、ぜひ一言、お願いしたいことがある。この際、体系的な藤岡教の経典をまとめていただきたい。きつと、さらに多くの藤岡信者が現れ、社会変革の一翼を担っていくに相違ないからである。かく言う私もその一人かもしれないのである。

（立命館大学経済学部）

アッチャン先生への断想

三浦 正行

立命館大学においては一番の「教養人」であるかもしれない藤岡先生。それは、学識豊かで、幅広い教養を持ち合わせていると言う意味でもそうだが、その「教養力」を、大学における研究・教育レベルで、豊かに展開したいという強い意志と希望を抱いていたという意味においてこそ、相応しいものだと言える。もちろん、その範囲は、大学内に留まるものではなく、学外での様々な活動を通して、より一層強固なものとなっている。

公式・非公式さまざまな会議や研究会でずい分とご一緒する機会があったが、「大学における教養科目の充実」に関して、物怖じすることもなく発言する姿に、かなりの頻度で接したことなどが思い起こされる。

専門の経済学に「平和学」を連結させた「平和の経済学」などは、藤岡先生の真骨頂といえるものだろう。「学校保健・教育保健」を専門とする私も、「平和であればこそその健康」や「地球規模での健康観」など、かなり専門領域を拡げたところに問題関心をもっているのだが、藤岡先生のそれは、地球規模を超えて、宇宙にまで拡大し私など足元にも及ばない程の拡がりと深みをもっている。今日の、「宇宙開発競争」のもとで地球周辺の宇宙空間を飛び交う宇宙船や人工衛星など、「平和目的」から「軍事目的」まで、科学の粋を究めた領域での利用のされ方一つとってみても、かなり

際どい部分にまで、学問・研究は突き進んできている。「狭く閉じた専門力量だけでなく、実地で学びながら、開かれた教養の習得を学生時代に」と、藤岡先生は事あるごとに叫んでいたように思える。

「平和と民主主義」を教学理念とする立命館大学にあつては、殊の外、「平和学」の構築は必須であるし、藤岡先生の思いは、立命館のそうした「哲学」にも一致するものである。

ところで、私は、二〇〇七年度に一年間の海外研修の機会を得て、その大半をカナダ・バンクーバー近郊で過ごすことがあつた。その折に、「バンクーバー九条の会」に所属する日本人・日系人の方々には、いろいろな集まりにご一緒させていただいた。現在も、その方々の活動は、配信されるメールで知ることが出来るのだが、そのきっかけを作ってくれたのが藤岡先生だった。現地で中心的に活躍する乗松聡子さんを紹介してもらっていなかつたら、そうした「グローバル」な交流にも縁がなかつたかもしれない。藤岡先生の「守備範囲」の広さに改めて感服するだけだ。

最後になつたが、藤岡先生たちが運営していた「私設学童保育所・風の子クラブ」（虹の子クラブの前身）の、スポーツ活動の手伝いをさせていたことなども懐かしく思い起こされる。

（立命館大学スポーツ健康科学部）

「未来」を知る人―「真理」の探究者

南野 泰義

藤岡先生とはじめてお会いしたのは、一九八七年頃だったと思いますが、基礎経済研究所のセミナーに参加させていただいたときです。残念ながらセミナーにはあまり参加することができず、失礼いたしました。時は流れ、あれはイラク戦争が勃発した頃だったと思いますが、米国の武力行使に反対し、平和的解決を求める署名用紙を作成し、藤岡先生のところにお持ちしたときのことです。「研究者は真理を語らねばならぬ」とのご指摘をいただいたことが思い出されます。

そして、二〇一〇年。立命館大学教職員組合において、藤岡先生とかつちりとお仕事をさせていただく機会をはじめて得ることができました。この年も役員改選がなかなか進まず苦慮しておりました。その時です。藤岡先生が二つ返事で副委員長をお引き受けくださり、総長選挙が実施される厳しい情勢の中で組合を導いてくださいました。

ここで、まず、先生にお詫びしなければなりません。それは、各種交渉の中で、再三、マイクを取り上げ、先生のご発言を止めてしまったことです。本当に申し訳ありませんでした。本来、真つ当な議論ができる状況にあれば、「大学とは」、「大学教育とは」どうあるべきなのかという核心に迫る先生のご発言は、重要な論点として議論を深めるべき内容であったと考えます。それができなかったこと、悔しく思います。今後、そうした議論が自由にできる状況を一日も早く取

り戻すことが、私たち現役教員に課せられた使命だと思っております。

いつの頃からか、当時の書記局メンバーの間で、藤岡先生は未来から来た方ではないのかという声が聴かれるようになりました。というのも、藤岡先生が、組合の会議などで、「教養教育」や「學術」の意味などに関わってご発言される内容が、私たちには、あまりにも時代を先取りした内容で、およそ現実的なものと思えませんでした。しかし、それが二か月、三か月もすると、高等教育のあり方をめぐる全国的な議論の中で、主要な論点として浮上してくるではありませんか。つまり、先生のご指摘を、今に忙殺されている私たちが理解できなかっただけであり、先生が未来を見つめる目の確かさと嗅覚を、そして未来を語る見識をお持ちであったということなのです。あらゆる課題について、「真理の探究」を貫かれる先生の姿勢は、「研究者は真理を語らねばならぬ」ということばに象徴されていると思います。道半ばの私の研究者人生において、節目節目で私に歩むべき道を指し示してくださったのが藤岡先生ではなかったかと思えます。

今後ともご指導のほど、なにとぞよろしくお願い致します。

(立命館大学国際関係学部教員)

藤岡先生の思い出

村上 達哉

藤岡先生には、基礎研学習会でお世話になりました。

「働きつつ学ぶ」ということの重要性については、日頃より認識しております。しかしながら、現実にはなかなか難しく、実際のところは、学習会等への関わり方においては、日頃の労働の気分転換や教養を深める（楽しむ）程度の側面が、私自身の中にあつた事は否定できません。

その学習会で、ある書物の報告を行った際に、藤岡先生は、私の曖昧な認識に対して、日頃の優しい印象のある先生とは違い、論理性の追及を鋭くされる事がありました。理論的な整合性や、その理論の背景の整理等、ある一つの考え方においても、しっかりと根拠や確証を持たないといけないという、学問の世界では当たり前のことを、私自身がしっかりと認識されたいことを思い出します。その時の印象は、今もなお鮮明に覚えているところであり、私自身のその後の労働生活において、随分と励みになっているところであります。

ここ最近では、学習の方はさっぱりで、自身の姿勢が問われるところですが、先生から学んだ事は、これからも私自身の行動指針として参りたいと思っております。

永い間、お疲れ様でございました。また今後ともご指導を下さいます様、お願い申し上げます。

（社会福祉施設勤務）

虹の子クラブ初代保護者会長の榮譽をたたえる

森 徹

昭和末期の京都・京北町での学童保育所の夏キャンプ。夏の日差しの下さんざん遊びまわっていた子どもたちがテントで寝静まったころから親たちの宴会が始まる。ビール・つまみが並べられ車座になって「では一年生の親から自己紹介お願いします」「えー、ご夫婦の馴れ初めは?」「出会いはどこで?」「どちらからプロポーズを?」……わが学童親子キャンプ夜の宴会に出現する「スポンの藤岡」こと藤岡父さんの新一年生保護者への容赦のないつつこみである。京都市上京区にある「共同学童保育所 虹の子クラブ」で指導員として勤めること二七年、まさに人生のすべてをここに懸けて今日に至る私であるが、その成長を支える原点にあったのは当時の保護者の方々、なかでも藤岡さんは学童の運営や運動の方向性を指し示して下さる大きな大きな存在であった。

学童設立運動を進めている我々を除外して、強引な手法で公的施設を建てようとする行政に、スポンのようにしつこく食い下がる戦闘的な姿、地域のまつりの実行委員長を快く引き受けてくださり、「何にもできませんが」といいつつ雨の中準備をする女性スタッフにさりげなく傘をかける姿、虹の子一〇周年記念誌を精力的に編纂する姿など、臉に鮮明に焼き付いている情景である。学童の会議（の後の宴会）が長引いて夜遅くなると、当時遠方から通勤していた私にさっとタクシーチケットを差し出して下さったこともいい思い出である。私にとってバブル期の唯一の恩恵で



虹の子祭りでの10周年記念誌を販売中
左から2人目が塩見全一さん、真ん中が藤岡夫人

頼もしい姿はまだまだ健在であり、スッポンのような粘り強い親たちもしっかり育ててきている。
初代会長として虹の子クラブの礎を築いた藤岡さんの精神は現在もしっかり根付き、その偉業は
未来永劫語り継がれていく事であろう。

(共同児童保育所 虹の子クラブ 指導員)

ある。その後、虹の子クラブは移転・幾人もの相棒指導員の交代・児童数の激増・補助金の獲得・児童館設置に伴う閉所の危機など幾多の紆余曲折を経て、去年盛大に三〇周年をむかえたわけであるが、代表者である保護者会長は藤岡さんを初代として現在は一八代目を数える。

かつて団塊の世代の親たちが作り上げた結束力の強い組織とは量的にも質的にも異なる現在の保護者会、夏の親子キャンプでの宴会も夫婦形態が多様化複雑化したため安易に馴れ初めを暴露し笑いにするようなものではなくなった。とはいえ、子どもが寝た後、子ども以上に元気ににぎやかに杯を酌み交わし天下国家を語り合う(ウソです)親達のパワフルで

生きた仏様のような先生

森下 美穂

藤岡先生、このたびはご定年退職おめでとうございます。私は博士課程前期の学生として二〇〇四年から二年間、先生には修士論文のご指導をしていただき大変お世話になりました。当時の私は体調が思わしくない時期もあり、先生には大変迷惑をかけたのではないかと思います。しかし心優しい気配りのある先生のご理解と手助けのおかげもあり、無事博士課程前期を修了することができました。

先生からは勉学のみならず、その他多くのことを学ばせていただきました。例えば「スローライフ」という生き方です。「体調の悪いときはゆっくり休んでください」という言葉にこれまで何度救われたか分かりません。先生と話すうちに、完璧主義に徹するあまり、私自身がやりすぎていたのではないかと思うようになりました。人生一生、全力疾走で走ることはできないのです。先生はそのことに気づかせてくれました。さらに、体調の悪いときは休んでくださいと、先生は自身の研究室に簡易ベッドまで用意してくださりました。このような心配りをしていただき、先生の優しさに触れ、感謝の言葉も尽くせません。

また先生から薦められて読んだシューマッハーの『スモール イズ ビューティフル―人間中心の経済学』は今も私の手元において、時々読み返しています。現在の過剰生産、過剰流通、過剰消

費、過剰廃棄の行き着く先は環境破壊、資源争奪戦争等、地球生命全体の崩壊への悪循環に他なりません。シューマツハー、そして藤岡先生が考える、非暴力、自然、自然と人間の調和等は私も共感させられました。そして真の平和とは単に戦争や暴力がないことではなく、人間一人ひとりの心の内が安定し、安らげる状態であることを知りました。先生は経済学や平和学を通し、人間として生きる意味を教えてくださいました。

色々な体験、勉強、成長をさせていただき、私の人生において大変影響を与えていただいた数少ないお一人で、藤岡先生には大変感謝しております。今後も、どうぞお体をおいたわり、ますますのご活躍を心よりお祈りいたします。

(大学院藤岡ゼミの元院生、米国在住)

いつかサステイナブルな小さな村づくりを

森田 清和

一般企業で一九年と半年間務めた後、何故か百姓に！特に農業を志したわけではなく、農のあつる暮らしに憧れたわけでもなく、出来れば農業で地域活性を図りたいと思ひ、何かそんな仕事で世間にお役に立てることはないかと現代社会の農業を学ぶ中、「(このままでは駄目だ)農を変えたい」と思うに至り、無農薬・無化学肥料でトマトを栽培する傍ら、農家仲間と環境保全資源循環型農業

を支える会社を起業、自ら肥料や飼料を製造し、農薬や化学肥料を一切使わない農作物の栽培方法の指導や食品加工（味噌等）を行い、今年で早九年を迎えます。

農は不思議な世界で、生かされている人間の無力感を無言で教えてくれます。天候の変化に一喜一憂する人間に対して、決して移動することが出来ない植物たちは常に健気に耐えています。性能が良い機械は作れても、いまだに蠅一匹作れないのが人間です。季節を肌で感じ、自らの命を捨てて、子孫の繁栄を願う、生命の本質を植物たちはやさしく教えてくれます。最近とみに、グローバルズムは果たして誰のためになるのか、機械化は誰のためになるのか、効率化は…、もしかしたら私たちは大きな間違いを犯しているのではないかと思っています。

藤岡先生とは基礎経済科学研究所での勉強会が出逢いで、その後三年間先生の担当される『近江・

草津論（BK Cの教養科目特殊講義）』の講師をさせて頂きました。楽しみは、講義終了後の忘年会で、そのため講義は毎年一二月下旬の六時限目にしていただき、先生にいつもおごっていただき



ました（先生、ありがとうございました）。また、『サティシユさんと交流する関西の会（関西シユーマツハ友の会）』にも参加させていただき、いつも楽しい時間を過ごさせていただきました。

実は私は立命館大学の経済学部出身で、もう少し学生時代に学んでいれば・新自由主義や・グローバリズムについて先生と議論することが出来たのに、学生時代にほとんど勉強しなかったことが未だに悔やまれてなりません。

先生とは、いつか京都か滋賀の地でサステイナブルな小さな村づくりがしてみたいと思っています。核にはストローベイルハウスがあり、メタン発酵でエネルギーが賄えるようにしたいと思います。当然、周辺には農薬や化学肥料に頼らない農作物が元気に育ち、いつも笑顔でゲストのみなさんを迎えてくれます。戦前のような暮らしを現代社会で再現することはあまり現実的ではありません、しかし大切な資源が循環し、それぞれの「勿体」が生かされた暮らしや食は、私たちに大切な時間の流れを再び教えてくれることになるでしょう。小さな中で簡素で手間を惜しまない暮らし（当然非暴力でなくてはなりません）を具現化し、みなさんに体感していただくことが私の夢です。先生、いろいろありがとうございました。お疲れ様です、これからも何卒よろしく願っています。

（有限会社 サン愛ブレンド ユリサファーム）

これからの社会をどうすべきか

八尾 信光

現在の世界はどのように変化しつつあるのか、その中で日本はどのような位置にあり、何ができるのかを明確にしたいと思って昨年、下記のような拙著を出しました。

『21世紀の世界経済と日本―一九五〇～二〇五〇年の長期展望と課題―』（晃洋書房、二〇一二年二月）

アンガス・マディソンが遺してくれた「世界経済史統計」（西暦一～二〇〇八年、二〇一〇年三月発表の最終版）と、予測値を含むIMFの「世界経済統計」（一九八〇～二〇一六年）や「国連人口推計」（一九五〇～二〇五〇年）などを使って世界経済の長期趨勢に関する多数の統計グラフを示し、それらに基づいてこれからの展望と課題を論じました。

世界中の国の実質経済規模と実質平均所得、それらの増大に伴う少子高齢化の長期趨勢を見ると、二一世紀の世界経済については次のようなことが言えそうです。

①従来の「先進諸国」は、一九六〇～二〇一〇年の五〇年間に一〇年ごとの平均成長率を五・一
↓一・四％に低下させてきたから、二〇五〇年ごろまでに順次ゼロ成長社会に向かう。

②それ以外のすべての国々（拙著では「新興諸国」と総称）での二〇一〇年代の平均成長率は六％程度になり、二〇五〇年ごろまでにはその実質経済規模が世界経済の八割以上を占める時代に

向かう。

③ただし「新興諸国」は、実質平均所得で見て約五〇年遅れながら高度成長長期以降の日本を追いかけているから、その平均経済成長率は二〇一〇～二〇五〇年の間には六・二↓二・三％程度に低下し、世界全体の経済成長率も四・五↓一・九％程度に低下すると見込まれる。

長期展望からすると、二一世紀の前半期は、「新興諸国」が「先進諸国」を追って経済的な富裕化を実現し、それと並行して民主的な福祉社会を形成すべき時代、「先進諸国」は二〇世紀後半に達成した経済的富裕化を基礎に、誰もが安心して人間らしく暮らせる成熟した福祉社会を実現すべき時代、二一世紀の後半はそれを全世界で実現すべき時代となります。

簡単に言えば、一九世紀以来の資本主義的経済発展によって達成された成果と、その矛盾や弊害を克服する上で最も重要な役割を果たす民主主義の普及と拡充や強化に基づいて、社会の目標やあり方を市民本位の福祉社会に改めていくのが、二一世紀の課題でしょう。

日本は、戦後の民主改革を基礎に復興と高度成長を実現し、その後は中成長↓低成長を経て少子高齢化とゼロ成長に向かう時代の先頭に位置しています。北欧諸国の先進例も参考にしながら、創意工夫を加えつつ成熟した福祉社会を実現すれば、それは日本の後を追う国々の貴重な先例となるでしょう。

藤岡さんと最初に一緒にさせていただいたのは、一九七一年に丹後半島の久美浜で行われた（関西大学院生）「夏の学校」の時からと思われまます。以後四二年の間に各種の学会など様々な所で大変

お世話になりました。これからもどうぞお元気で大活躍されますように。

(鹿児島国際大学教授)

アッチャン先生の一言…国際会議で爆笑

山根 和代

藤岡先生との出会いは、国際平和ミュージアムです。現在私は立命館大学で平和学を担当し、国際平和ミュージアムにも関わっています。国際平和ミュージアムは、平和博物館国際会議をこれまで二回開催し、海外でも国内でも平和博物館関係者や平和教育者によく知られています。一九九八年に第三回平和博物館国際会議が開催され、その時始めて日本の平和博物館・平和資料館の国内ネットワークが作られました。それまで私は高知大学で教えながら、高知市にある平和資料館「草の家」においてボランティアで国際交流を担当し、海外の平和博物館のニュースを和訳して紹介し、また「草の家」の活動を英文で海外に発信していました。国際会議で「平和のための博物館・市民ネットワーク」が作られると、その通信を発行することになりました。そこである日藤岡先生から、その通信の編集をしないかというお電話がありました。これがきっかけで私の人生はすっかり狂って、いえ変わってしまいました。海外の平和博物館のニュースの紹介はそれまでしていましたが、全国各地の平和博物館のニュースはかなりあります。現在「ミューズ」と英文通信“Muse”の編集

は安斎育郎先生（立命館大学名誉教授で国際平和ミュージアム名誉館長）と山辺昌彦氏（東京空襲被災資料センター研究員）と三人で行い、翻訳は谷川佳子さんたちといっしょにしています。（<http://www.tokyo-sensai.net/>で読む）とができます）この通信を通して海外の平和博物館関係者と知り合い、現在 International Network of Museums for Peace (<http://immpnet/>) の理事を安斎先生といっしょにやっています。藤岡先生からのお電話がなかったら、現在私はこのような活動をしていなかったと思います。

二〇〇八年に平和博物館国際会議が国際平和ミュージアムで開催された際、数百人の参加者が集まりました。余興として海外の手品師がマジックをしていたときのことです。手品師が「この風船をご覧ください。何が一番怖いと思いますか？」と聴衆に質問したとき、アッチャン先生曰く、*needle and my wife*…まじめな表情で発言されたのですが、このユーモアに参加者は爆笑でした。これはほんのひとつのエピソードです。

またアッチャン先生は、学生やアメリカン大学（ワシントンDCにある）の学生を一九九五年以来ずっと広島と長崎へ引率されていますが、一昨年から私の担当している Peace Studies Seminar の学生も参加しています。あるイギリス人の留学生の感想ですが、「最初は日米の学生の交流で内容に限界があるかと思つたが、実に内容豊かで学ぶことが非常に多く参加して本当に良かった」と述べていました。このクラスはアッチャン先生が退職されても続くと知り、ほっとしています。

私が知っているアッチャン先生は、国際平和ミュージアムと広島・長崎への研修旅行を通してで

すが、その豊かな教育内容や平和活動には頭が下がります。

退職後は少しゆっくりしていただきながら、いろいろとご指導をお願いしたいと考えています。

(立命館大学准教授)

ワールドフレンドシップセンターでの出会い

山根美智子

広島の世界 Friendship Center の理事長をしています山根美智子と申します。昨年の五月に初めての女性理事長誕生となりました。WFC は原爆投下二〇年後、アメリカ人のバーバラ・レイノルズによって一九六五年に創立されました。世界中からのゲストが WFC に宿泊して、被爆者の体験を聞き、平和公園内の碑めぐりなどを通して、*“No More Hiroshima. No More Wars.”* の願いを私達と共有しています。福島原発事故以来、ゲストの数が未だに減少しているのは、とても残念なことです。核兵器や原発がなくならない今日、もっと多くの人が広島を訪れ、核の非人道性を学んでほしいと思います。

藤岡先生と初めてお会いしたのは、WFC 恒例の八月六日の被爆証言を聞く集会でした。立命館大学とアメリカン大学の学生たちが一緒でした。ワシントンDC のアメリカン大学の近くのパーク

シャーと言うアパートに夫と二人で一年間住んでいたの、つい懐かしくなって話しかけると、藤岡先生も住んでおられたと聞いて、急に親しみを感じました。それからは、毎年七月頃にいつもメールで、WFCの行事予定を聞かれるようになり、お会いできるのが楽しみになりました。

WFCの理事の中に、一九五五年に原爆乙女としてニューヨークに治療に行き、その後証言活動を精力的にしていた山岡ミチコさんがいます。二〇〇六年に脳梗塞で倒れ、一時奇跡的に回復していたのですが、今は口から物を食べることもできず寝たきりになっています。藤岡先生は、いつも山岡さんの事を気にかけてくださり、お見舞いにも行ってくださいました。その優しい人柄が、話し方、笑顔にも表れています。どれだけ学生に尊敬され慕われているかは、容易に想像が付きません。

四月からは特別任用教授として、引き続き教育に携われるとのことですが、八月には、近藤絃子さんや学生たちと広島に来られ、またお会いできることを楽しみにしています。



左からゲストのケニー・フリース教授と山岡ミチコさんと私

“happy lunch”の主―国際平和セミナーでの出会い

山本美穂子

私は高校で不登校を経験し、通信制の高校卒業を経て、二〇〇七年に社会人入試で立命館大学に入学しました。入学した年の夏、「広島・長崎国際平和セミナー」を指導される藤岡先生と出会いました。そのセミナーは、立命館大学がアメリカン大学と共催で一九九五年から実施しているものです。入学前に、海外援助のNGOでボランティアをしたこともあり、平和や国際問題について学びたいと思っていた頃、セミナー参加募集のチラシを見つけました。

私は文学部の学生でしたので、経済学部の藤岡先生とは、そのセミナーに参加して初めてお目にかかりました。京都から始まる一〇日間のセミナーは、アメリカン大学生と共に広島・長崎を訪ねます。行く先々で被爆された方々の証言を聞きながら、現在の日米の核政策に関するさまざまな講義を受けました。セミナーでは、被爆証言を聞いたり、暑い夏の時期で体力も奪われたりと、心身辛くなる場面もあります。それでも決して悲観的でないセミナーとならないのは、藤岡先生の「“happy lunch”にしましょう」の声にありました。私たちを現実の世界へと呼び戻すようなその声は、疲れた参加者の顔を笑顔にして、ほっと一息つく時間を与えてくださいました。それはまた、感情的なままの議論ではなく、冷静で合理的な議論へと向かうよう、方向転換を呼びかける声にもなっていたと思います。

セミナーには、過年度参加者も多く訪ねてきます。初めてセミナーに参加した時には、「去年の参加者が訪ねてきている」と聞いて少し不思議でしたが、物腰柔らかな藤岡先生が創り出される、家族的な雰囲気にあるのではと、セミナーを通して思うようになりました。長年交流を続けてこられた、アメリカン大学のピーター・カズニツク先生や、セミナーを共に旅される、被爆者の近藤絃子さんとの掛け合いを見ても、セミナーに「帰ってくる」ことの理由が納得できました。息のあった素敵な三人の先生方のもとで、参加した学生同士も絆を強くしました。セミナー後も度々みんなで会っていたのは、温かい先生方の仲の良さが学生にも反映されたからではと思います。

藤岡先生は、セミナー参加後も国際交流の企画や勉強会等へ、たくさん誘ってくださいました。もちろん私も、セミナーには翌年以降も一部参加し、毎年の顔触れは変わっても、変わらない「家族的な」セミナーと再会する機会を頂きました。種々のお知らせを頂いて、時々お目にかかりながら、藤岡先生は、「あなたとはどこでお会いしたでしょうか」と、なかなか名前を覚えて頂けないこともありました。一九九五年から続くセミナーですから、参加した学生も多いのは当然です。心の片隅では少し残念に思いながら、憎めないお人柄、学生の意見を尊重した、決して上からではないご指導等、いわゆる大学教授らしくない藤岡先生との出会いは、私にとっても貴重なものでした。

二〇一二年に立命館大学を卒業して、私は韓国光州の「五・一八記念財団」でインターンを経験しました。財団は、一九八〇年五月一日に始まった、「五・一八民主化運動」を記念して、被害者・

遺族・光州市民が設立した財団です。日本では光州事件として知られる「五・一八民主化運動」ですが、実際には民主化を求めた市民の運動であったと、韓国では認識されています。一九六〇年代から軍事独裁政権が続いた韓国では、一九七九年に朴正熙大統領が暗殺されて、民主化への期待が高まっていました。軍事クーデターが起こり、各地の民主化運動は弾圧されていきました。光州のある全羅南道は、金大中を輩出し、歴史的にも抵抗運動が盛んな土地ですから、始めは「五・一八民主化運動」も、「金大中にそそのかされた『暴徒による暴動』」と言われていたと聞きます。後に真実が明るみになるにつれ、市民による民主化運動であると、「五・一八民主化運動」の呼び方を勝ち取ったそうです。

約一年間というインターン生活でも、いろいろな方との出会いがありました。慶尚南道陝川郡で反核・平和大会が行われた際には、在韓の韓国人原爆被害者の方々とも初めてお会いすることができました。ご高齢の被爆者を目の前に、広島・長崎国際平和セミナーでの体験が、多く思い出されました。セミナーは、韓国人・中国人留学生が参加する年もあり、日米関係だけでなく、アジアを含めた広い視野で太平洋戦争を捉えなおすことができます。セミナーでは実現が難しいこともあるかもしれませんが、日本の平和・反核運動で、日本の被爆者だけでなく、例えば韓国のような近い国におられる、在外被爆者との交流がもつと行われればと思います。そのような思いもあり、近現代の日韓関係を学ぶため、今はソウルにある大学院で勉強しています。

立命館大学に入学し、すぐに藤岡先生との出会いに恵まれた私は、大学四年間に視野を広げるさ

さまざまな機会を頂けて、本当に幸運でした。セミナーで先生との出会いがなければ、きっと私の進路も違っていただろうと思います。毎年おじゃましていたセミナーへは、これまでのように行けるかわかりませんが、セミナーの先頭で、お孫さんのスノーピーのタオルを旗に掲げた藤岡先生に会いに行きたいと思います。先生なしでは、セミナーはその姿形を変えてしまいます。難しい議論を、*happy lunch*の声が温かく包むセミナーであって欲しい。そのためにも、どうかお体に気をつけて、スノーピーの旗でセミナーを先導して頂きたいと思います。

朗らかに楽しみながら事を成し遂げる信念の人

横田 数弘

楽しみつつ、前向きに、大真面目にさまざまな活動に取り組んでいる藤岡さん。いつも朗らかで、周りを元気に幸せにしようとする人、困難な状況下でも爽やかに軽やかに率先垂範して、多くの人を巻き込んで事を成し遂げてしまう信念の人、探究心と好奇心のかたまりで、専門研究者としても教育実践者としても天分を十二分に発揮している稀有の人——。定年退職を記念する文集なので、ちよっとは「盛って」「膨らませて」書いておりますが、率直な偽らざる気持ちです。決して、誉め殺しではありません。

最初にお話ししたのはいつだったのか、定かには思い出せませんが、経済学教育学会（現在は経済教育学会に改称）で出会ったことは間違いありません。一九九四年秋の高知大学大会から一九九五年秋の中京大学大会の間ではないかと思っています。当時、私は明星学園高等学校（東京都三鷹市所在）の社会科学教諭でしたが、先輩会員のみなさんが経済学の教育実践をめぐって、熱心に語り合う姿に大いに刺激を受けたものです。

学会創設メンバーの藤岡さんは、この時四〇歳代半ばの働き盛り。独自の教育理論や実践上のアイデアを披露・提起するだけでなく、あるべき方向を指し示す若きリーダーであり、学会役員として要職を担われ、運営に腐心しておられました。学生が興味を持って日常の授業に参画するために何をなすべきか、と面倒を厭わずに工夫し続けた様子が強く印象に残っています。また、利害の対立する相手にも懐深く付き合っていくところも藤岡さんの凄いところです。われわれ凡人に真似の出来ることではなく、本当に頭が下がります。

現在に至るまで、藤岡さんは経済教育学会の中軸であり続け、教育理論家としても実践者としても価値ある仕事を積み重ねてこられました。こういった仕事を今後も続けていただきたいのはもちろんですが、加えてお願いしたいことは、藤岡さんならではの思想・着想・発想を世間に広く伝えていただくことです。これまで以上に執筆に注力し、何冊も刊行してもらいたいです。是非ご検討ください。出版社のみなさま、ご協力ご尽力を切に望みます。

具体的には、①経済概説書の執筆です。決まり切った従前からの枠組みのなかに、藤岡さんなら

ではの発想や視点を盛り込んでみるとどうなるのか、あえてやっていたいただきたいのですが如何でしょうか。②「藤岡さんの思想」を分かりやすくまとめた本。これは新書として廉価で出版したらどうでしょうか。③これまでの教育実践を教案として整理して、まとめたもの。われわれ後進が藤岡実践を真似するためにも必要です。④退職記念講義にちなんで、二一世紀版の『君たちはどう生きるか』の出版。題名をどうするかはともかく、次代を担う子ども達に読んでもらう書物をとにかく作りましょう。

思いつくままに、あれこれと書き進めて参りました。勝手な物言いではありますが、何とぞご寛恕ください。
(富山高等専門学校一般教養科准教授)

人間発達の道を探し求めて

吉田 省二

三月は学生・生徒にとって進級・卒業新しい門出を前にした、心ときめく季節だが、最近の日本経済は、学生達に前途の希望を与える代りに、それを遠ざけ拒否する状況にある。学校生活から遠ざかった世代にとっても、三月の思い出は、楽しく重く悲しい。

三・一独立運動記念日(一九一九年)・朝鮮民族独立運動の記念日であり、これを戦後工場から

（学校に戻って、サークル活動としての歴史学習の中で初めて知った。三・一ピキニデー（一九五四）…第五福竜丸だけでなく、四国九州の漁港から出港した遠洋漁船にとつても、今なお残る水爆実験の被害を、忘れてはいない。三月一日（二〇一一）…東日本大震災と、福島第一原発の破壊による被害が刻み込まれた日である。三月一三日・一七日（一九四五）…一〇日の東京大空襲に続く、大阪・神戸大空襲による大都市炎上が記念される日である。三月一〇日は、戦中世代にとつては、修身教育と共に刻み込まれた、「陸軍記念日・一九〇五年」日露戦争奉天占領記念の日でもあった。三月の前半月だけでも、これだけの経験が記憶されている。

竜谷大の奥野先生は、最近の大阪市の動きから「『民意』とは……いわゆる熟議意識の総体なのか、それとも……感覚的・情緒的ものなのかと言う論点は、それへの対処法が異なるだけに、軽視できない」と指摘されている。私も三月の記憶からそう考える。基礎研第五学科社会構成体論ゼミから、人間発達論ゼミへの藤岡先生のゼミの中で、社会の変革・発展は、担い手たる人間の発達なしにはあり得ない、と考えるようになった。

けれども大阪の情況のみならず、退職教職員として「憲法九条」を守る署名集めの、ささやかな行動の中でも、一人ひとりの市民の意識・市民感覚言というものの、つかみ所のなさに不安を感じることがある。署名を集めるものとしては、現状を危機的な状況にあると考えるけれども、相手は「そうですね！ 憲法の問題は難しいですね、考えさせてください」と応えて、署名を断られることがある。六〇歳を超えたばかりの戦後世代である。

このような経験から私は一九六〇年初頭の雑誌「教育」の記事を思い出した。「憲法改正の問題は早急にできるものではない。現在の十代後半以上の世代は、戦争の記憶があるから、再軍備を求める憲法改正は誰も賛成しないだろう。だが十代前半の世代から、戦争を知らない世代が、多数を占めるようになれば、憲法改正は不可能ではない。」と言う意味のことを、内閣調査室発行の調査月報の記事として紹介していた。これを読んだとき、それは何十年も先の、自分達には関係のない時代のことだと当時は思った。だが今日、当時の首相岸信介氏の孫さんが首相として盛んに「戦後レジームからの脱却」を唱え、憲法改定を唱えている。

基礎研のゼミに参加する中で、今も胸に刻まれている一言は「変革の主体形成」と言うことである。「労働者・農業者・自営業者この地上で働く全ての人」が、変革の主体にならなければ、と思う。「防衛力を持つ」と言う市民の基本的な権利を、お互いに守り合いながら、人間発達の道を探し求めたい。

(基礎研・人間発達ゼミ／元中学教員)

近江草津論と焼き芋騒動

吉田 真

藤岡さんとは、衣笠時代からの長い付き合いでした。彼も僕も一般教育科目の担当者だったので、

一般教育の理念や改革の進め方を巡って激論をした覚えもあります。彼と一緒に開講した「近江草津論」は、BKCの学生たちがこの地域を知り、大学と地域の共存共栄のあり方を探るといいうもので、さまざまなゲストスピーカーを呼びました。

藤岡さんは、困難をもととせずひたすらに前進するブルドーザーみたいなもので、この科目が人気講義となったのも、彼の熱意と努力のたまものです。僕は、彼の前向きな姿勢を高く評価しています。僕自身は、この授業を通じて多くの人々とお付き合いし、ユニークな人脈ができました。この人脈は僕にとっては宝物みたいなもので、それ以後もとても役に立っています。この点でも、藤岡さんに感謝しなければなりません。

数年前、うちの職員から面白い話を聞きました。BKCの端にある山沿いの地域で煙が出ており、大騒ぎになったのだそうです。駆けつけてみると、藤岡先生がゼミの学生たちと一緒に焼き芋を焼いていたのだそうです。「消火体制は万全ですから」と弁解された由ですが、職員は「そういう問題じゃないでしょう！」と怒っていました。まあ、僕なら、ばれないようにやりますが（笑）。

名物教授の藤岡さんが退職されるのは悲しいですが、特任教授になられる由。これからも学生たちに面白い講義を聞かせてやってください。長い間ご苦勞様でした。（立命館大学名誉教授 クモ学専攻）

アツちゃん先生への感謝状

吉山 保

定年退職おめでとうございます。これからは、先生の本当の人生？ 先ずは、今後のスケジュールを立てることが必要と思います。

私が先生を知ることになったのは、社会人学生として一九九七年に立命館大学経済学部に入学生したときに始まります。

当時、先生は、衣笠キャンパスの、平和ミュージアム企画局長をしておられました。

入学早々、見学して深い感銘を覚えました。

先生の講義は、平和学とアメリカ経済論だったと記憶しています。何れも二〇〇名以上の大講義だったと思っています。テストは何れも、論文提出だったので、テストの際は、採点が大変なご苦労があったと思われます。

先生と親密なご指導をいただくようになったのは、卒業後基礎研に入所以後で月一度のゼミナールで大変お世話になっております。

先生のご健康と、益々のご研究の発展をお祈りして、簡単ですがお礼の言葉とします。

(基礎研・人間発達ゼミ／社会保険労務士)

藤岡 惇教授 略歴・研究業績一覧

略歴

- 一九四七年 五月 京都市上京区で生まれる
一九六〇年 三月 京都市立生祥小学校卒業
一九六三年 三月 京都市立柳池中学校卒業
一九六六年 三月 私立洛星高等学校卒業
一九六六年 四月 京都大学経済学部入学
一九七〇年 三月 同上 卒業
一九七〇年 四月 京都大学大学院経済学研究科修士課程入学
一九七二年 三月 同上 卒業
一九七二年 四月 京都大学大学院経済学研究科博士課程入学
一九七五年 三月 京都大学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学
一九七六年 七月 八代学院大学経済学部専任講師（一九七九年三月まで）
一九七九年 四月 立命館大学経済学部助教授に就任（一九九〇年三月まで）

一九八四年 四月 立命館大学経済学部学生主事（一九八五年三月まで）

一九八八年 三月 学位請求論文『アメリカ南部の変貌―地主制の構造変化と民衆』により、
経
済学博士（京都大学）

一九九〇年 四月 立命館大学経済学部教授に昇任（現在に至る）

一九九二年 四月 同 経済学部調査委員長（九三年四月まで）

一九九三年 四月 同 経済学研究科主事（九五年四月まで）

一九九六年 八月 筑波大学客員教授（先端学際研究領域）を併任（一九九八年三月まで）

一九九六年 一月 立命館大学国際平和ミュージアム企画局長（一九九九年三月まで）

一九九九年 四月 立命館国際平和センター平和人権研究セクター長（二〇〇二年三月まで）

二〇〇五年 四月 同 国際平和ミュージアムメディア資料セクター長（現在に至る）

二〇〇八年 七月 学校法人立命館評議員（二〇一一年七月まで）

著作リスト（単行本にかぎる）

（1）単著

『グローバリゼーションと戦争―宇宙と核の覇権めざすアメリカ』 一―二五四頁、大月書店、二〇〇四／七

- ・『サンベルト米国南部―分極化の構図』一―二七六頁、青木書店、一九九三／四
 - ・『アメリカ南部の変貌―地主制の構造変化と民衆』一―二六五頁、青木書店、一九八五／一二
- (2) 共著(分担)

- ・『大地・生産手段への高次回帰と自由時間の拡大』村岡到編著『歴史の教訓と社会主義』二五六―二八〇頁、ロゴス、二〇一二／四
- ・『学生のやる気を引き出す地域連携―『持続可能な共生型社会』をめざす提言づくりの経験』(仲野優子さんとの共著)、清水亮・橋本勝編著『学生・職員と創る大学教育』一七六一―一八三頁、ナカニシヤ出版、二〇一二／二
- ・『原爆投下』の真実を求めて―ピーター・カズニックさんとの交流の思い出、木村朗・ピーター・カズニック『広島・長崎への原爆投下再考』一九九―二〇二頁、法律文化社、二〇一〇／一一
- ・『軍事経済から平和経済へ』君島東彦編『平和学を学ぶ人のために』三二八―三四六頁、世界思想社、二〇〇九／六
- ・『21世紀の世界を拓く『日本の道』』望田幸男ほか『国際平和と『日本の道』』昭和堂、八四―一〇六頁、二〇〇七／一〇
- ・『ディープ・ピース―平和の担い手を育む社会経済システムの探求』池上 惇・二宮厚美編『人間発達と公共性の経済学』桜井書店、二〇一―二二八頁、二〇〇五／七

- ・「WSFはダボス会議を変えつつある」村岡 到編『帝国をどうする―世界社会フォーラム5 日本参加者のレポート』白順社、二八一―五二頁、二〇〇五／六
- ・「軍縮の経済学」磯村早苗ほか編『いま戦争を問う―平和学の安全保障論』二二〇―二四〇頁、法律文化社、二〇〇四／六
- ・「自然のなかの社会と経済」角田修一編『社会経済学入門』一六四―一七六頁、大月書店、二〇〇三／九
- ・「平和的な経済のありかた―デンマークの事例」ヨハン・ガルトウング、藤田明史『ガルトウング平和学入門』法律文化社、一九六頁、二〇〇三／八
- ・「持続可能な日本づくりのアジェンダの提案」、森岡孝二ほか『21世紀の経済社会を構想する』桜井書店、一〇五―一六頁、二〇〇一／五
- ・「中村尚司報告へのコメント」芦田文夫他編『進化・複雑・制度の経済学』所収、九三―九七頁、新評論、二〇〇〇／三
- ・「班ごとのアクティブ・ラーニングを励ます授業」、経済学教育学会編『大学の授業をつくる―発想と技法』二二九―二三八頁、青木書店、一九九八／四
- ・「軍産複合体の作用」横田茂編『アメリカ経済を学ぶ人のために』四八一―八二頁、世界思想社、一九九七／一〇
- ・「高い人権水準は国際競争力を弱めるか―アメリカの社会運動の挑戦」川人博編『世界人権の旅』

- 一七五―一八〇頁ほか、日本評論社、一九九七／一
- ・虹の子クラブ編『ぼくら遊びのプロなんや―子育て協同組合の挑戦』（編者）かもがわ出版、一
一―二二、五一―七二頁、一九九三／七
- ・「核兵器と軍拡経済」経済学教育学会編『経済学ガイドブック』二五六―二六五頁、青木書店、
一九九三／六
- ・「現代の日米関係を考える」林堅太郎ほか編『新編・現代の経済社会―21世紀へのトレンドを考
える』一八三―二〇二頁、昭和堂、一九九一／三
- ・「資本主義はどこへいく―『本源的蓄積』章から考える」基礎経済科学研究所編『ゆとり社会の
創造』二二五―二四五頁、昭和堂、一九八九／九
- ・「民族の自立と連帯」基礎経済科学研究所編『講座・構造転換 第三卷…人間発達の民主主義』
一七七―一九六頁、青木書店、一九八七／七
- ・「アメリカ経済とSDI」日本科学者会議編『SDI―スターウォーズの科学・政治・経済』一
一七―一五八頁、大月書店、一九八七／四
- ・「生涯学習のすすめ」森岡孝二ほか編『入門・現代の経済社会―日本と世界の明日はどうなる』
二六四―二七五頁、昭和堂、一九八五／五
- ・「剰余価値の生産」、島恭彦監修『講座 現代経済学Ⅲ 資本論と現代経済（2）』一〇九―一四
二頁、青木書店、一九七八／一二

(3) 翻訳書

- ・経済優先度評議会『SDI—スタールウォーズの経済学』（角田知生さんとの共訳）、一―二二八頁、ミネルヴァ書房、一九八八／一二
- ・R・デイグラス『アメリカ経済と軍拡―産業荒廃の構図』一―一七七頁、ミネルヴァ書房、一九八七／四
- ・J・オコンナー『経済危機とアメリカ社会』（佐々木雅幸・青木郁夫さんなどと共訳、九一―一四八頁を担当）、御茶の水書房、一九八八／四

※その他の論文などは、藤岡惇のホームページ <http://www.peacefulbiz/> を参照してください。

私と世界とアッチャン先生

2013年4月20日 第1刷発行

編者 「藤岡 惇退職記念文集」編集委員会
(田中幸世／笠井弘子／松田文雄／
服部寿子／吉山保)

発行者 黒川美富子

発行所 図書出版 文理閣
京都市下京区七条河原町西南角 〒600-8146
電話 (075) 351-7553 FAX (075) 351-7560
<http://www.bunrikaku.com>

印刷所 新日本プロセス株式会社

